小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第10集

耳取城跡・古城遺跡

——長野県小諸市耳取城跡・古城遺跡発掘調査報告書——

1986. 3

佐久建設事務所
小諸市教育委員会

小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第10集

耳取城跡・古城遺跡

——長野県小諸市耳取城跡・古城遺跡発掘調査報告書——

1986.3

佐久建設事務所
小諸市教育委員会

耳取城跡全景

耳取城跡調査区全景

序　文

小諸市教育委員会
教育長　依田　公一

このたびの耳取城跡の調査は、県道伴野・小諸線バイパス建設に先立つものであります。これに関連するものに昭和54・55年の宮ノ北遺跡発掘調査があります。

調査期間は、昭和60年10月7日から、昭和61年3月まで延べ70日間を要しております。

検出された遺構は、平安時代の住居址2棟、諸般の状況から10世紀後半のものと推定いたします。また、中世の堀、溝、そして鉄鐸を棄てた廃鐸場などを確認いたしました。出土遺物には、石臼・釘・永楽通宝などの古銭や炭化したうるち米、炭化粟があります。

なお、耳取城といわれてきた城にかかわる遺構の状況につきましては、2度にわたる構築のあったことを推定いたします。

検出・確認された遺構・遺物など誠に僅かなものでありますが、その一つ一つに今から千年ほど前の人々の生活の姿を、おぼろげながら想像いたします。経済・技術などの文化の未発達な時代にあったにしても、当時の人々は、その時代なりきに精いっぱい力いっぱいに努力して生きたに相違ありません。ある時は喜び、ある時は悲しみ、生老病死の人間の生涯を送ったでありましょう。遺跡・遺物に接するたびに「夏草やつわものどもが夢のあと」の先人の思いに浸ります。

本調査に際し、ご指導ご助言頂いた県教育委員会文化課指導主事の先生方、長期にわたる発掘調査にあたられた小渕武一団長・花岡　弘学芸員、炭化米の鑑定にあたられた中川原捷洋氏、山浦　実調査員をはじめ地元耳取区の方々、快く作業に参加してくださった耳取老人クラブの皆さま、事業に対し深いご理解を頂いた地主の方々、関係する多くの皆様方に、心からお礼申しあげ、序にかえる次第であります。

例　言

1　本書は、昭和60年10月7日～昭和61年3月31日までにわたって発掘調査された、長野県小諸市大字耳取字古城に所在する耳取城跡・古城遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、佐久建設事務所の委託を受け、小諸市教育委員会が実施した。

3　本調査は、花岡　弘を発掘担当者とし、小諸市誌編纂委員、小諸市文化財審議委員、長野県考古学会員、有識者を調査員とし、地元耳取区の方々のご協力を得て実施した。

4　遺構実測図の作成にあたっては、新日本航業株式会社の協力を得た。

5　遺物実測図の作成および遺構・遺物実測図のトレースは、主に花岡　弘が行った。

6　遺構・遺物の写真撮影は、小渕武一・花岡　弘が行った。航空写真は新日本航業株式会社によるものである。

7　本書の執筆分担は、次のとおりである。
第II章1―小渕武一、第V章―永原秀山、第I章・第II章2、第III・IV章、第VI章―花岡弘、土壙一覧表・竪穴状遺構一覧表―早川　聖

8　本遺跡出土の炭化米については、農業生物資源研究所遺伝資源部　中川原捷洋先生の鑑定を受け、玉稿を賜った。ここに厚く御礼申し上げます。

9　本書の編集は、花岡　弘が行い、小渕武一がこれを校閲、監修した。

10　本遺跡の出土資料は、小諸市教育委員会の責任下において保管されている。

発掘調査および報告書作成に際しては、次の方々に御指導・御配慮・御協力を賜った。ここに御芳名を記して厚く御礼申し上げる。(順不同、敬称略)
小林　孚、太田喜幸、古谷義人、木内　寛、竹内安雄、林　幸彦、堤　隆、木村きぬ江、新日本航業株式会社

凡　例

1　各遺構の略号は、次のとおりである。
H――住居址、T――竪穴状遺構、M――溝状遺構、D――土壙、P――ピット

2　遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。
住居址・竪穴状遺構・土壙・ピット・溝断面図――1/80、堀・溝・トレンチ――1/100
遺構全体図――1/400

3　遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。
土器――1/4（第10図1のみ1/2）、石臼・石鉢――1/5、石製品・鉄製品――1/3、石鏃・古銭・土製円板――1/2

4　水糸レベルの原点は、次のとおりである。
Ⅰ地区――650.52 m、Ⅱ地区――647.41 m、Ⅲ地区――646.00 m

5　住居址実測図における点のスクリーントーンは、カマドを表す。

6　土器実測図における点のスクリーントーンは内黒土師器を示す。土製円板のスクリーントーンは、赤色塗彩を示す。

7　図版中、遺物の縮尺は次のとおりである。
土器――約1/4（第10図1のみ1/2）、石臼・石鉢――約1/5、石製品・鉄製品――約1/3、石鏃・古銭・土製円板――約1/2

8　出土土器一覧表の法量は、上から口径、高さ、底径の順に記載し、― 不明、(　　) 現存値あるいは復原値を表す。

本文目次

序　　文
例　　言
凡　　例
本文目次
付表目次
挿図目次
図版目次
Ⅰ　発掘調査の経緯……1
　1　調査に至る動機……1
　2　発掘調査の概要……2
　3　調査の経過……2
Ⅱ　遺跡の概観……4
　1　遺跡の自然的環境……4
　2　遺跡の歴史的環境……6
Ⅲ　層　　序……13
Ⅳ　遺構と遺物……14
　1　住居址……14
　　1）第1号住居址……14
　　2）第2号住居址……16
　2　城址に関わる遺構……18
　　1）第1号堀址……18
　　2）第2号堀址……21
　　3）第3号堀址……23
　　4）第4号堀址……24
　　5）第5号堀址……25
　　6）第1トレンチ……25
　　7）第2トレンチ……28
　　8）第3トレンチ……28
　　9）第4トレンチ……29
　　10）第5トレンチ……30
　3　竪穴状遺構……31

1）第1号竪穴状遺構……31
2）第2号竪穴状遺構……31
3）第3号竪穴状遺構……33
4）第4号竪穴状遺構……35
5）第5号竪穴状遺構……35
4　溝状遺構……36
1）第1号溝状遺構……36
2）第2号溝状遺構……37
3）第3号溝状遺構……38
4）第4号溝状遺構……38
5　土壙……39
6　ピット群……43
7　遺構外出土遺物……44
V　耳取城跡……45
VI　総　　括……50
付編　小諸市耳取城跡出土の炭化籾の判別について……59
引用参考文献……65

付表目次

第1表　耳取城跡とその周辺遺跡……6
第2表　耳取地区出土灰釉陶器一覧表……8
第3表　耳取城跡と周辺の城跡……10
第4表　第1号住居址出土土器一覧表……16
第5表　第2号住居址出土土器一覧表……18
第6表　第1トレンチ出土土器一覧表……28
第7表　竪穴状遺構一覧表……31
第8表　第2号溝状遺構出土土器一覧表……38
第9表　土壙一覧表……42
第10表　耳取城跡住居址一覧表……50

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　発掘調査経過図……3
第３図　遺跡付近の地質図……4
第４図　遺跡と周辺遺跡分布図……7
第５図　耳取城跡及び周辺城跡分布図……9
第６図　耳取城跡層序模式図……13
第７図　第１号住居址実測図……14
第８図　第１号住居址カマド実測図……15
第９図　第１号住居址出土遺物（A）……15
第10図　第１号住居址出土遺物（B）……15
第11図　第２号住居址実測図……17
第12図　第２号住居址カマド実測図……17
第13図　第２号住居址出土の土師器と須恵器……18
第14図　第１号堀址実測図……19
第15図　第１号堀址出土の石製品……20
第16図　第１号堀址出土遺物（A）……20
第17図　第１号堀址出土遺物（B）……21
第18図　第２号堀址実測図……22
第19図　第２号堀址出土の石臼……23
第20図　第２号堀址出土の古銭……23
第21図　第３号堀址実測図……23
第22図　第３号堀址出土遺物（A）……24
第23図　第３号堀址出土遺物（B）……24
第24図　第４・５号堀址実測図……25
第25図　第１トレンチ遺構実測図……26
第26図　第１トレンチ出土遺物（A）……27
第27図　第１トレンチ出土遺物（B）……27
第28図　第２トレンチ遺構実測図……29
第29図　第３～５トレンチ遺構実測図……30
第30図　第６トレンチ出土の鉄製品……30

第 31 図　第 1 ・ 2 号竪穴状遺構、第 1 ～ 6 号土壙実測図 …… 32
第 32 図　第 3 号竪穴状遺構、第 3 号土壙、第 1 号ピット群実測図 …… 33
第 33 図　第 4 号竪穴状遺構、第 7 ～12 号土壙実測図 …… 34
第 34 図　第 5 号竪穴状遺構実測図 …… 35
第 35 図　第 2 ・ 5 号竪状遺構、第 13 号土壙出土遺物 …… 36
第 36 図　第 1 号溝状遺構実測図 …… 36
第 37 図　第 2 号溝状遺構実測図 …… 37
第 38 図　第 2 号溝状遺構出土遺物 …… 38
第 39 図　第 3 号溝状遺構実測図 …… 38
第 40 図　第 4 号溝状遺構実測図 …… 39
第 41 図　第 13～18・20・23 号土壙実測図 …… 40
第 42 図　第 19・21・22・24 号土壙実測図 …… 41
第 43 図　第 2 号土壙出土の石臼 …… 43
第 44 図　第 22 号土壙出土の土製円板 …… 43
第 45 図　第 2 号ピット群実測図 …… 44
第 46 図　遺構外出土遺物 …… 44
第 47 図　耳取城略図 …… 49
第 48 図　第 I 地区遺構全体図 …… 51
第 49 図　第II・III地区遺構全体図 …… 52
第 50 図　耳取城跡実測図 …… 53・54
第 51 図　各郭（第 I ～III地区）の機能想定図 …… 56

図版目次

図版 1　1　遺跡遠景（北方より）
　　2　第 1 号住居址（東方より）
図版 2　1　第 1 号住居址掘り方（東方より）
　　2　第 2 号住居址（東方より）
図版 3　1　第 2 号住居址（北方より）
　　2　第 2 号住居址掘り方（東方より）
図版 4　1　第 1 号堀址（東方より）
　　2　第 1 号堀址東部（北方より）
図版 5　1　第 1 号堀址土層断面
　　2　第 2 号堀址（東方より）
図版 6　1　第 2 号堀址（西方より）
　　2　第 2 号堀址（南方より）
図版 7　1　第 2 号堀址（南方より）
　　2　第 3 号堀址（南方より）
図版 8　1　第 4 号堀址（北方より）
　　2　第 5 号堀址（北方より）
図版 9　1　第 1 トレンチ（第 1 次面、東方より）
　　2　第 2 トレンチ（西方より）

図版10　1　第2トレンチ（東方より）
2　第4トレンチ（第1次面、北方より）
図版11　1　第5トレンチ（第1次面、北方より）
2　第1号溝状遺構（南方より）
図版12　1　第2号溝状遺構（北方より）
2　第3号溝状遺構（西方より）
図版13　1　第4号溝状遺構（西方より）
2　第Ⅰ地区近景（南方より）
図版14　1　第1号竪穴状遺構（西方より）
2　第2号竪穴状遺構（南方より）
3　第4号竪穴状遺構（南方より）
4　第5号竪穴状遺構（南方より）
5　第1号土壙（西方より）
6　第2号土壙（南方より）
図版15　1　第5号土壙（南方より）
2　第6号土壙（西方より）
3　第7号土壙（東方より）
4　第8号土壙（北方より）
5　第9号土壙（南方より）
6　第10号土壙（西方より）
図版16　1　第11号土壙（東方より）
2　第12号土壙（東方より）
3　第12号土壙（西方より）
4　第13号土壙（西方より）
5　第13号土壙遺物出土状態
6　第14号土壙（北方より）
図版17　1　第15号土壙（東方より）
2　第16号土壙（北方より）
3　第17・18号土壙（南方より）
4　第19号土壙（東方より）
5　第20号土壙（東方より）
6　第21号土壙（北西より）
図版18　1　第21号土壙（北方より）
2　第22号土壙（南方より）
3　第22号土壙（西方より）
4　第23号土壙（西方より）
5　第24号土壙（東方より）
図版19　1　第1号堀址石臼出土状態
2　第1号堀址石臼出土状態
3　第1号堀址鉄釘出土状態
4　第2号堀址石臼出土状態
5　第3号堀址石臼出土状態
図版20　1　第3号堀址礫出土状態
2　第1トレンチ石鉢出土状態
3　第3トレンチ内耳土器片出土状態
4　第5号トレンチ礫出土状態
5　第2号土壙石臼出土状態
図版21　第1・2号住居址、第1号堀址出土遺物
図版22　第1～3号堀址出土遺物
図版23　第3号堀址、第1・5トレンチ、第2号溝状遺構、土壙出土遺物
図版24　第13号土壙、第1号堀址、遺構外出土遺物

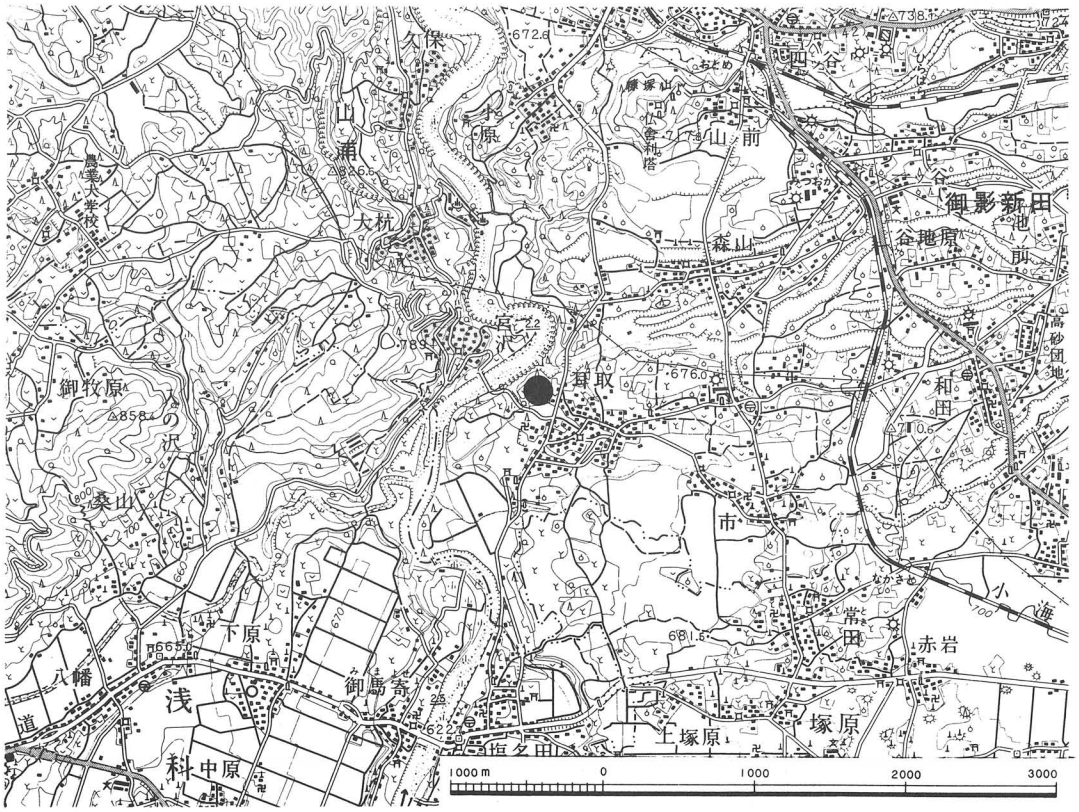
Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

佐久建設事務所は、県道伴野小諸線の交通量の激増による危険と渋滞を緩和するため、この路線に迂回道路の新設を計画した。以降、工事は順次進渉し、昭和61年度の施行予定区域の中に耳取城跡（古城遺跡）が含まれることになった。

このため、佐久建設事務所と長野県教育委員会文化課との協議をもち、その結果、緊急発掘調査を行い、記録保存することとなった。佐久建設事務所は、この調査を小諸市教育委員会に委託してきた。小諸市教育委員会は、協議の上、これを受託し、昭和59年度事業として詳細な城址の実測図の作成を行った。昭和60年10月1日耳取城跡発掘調査団を結成し、諸準備を整えて、10月7日より発掘作業を開始した。

（事務局）



第1図　遺跡の位置

2　調査の概要

○遺跡名　　耳取城跡（古城遺跡）

○所在地　　長野県小諸市大字耳取字古城

○調査期間　昭和60年10月7日～昭和61年3月31日

○調査に関する事務局の構成組織は下記のとおりである。

大工原久雄　　小諸市教育委員会教育次長

田中邦幸　　〃　　社会教育課長

相原邦司　　〃　　社会教育課長補佐

三浦邦夫　　〃　　社会教育係長

○調査団の構成組織は下記のとおりである。

顧　問　桑原　周　小諸市教育委員会教育委員長

依田公一　小諸市教育委員会教育長

団　長　小渕武一　小諸市文化財審議委員長、市誌編纂専任委員

担当者　花岡　弘　小諸市立火山博物館学芸員、日本考古学協会員

調査員　永原秀山、小宮山　敦、沼田正志、尾沼正三門、山口次郎、竹内ますみ、金井重忠、高瀬武男、成沢義春、長門忠次、小野山　清、井出喜八、山浦　実

調査補助員　早川　聖

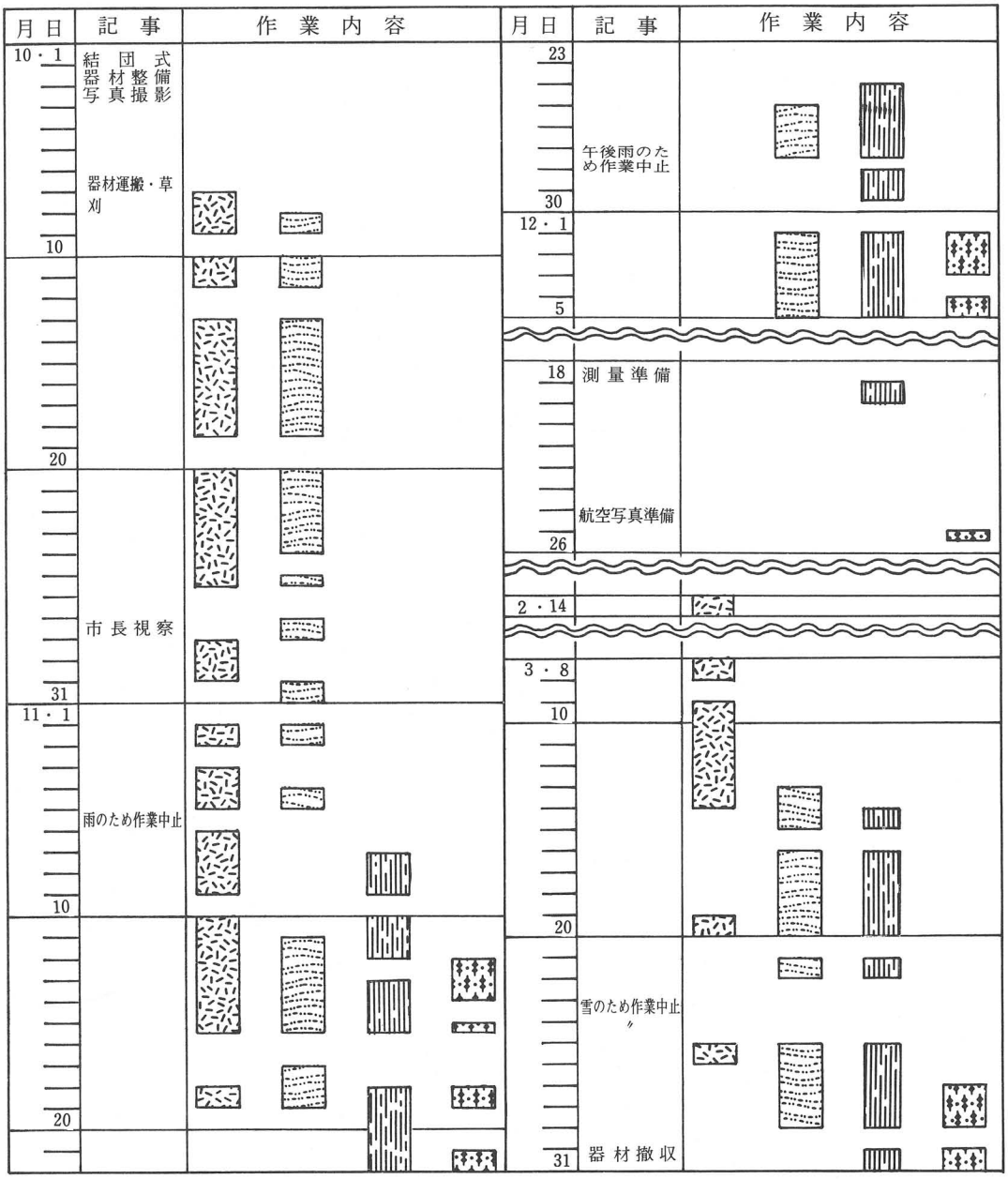
協力員　高橋　真（耳取区長）、依田辰夫（耳取老人会長）、山浦猛良（耳取公民館長）

参加者　工藤恵美子、小林　精、小林正巳、小林八千代、坂口　勇、桜井良美、佐藤君代、佐藤幸一、佐野志郎、高瀬けさ子、田中啓子、田中重人、三浦美奈子、山浦力弥、吉沢恒雄、依田中子、長門俊信、甘利俊明（遺物整理）、甘利邦子、白坂茂子

3　調査の経過

発掘調査は、昭和60年10月7日から3月31日までの70日間にわたって実施された。

この間の各作業経過については、第2図に示した。



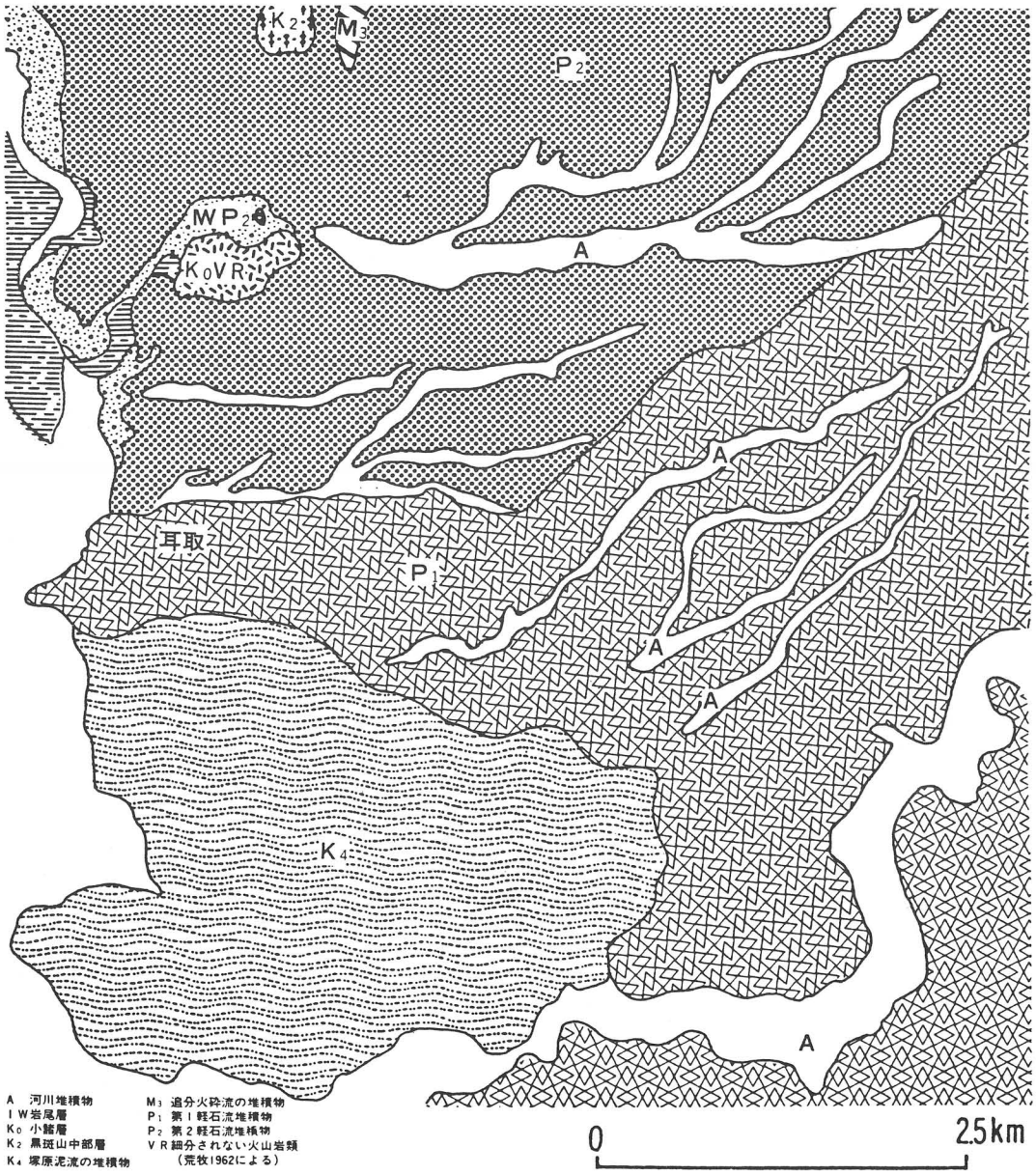
遺構検出作業　　実測

遺構の掘り下げ　　写真撮影

第２図　発掘調査経過図

II　遺跡の概観

1　遺跡の自然的環境



第3図　遺跡付近の地質図

耳取城跡は、小諸市耳取区字古城地籍を中心に隣接地は東久保田、下屋敷、北原、皿掛の小字があり、西は千曲川を隔てて川辺地籍の御牧が原台地と対峙し境した地である。

この地は、浅間山の第1軽石流（P_1）の堆積した末端で千曲川の断崖80～100 m上にあり標高はおよそ657 mで、東南方は黒斑山活動期の末期に起こった大規模な水蒸気爆発によって、成層火山体の東部が破壊され、大量に山麓に流下して生じたと言われる塚原泥流と第1軽石流が堆積している佐久平に続いている。

北は皿掛川の侵食によりできた深い谷で区切られ、南側は田切地形の深い谷となっている。東南方はゆるい上りの傾斜の平坦地に続き現在の耳取の集落地を形成し、集落の周辺は耕作地となっている高台である。

この地の水利については往時は相当多量の湧水があったと言われているが、現在は少量ながら自然湧水もある。このほかの水利は、『小諸市誌　歴史篇（二）』の付図、小諸市城館跡・主要堰図によると御影用水の末流水系の皿掛川から揚水して付近の水田を潤している。

遺跡の現況は、畑として耕作される地は果樹園があり一部には野菜も栽培されているが大部分は原野化している。急な斜面は殆ど山林となっているが平坦地にも林のある複雑な植生である。且て養蚕が盛んな頃は殆ど桑園であったが農業経営が変化し次第に現在の状態となったものであろう。野菜栽培が盛んな現在、平坦面が利用されないのは、田切り地形の上部は水利の不便に加えて、城跡の堀等が急斜面であり農道も狭く大型の農耕具が出入困難であるためであろう。

また戦時中には、田切りや堀の断崖面を利用して作られた防空貯蔵庫を目的とした隧道が各所に見られる。

この地の植生は、アカマツが多く成長も良く、戦前、隣接地に近い長林地籍はアカマツの美林がすばらしかった。平地林開墾により現在は畑地となっている。アカマツのほかカラマツ、クヌギ、コナラ、ケヤキ、ホオノキ、ヤマザクラ等が多く、またアズキナシ、キハダ、ネズミサシ等も見られる。

低木は、コマユミ、ニシキギ、ガスズミ、ダンコウバイ、ウグイスカグラ、アブラチャン、ヌルデ、ヤマウルシが多く見られる。

草木は、ススキ、チガヤ、ヨモギをはじめリュウノウギク、アワコガネギクが多く、この自然間種もある。村の中には、ササバギンラン、ホタルブクロ、ギボシ等が生育していた。

しかし、荒廃した畑地のヒメジョオンをはじめハルジオン、クワクサ等の外来植物が侵入し植生は変化しつつある。

原野山林などがあるためか現在では小鳥も多く、キジやシジュウカラ、また千曲川畔のためかトビ等の鳴き声も聞かれた。

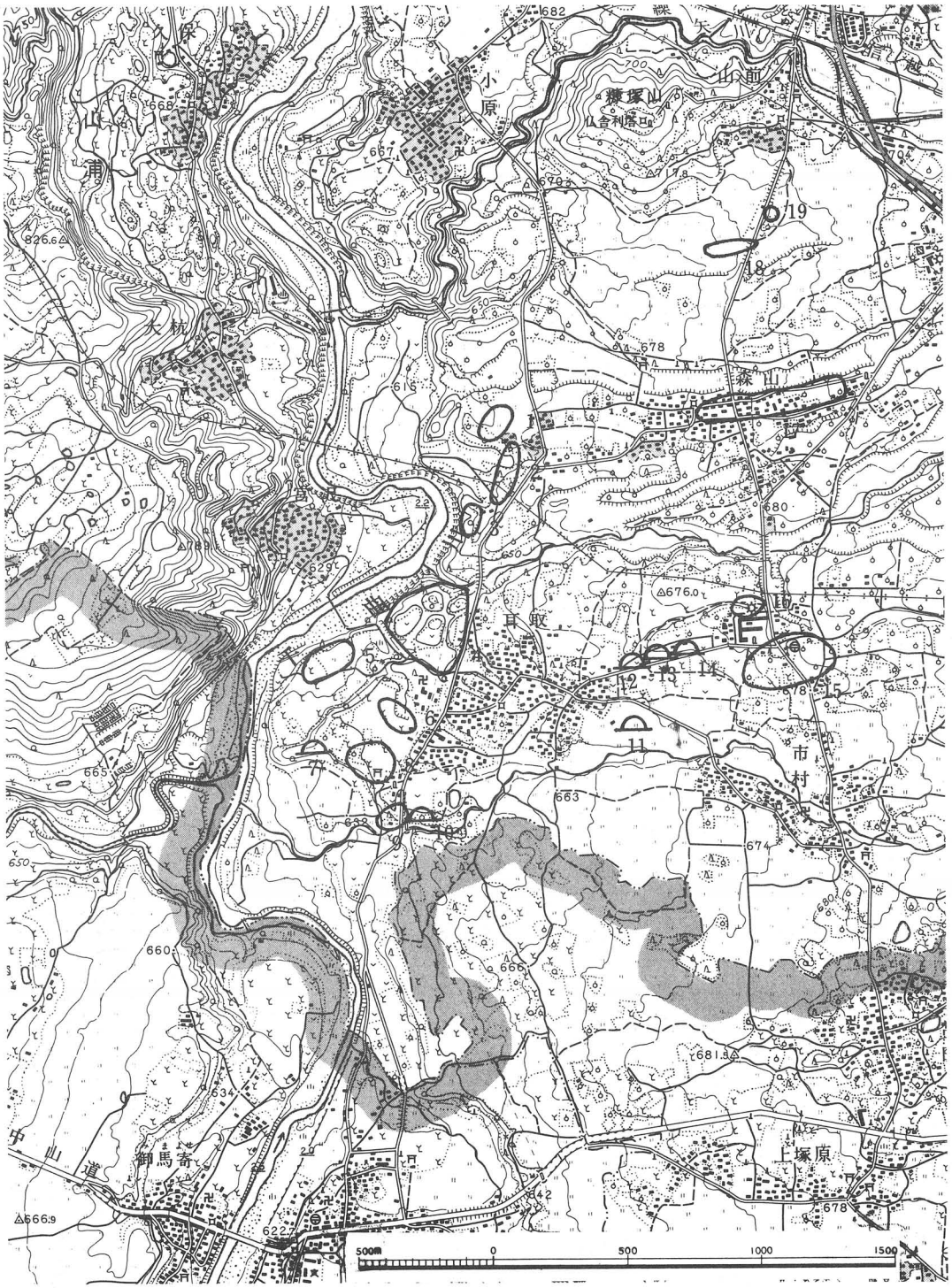
2　遺跡の歴史的環境

市内南部地域の遺跡の場合、その立地は、佐久平に特有な田切り地形をひかえた台地上に位置する場合が顕著である。以下、耳取城跡（古城遺跡）とその周辺遺跡について、時代・時期別に概観してみたい。

まず、縄文時代では、大林・長林・久保田・牛原遺跡があり、中・後期の土器・石器が出土している。このうち、久保田遺跡は、昭和25年に2回、昭和58年と3回にわたり発掘が行われている[(1)]。昭和25年最初の発掘では、敷石住居址と思われる遺構が検出されているというが、遺構・

第1表　耳取城跡とその周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古墳	歴	中世	備考
1	大林	大字森山字大林	台地	○		○	○		
2	長林	大字森山字長林	台地	○		○	○		
3	硲	大字耳取字硲	台地					○	
4	**耳取（古城）**	大字耳取字古城	台地				○	○	
5	久保田	大字耳取字久保田	段丘	○	○	○	○		昭和25年・58年5月～8月
6	宮ノ北B	大字耳取字宮ノ北	台地			○	○		
7	宮ノ下古墳	大字耳取字宮ノ下	台地			○			痕跡をとどめず
8	宮ノ北A	大字耳取字宮ノ北	台地			○	○		昭和54年8月・昭和55年11月調査
9	宮ノ前	大字耳取字宮ノ前	台地					○	
10	宮ノ前古墳	大字耳取字宮ノ前	台地			○			わずかに痕跡を残す
11	耳取大塚	大字耳取字塚ノ前	平地			○			市指定古墳
12	西十文字古墳	大字耳取字五ケ865	台地			○			わずかに痕跡を残す
13	十文字古墳	大字耳取字五ケ902	台地			○			内部主体不明
14	東十文字古墳	大字耳取字五ケ902	台地			○			痕跡をとどめず
15	五ケ城	大字市字五賀、五ケ城	台地		○	○	○	○	昭和55年7～10月調査
16	牛原	大字耳取字牛原	台地	○			○		
17	矢田頭	大字森山字矢田頭他	台地				○		
18	関口A	大字甲字関口	台地				○		
19	関口B	大字甲字関口	台地			○	○		昭和54年2～3月調査



第４図　遺跡と周辺遺跡分布図

第２表　耳取地区出土灰釉陶器一覧表

No.	遺跡名	住居址	器種	窯址	時期
1	宮ノ北	第３号住居址	高台付椀	不明	不明
2	五ヶ城	第８号住居址	段皿	東濃	大原２、10世紀後半
3	五ヶ城	第11号住居址	段皿、高台付椀	東濃	大原２、10世紀後半
4	五ヶ城	第１号竪穴状遺構	高台付椀	東濃	大原２、10世紀後半
5	久保田	Ｈ１号住居址	耳皿	東濃	虎溪山１、11世紀前半

遺物の実測図は残されておらず、その報文上において知り得るのみである。なお、出土遺物としては、石皿・打製石斧・石棒・石剣・石鏃があったという。しかしながら、その所産期については報文中では触れられていない。以上が、第１回の発掘の概略である。続く第２回の発掘調査では、弥生土器が主体をなし、竪穴住居址が検出されているが、これも、その詳細は明らかでない。

第３回の調査は、昭和58年に「農村地域定住促進対策事業小規模構造改善事業」に伴い行われ、縄文時代では13棟の住居址が検出された[(2)]。内訳は中期３棟、後期10棟である。敷石住居址は、計６棟あり、このうち、柄鏡形礫堤住居址[(3)]が１棟検出されている。この住居址は、東西1,310㎝（張り出し部を含む）、南北940㎝を図る大形住居址で、所産期は堀ノ内期と考えられる。

縄文時代の遺物には、土器類のほか、石鏃・打製石斧・石棒・石冠・石皿・磨石等の石器類、硬玉製大珠、滑石製垂飾、土偶、土製円板が出土している。

弥生時代では、後期箱清水期の住居址が、五ヶ城・久保田遺跡で各々１棟ずつ検出されているほか、宮ノ北遺跡で土器片が出土している。

墓制では、久保田遺跡において該期の方形周溝墓が１基検出されている。

弥生時代末から古墳時代前期では、久保田遺跡において２棟の住居址と２基の円形・方形周溝墓が検出されている。出土土器の様相は、箱清水式土器の系譜にあるもののほか、東海系土器が認められた。特に、弥生時代から古墳時代への移行を知る上で貴重な資料と言える。

古墳時代前期・中期は、久保田遺跡で４棟が検出されているが、このうちＨ５号住居址は、東西758㎝、南北899㎝を測る中期の大形住居址で、土師器のほか、須恵器甕、剣形の石製模造品、勾玉、臼玉が出土している。

後期にはいると、台地上の遺跡分布が顕著となってくる。また、この時期は、いわゆる後期古墳群の築造と大きく関連する時期でもある。先に調査された関口Ｂ[(4)]・宮ノ北[(5)]・五ヶ城[(6)]・久保田遺跡においても見られたように、古墳時代後期・平安時代と２時代にわたって複合する例が多くなっており、該期の資料は、平安時代の土器とともに資料数が増加しつつある。後期前半の住居址は五ヶ城遺跡で３棟、後半は関口Ｂ遺跡で３棟、宮ノ北遺跡で２棟、久保田遺跡で５棟検出されている。

一方、古墳は、本遺跡の周辺にもいくつかの存在が知られている。むかし、火の雨が降った時村人が逃げ込んだという伝説が残されている耳取大塚古墳[(7)]（市指定）をはじめ、東十文字・十文

第５図　耳取城跡及び周辺城跡分布図

第３表　耳取城跡と周辺の城跡

地図No.	名称	所在地	立地	現況	規模（m×m）形状	残存状況	存続期間（推定伝承）	築・在城者（推定・伝承）	文献（「　」原典史料）	地名	遺構・遺物・絵図等	備考
1	繰矢川城（くりやがわ）	小諸市大字甲字中島	台地	山林	125×80 単郭	不良						住宅造成等により原形を失う。
2	塩川城	小諸市大字甲字城の内他	丘陵	山林 耕作地	200×125 複郭	不良	（室町）～戦国	大井氏	町村誌、小諸温故	笹之輪篭、烏在家、城ノ内		
3	北ノ城	小諸市大字耳取字北ノ城	丘陵	耕作地	250×100 複郭	不良	～戦国		旧三岡地区資料	八幡在家、塩川、硲		耳取城北方の備えのための砦か。
4	硲（はぼま）城	小諸市大字耳取字硲	丘陵	山林	33×30 単郭	やや不良	～戦国	平井氏 山浦氏	旧三岡地区資料	硲、塩川、八幡在家、北ノ城		耳取城に登る要衝を押える砦か。
5	西（にし）城	小諸市大字森山字西城	平地	耕作地 宅地	65×40 単郭	不良	～戦国	森山氏	町村誌、北佐久郡誌			森山城西方の備えか。
6	森山城	小諸市大字耳取字古城	台地	山林 耕作地 空地	500×200 複郭	やや不良	～戦国	大井氏	町村誌、北佐久郡誌、旧三岡地区資料	西城、宮前、南屋敷、川内屋敷	旧正安寺仏像	伝承地
7	**耳取城**	小諸市大字耳取字古城他	台地	山林 耕作地 空地	500×200 複郭	やや不良	～戦国	大井氏	町村誌、北佐久郡誌、旧三岡地区資料	古城		別称－鷹取城
8	玄江院館	小諸市大字耳取字宮ノ北	平地	山林 寺境内	200×150 単郭	やや不良	～（室町）	大井氏		宮ノ北、東久保田、古城		
9	五ケ城	小諸市大字耳取字五ケ城	平地	耕作地	40×30 単郭	不良	～戦国	曽根氏	旧三岡地区資料、五ケ城遺跡発掘報告書			土地改良事業後原形をとどめない。
10	大井館	小諸市大字耳取字五領	山麓	耕作地	100×70 単郭	不良	（鎌倉）	大井氏	四隣譚藪「桃源院記」	五領（霊）白合（しらせ）		五霊の館
11	東城	小諸市大字和田字和田	台地	山林	20×20 単郭	不良	～戦国	大井氏	北佐久郡誌	穴和田、権現堂、東城、油久保、西ノ宮、古屋敷		耳取城の東の城
12	五領城（浅科村）	小諸市大字耳取字五領、浅科村塩名田	丘陵	耕作地 墓地	72×36 単郭	不良	～戦国		旧三岡地区資料	五領（霊）白合（しらせ）		耳取城南方遠見城か、浅科村、境界上
13	御馬寄城（みまよせ）	浅科村大字御馬寄字城	台地	耕作地 宅地	72×36 単郭	不良			町村誌	城山、城の腰、城の上		呼称－古城

字・西十文字・宮ノ下・宮ノ前といった古墳があるが、中には、東十文字・宮ノ下古墳のように痕跡をとどめないものもある。しかしながら、これらの古墳といわゆる集落址との関係は明らかにされるまでに至っていない。

続く奈良時代では、該期の住居址の調査例が増加しつつある。宮ノ北遺跡で1棟検出されたほか、市内東部の曽根城遺跡・宮ノ反遺跡で知られてきており、該期編年の細分資料が増えつつある。

平安時代については、先述したように、古墳時代後期と並んで、遺跡数において一つのピークを形成するようである。住居址は、関口B遺跡で2棟[8]、宮ノ北遺跡で6棟、五ヶ城遺跡で11棟、久保田遺跡で4棟検出されている。このうち、五ヶ城遺跡第9号住居址から銅銙が出土している。

また、灰釉陶器は、第2表に示したように、宮ノ北、五ヶ城、久保田遺跡で出土している。

降って、中世では、第3表・第5図に示したように耳取城を中心として、いくつかの城館址が知られており[9]、特に、耳取城跡は、堀等の遺構が良く残されている。また、本遺跡南方の玄江院には、居館址と考えられる遺構が認められている。さらに、五ヶ城遺跡においても居館址に伴うと考えられる堀址が検出されている。

一方、当地域には、いくつかの口碑伝説が残されている[10]。

耳取　耳取（三岡村）というのは御牧の駒の逃げたのを、耳を取って捕らえたことから名づけられたものだという。

狭（硲）　三岡村耳取の玄江院から小諸道を北へ距ること7丁、長林の南端から西へ分かれて入る道がある。これは下街道といって、湯の瀬・小諸を経て六道へ出ている。旧小諸街道で、この道を約五丁程入った所を狭といって、大井候（天正年間）の刑場の在った所である。その頃、斬に処せられた罪人の所持金を以て、田口村（南佐久郡）新海神社の三重塔を創設したという。

耳取神社　三岡村耳取神社は天文の頃迄は諏訪神社と称して、現在の神社より約7町南、小諸街道から40間程入った所の、五領地籍に在ったが、天文15年に兵火に逢って焼失したという。現在その跡に石の祠がある。耳取神社の御神体として木像が2体安置されているが、これは村上天皇の皇子の従者が刻んだものだと言われている。

玄江院　耳取の玄江院は以前は五領地籍にあったが、その頃は万福寺といっていた。開山は体中玄帛と言う僧だという。その後変災に逢って堂塔が頽廃したので、時の城主大井民部が現在の寺を移し、己の隠居所の名をとって玄江院と言う様になったと言う。万福寺の跡には今尚碑石がある。

玄江院は昔宮下地籍（耳取神社の西南約1町）にあった。それ故薬師面が八塚（一塚は凡8・90坪）程桑畠となって残っている。

鷹取城（耳取城）　小諸市耳取の鷹取城は小諸街道の断崖に限られ、南は橋から約2丁（約200メートル）南の田切りに至り、西は千曲の絶壁に望んでいた。寛元年間（1243～1247）大井光長の築城で、その四男行氏から累世の居城であったが、天正18年（1590）8月大井政成、上野（群馬県）

へ国替(がえ)となって廃城となった。八つの出城を以て固められたという。(小林貞市 46)

鷹取城の城主大井信濃守は、武田信玄と休戦の約束が出来たので、大晦日の晩に餅をついて平賀某と共に祝っていた。そこへ不意に信玄が夜討ちをかけてきたので、ついにかなわずに降参した。このとき山浦玄蕃(げんば)(大井氏の家老)も城主と共に降参したので、その子孫は明治初年まで、「晦日餅をつけば赤くなる。」といってつかなかったという。(山浦元治 77)

註

1. 今井泰男　1950　「人文地理学上より見たる三岡村耳取遺跡に就いて」(与良　清編　1974　『小諸市誌　考古篇』所収)
2. 小諸市教育委員会　1984　『久保田』
3. 神村　透氏の御教示による。
4. 小諸市教育委員会　1980　『関口Ｂ』
5. 小諸市教育委員会　1980・1981　『宮ノ北＜第１次・第２次＞』
6. 小諸市教育委員会　1981　『五ヶ城』
7. 北佐久教育会編　1934　『北佐久郡口碑伝説集』　信濃毎日新聞社による。
8. 関口Ｂ遺跡の報告書では、第４号住居址の所産期を国分期としたため、総数３棟としたが、その後の検討により、曽根城遺跡の報告書で、古墳時代末から奈良時代と訂正した。したがって２棟となっている。小諸市教育委員会　1983　『曽根城』
9. 長野県教育委員会　1983　『長野県の中世城館跡分布調査報告書』
10. 前掲註７に同じ。

III　層　　序

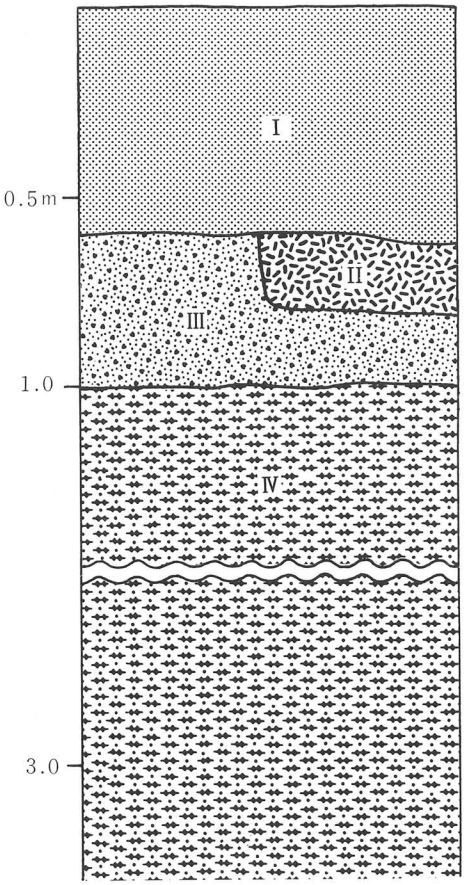
第Ⅰ層　　耕作土層（表土）

第Ⅱ層　　黒色土層（暗茶褐色土層）

第Ⅲ層　　黄褐色土層

第Ⅳ層　　暗赤褐色土層

第Ⅴ層　　暗緑黄色土層



第６図　耳取城跡層序模式図

耳取城址は、田切りと皿掛川にはさまれた台地上に位置し、南側は断崖となって千曲川に接している。

標高は、第Ⅰ地区・第Ⅱ地区・第Ⅲ地区いずれも大差はなく、およそ645～650ｍである。

第Ⅰ層は、耕作土もしくは表土である。

粒子は細かく、粘性はない。吸水性に富んでいる。層厚は、およそ15～100㎝である。第Ⅱ層は、遺構覆土にあたる。遺構によって異なるが、黒色土層あるいは暗茶褐色土層に大別される。

第Ⅲ層は、第１軽石流（P_1）の頂部にあたる。黄褐色を呈し、吸水性に富んでいる。いわゆる地山で、遺構は、この第Ⅲ層上面において確認されている。

第Ⅳ層は、暗赤褐色を呈する。非常に堅く引き締まっている。

第Ⅴ層は、暗緑黄色を呈する。土質は、第Ⅳ層と大差ないが、より引き締まり、堅緻である。第Ⅰ・Ⅱ地区の堀址は、第Ⅴ層まで掘り込んで構築されている。

第Ⅲ層以下は、遺物は包含されていない。

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居址

1）第1号住居址

遺構（第7・8図、図版1・2）

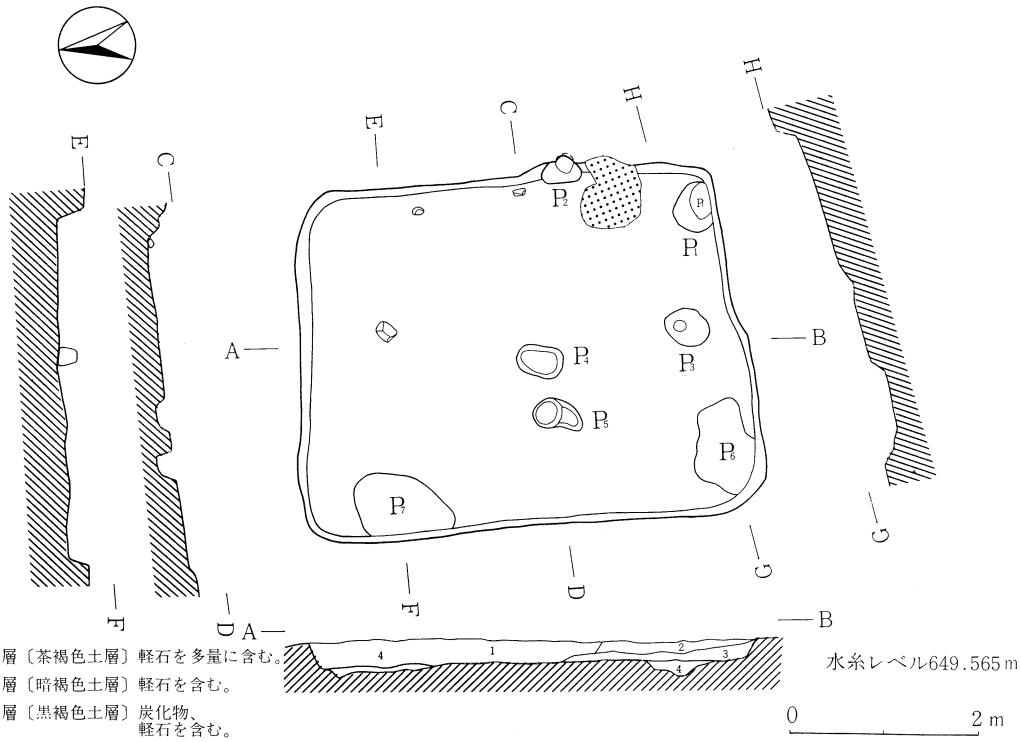
本住居址は、第II地区東部に位置し、全体層序第III層上面において確認された。東西368㎝、南北470㎝を計測し、主軸方位は、E－5°－Sを示す。他遺構との重複関係はない。

平面形態は、南北に長い隅丸長方形プランを呈する。

確認面からの壁高は、6～20㎝を測り、壁は比較的急角度に立ち上がっている。

遺構覆土は、3層に区分されるが、大半は茶褐色土層により充填されている。

床面は、中央部が堅緻であったが、壁際は軟弱であった。床面は、黒色土とブロック状の地山



第1層〔茶褐色土層〕軽石を多量に含む。
第2層〔暗褐色土層〕軽石を含む。
第3層〔黒褐色土層〕炭化物、軽石を含む。
第4層〔黒褐色土層〕炭化物、軽石、地山ブロックを含む。

第7図　第1号住居址実測図

を用いて貼床がなされている。中央部は薄く、壁周辺部で厚くなっている。

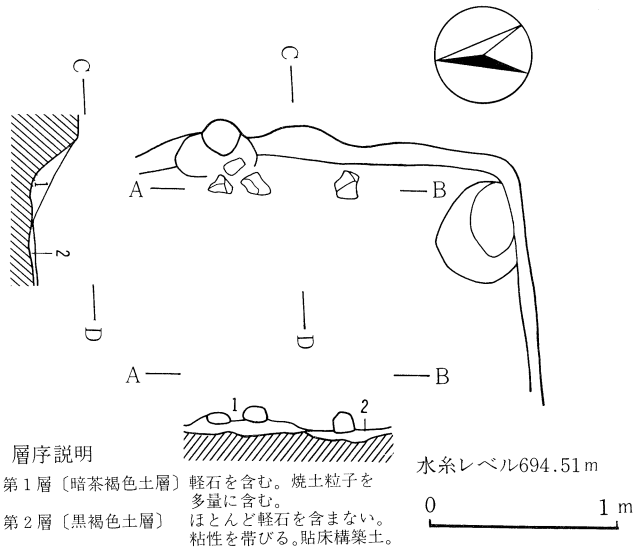
カマドは、東壁南寄りに位置する。

遺存状態は悪く、構築材として用いられたと考えられる礫の外、焼土が認められたのみであった。

ピットは、総計5基検出されているが、柱穴と断定できるものはない。

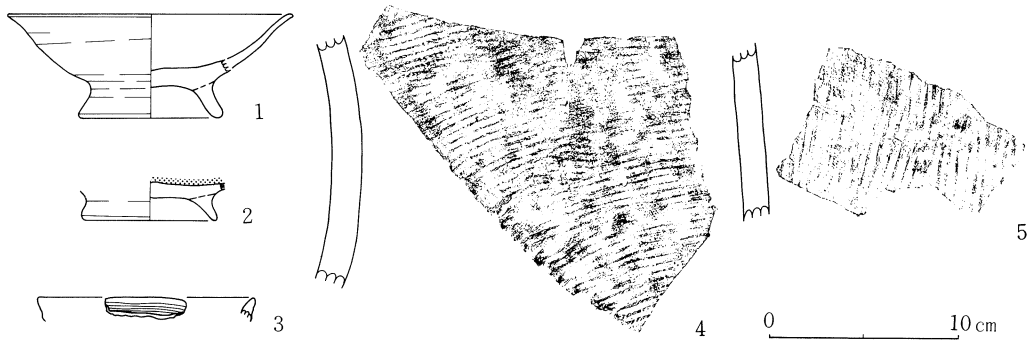
また、P_1は、位置から推して貯蔵穴の可能性がある。

なお、周溝等の施設は検出されなかった。



第8図　第1号住居址カマド実測図

遺物（第9・10図、図版21）

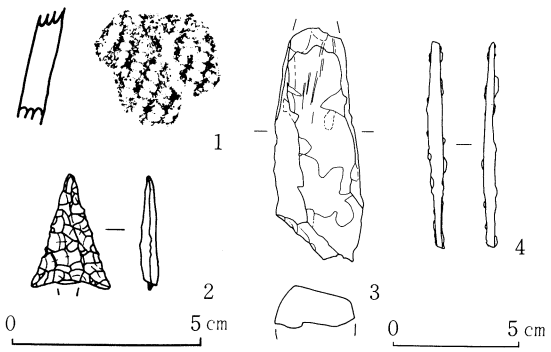


第9図　第1号住居址出土遺物(A)

本住居址からは、土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・縄文土器片、銅器片、鉄製品、砥石、石鏃が出土している。これらのうち図示したものに、土師器高台付杯・須恵器片・縄文土器片、銅器片、鉄製品、砥石、石鏃がある。

土師器高台付杯（第9図1・2）には、内黒のものとそうでないものの2点がある。内黒土器の量は総じて少ない。また、図示しなかったが平底の杯も存在する。

須恵器片（第9図4・5）は2点あり、いず



第10図　第1号住居址出土遺物(B)

れも、甕の胴部片である。御牧原窯址群の製品であろう。

銅器の破片（第9図3）は、椀の口辺部と考えられる。器の口径は推定値で、11.4㎝を測る。

カマド付近床直上から出土した。口辺部には2条の沈線が巡っている。当地方では類例がなく、今後の資料の増加に期待したい。

砥石（第10図3）は、流紋岩製で重さ72gを計る。

鉄製品（第10図4）は、不明確であるが、たがねあるいは、鉄鏃と考えられる。

縄文土器片（第10図1）は、深鉢の胴部辺である。後期の所産であろう。

石鏃（第10図2）は、カマド付近の床面から出土した。茎部を欠いている。和田峠産の黒曜石を用い、重さは1.0gを計る。

本住居址の所産期は、図示し得なかったが、東濃窯産の灰釉陶器が出土していることから、平安時代中葉に比定される。

註

1　形態に若干の差異があるが、同様な例が、小諸市宮ノ反遺跡第10号住居址から出土している。
宮ノ反例は、時期が若干遡り、奈良時代末から平安時代初頭に比定されている。
小諸市教育委員会　1985　『宮ノ反』

第4表　第1号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	法　量	器形の特徴	調　整（外面）	調　整（内面）	備　　考
9－1	高台付杯	(15.0) 5.5 7.5	口辺部は外反する。	ロクロナデ。 糸切り。(貼り付け高台)	ロクロナデ。	暗茶褐色。口辺部約½欠損。
9－2	高台付杯	—— 5.9 2.1		ロクロナデ。糸切り。	黒色研磨。	暗褐色。口辺部を欠損。
9－4	須恵器甕	—— (17.2) ——		タタキ。	ヘラナデ。	灰色。
9－5	須恵器甕	—— (8.9) ——		タタキ。	ヘラナデ。	灰色。
10－1	深鉢	—— (3.0) ——		縄文（LR）。 沈線。	ナデ。	暗赤褐色。

2）第2号住居址

遺構（第11・12図、図版2・3）

本住居址は、第II地区東部に位置し、全体層序第III層上面において検出された。第2号溝状遺

構、第２号堀址と重複関係を有し、第２号溝状遺構により南部を、第２号堀址により西部を切られている。規模は、残存値で、東西318㎝、南北300㎝を計測し、主軸方位は、E－13°－Sを示す。

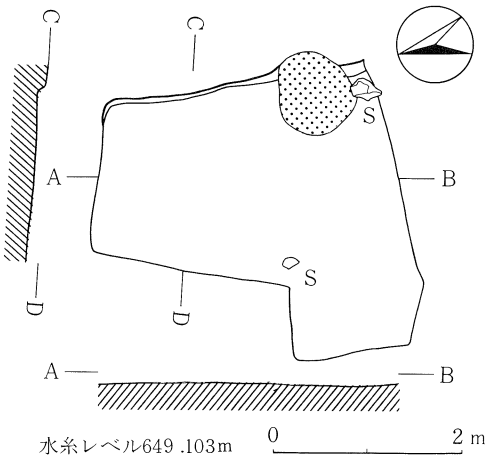
平面形態は、残存部から推して隅丸長方形を呈するものと思われる。

確認面からの壁高は、最深部で7.5㎝を測る。住居址覆土は、茶褐色土により充塡されている。

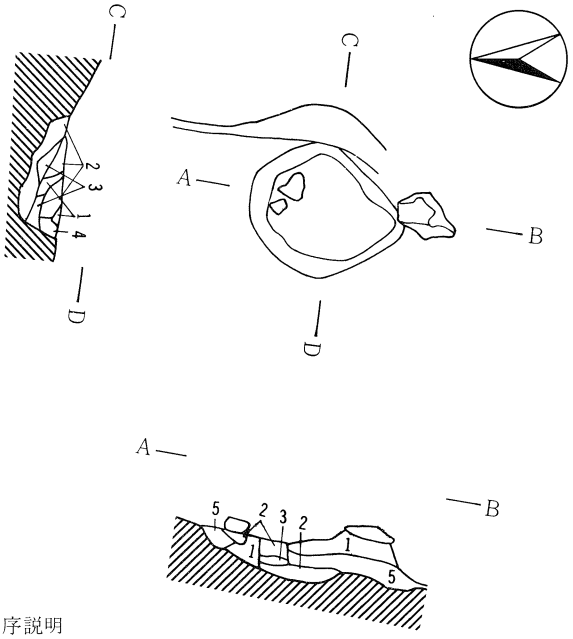
床面は、中央部は堅緻であったが、壁際は軟弱であった。また、貼床は残存部全面に認められ、第１号住居址と同様、中央部が薄く、壁周辺部で厚くなっている。

カマドは、東壁に位置する。遺存状態は悪く、構築材として用いられたと考えられる礫の外、焼土が認められたのみであった。カマド切開時の所見では、火床部の下部で焼土が認められたことから、再構築されている可能性も考えられる。

なお、ピット、周溝等の設置は検出されなかった。



第11図　第２号住居址実測図



層序説明

第１層〔暗赤褐色土層〕焼土粒子を多量に含む。
第２層〔明赤褐色土層〕焼土層。
第３層〔黒色土層〕　軽石を全く含まない。
第４層〔黒褐色土層〕　ローム粒子、軽石を含む。
第５層〔黒褐色土層〕　小軽石を含み、引き締まっている。
貼床構築土。
第１～５層　いずれも砂質。

水糸レベル649.15m

0　1m

第12図　第２号住居址カマド実測図

遺物（第13図、図版21）

本住居址からは、土師器片・須恵器片・灰釉陶器片、鉄鏃が出土している。

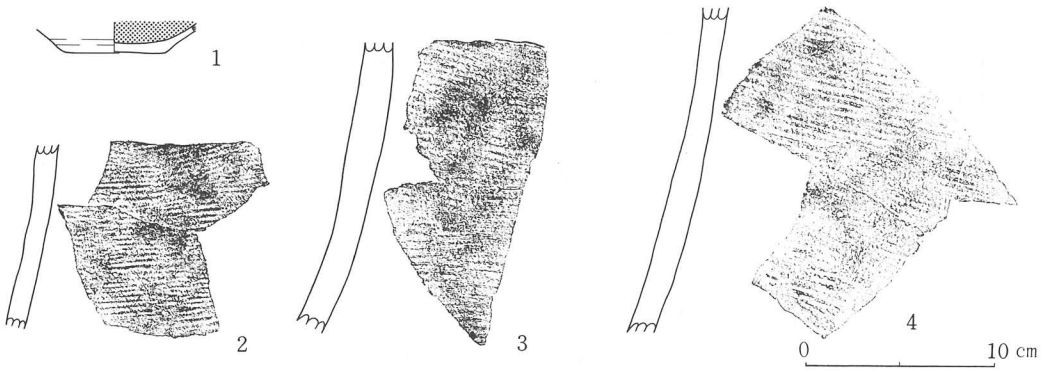
このうち、図示したものに、土師器杯、須恵器甕片３点がある。

土師器杯（第13図１）は、内黒のもので糸切り底を有する。

須恵器甕片（第13図２～４）は、地元御牧原窯の製品であろう。いずれも焼成は悪い。

本住居址からも、第１号住居址と同様、東濃窯産と考えられる灰釉陶器片が出土している。

したがって、所産期は、第１号住居址と同時期の平安時代中葉と考えられる。



第13図　第２号住居址出土の土師器と須恵器

第５表　第２号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器形	法　量	器形の特徴	調　整（外面）	調　整（内面）	備　　考
13－１	杯	―― (1.65) 5.4	平底。	ロクロナデ。 糸切り。	黒色処理。	暗茶褐色。
13－２	須恵器甕	―― (10.3) ――		タタキ。	ヘラナデ。	灰色。
13－３	須恵器甕	―― (16.3) ――		タタキ。	ヘラナデ。	灰色。
13－４	須恵器甕	―― (17.7) ――		タタキ。	ヘラナデ。	灰色。

2　城跡に関わる遺構

1）第１号堀址

遺構（第14図、図版４・５）

第Ⅲ地区に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第１～３号竪穴状遺構と重複関係を有しているが、前後関係については不明確であった。

遺構は、北東部から西部にかけ」形に巡り、北東部で一端切れており、陸橋の役目を果たしていたと考えられる。調査範囲内での数値は、全長12.92ｍ、幅2.6～6.5ｍ、確認面からの深さは最深部で1.15ｍを測る。

遺構覆土は、第14図土層断面図に示したように耕作土層を除き、９層に区分される。上部の大

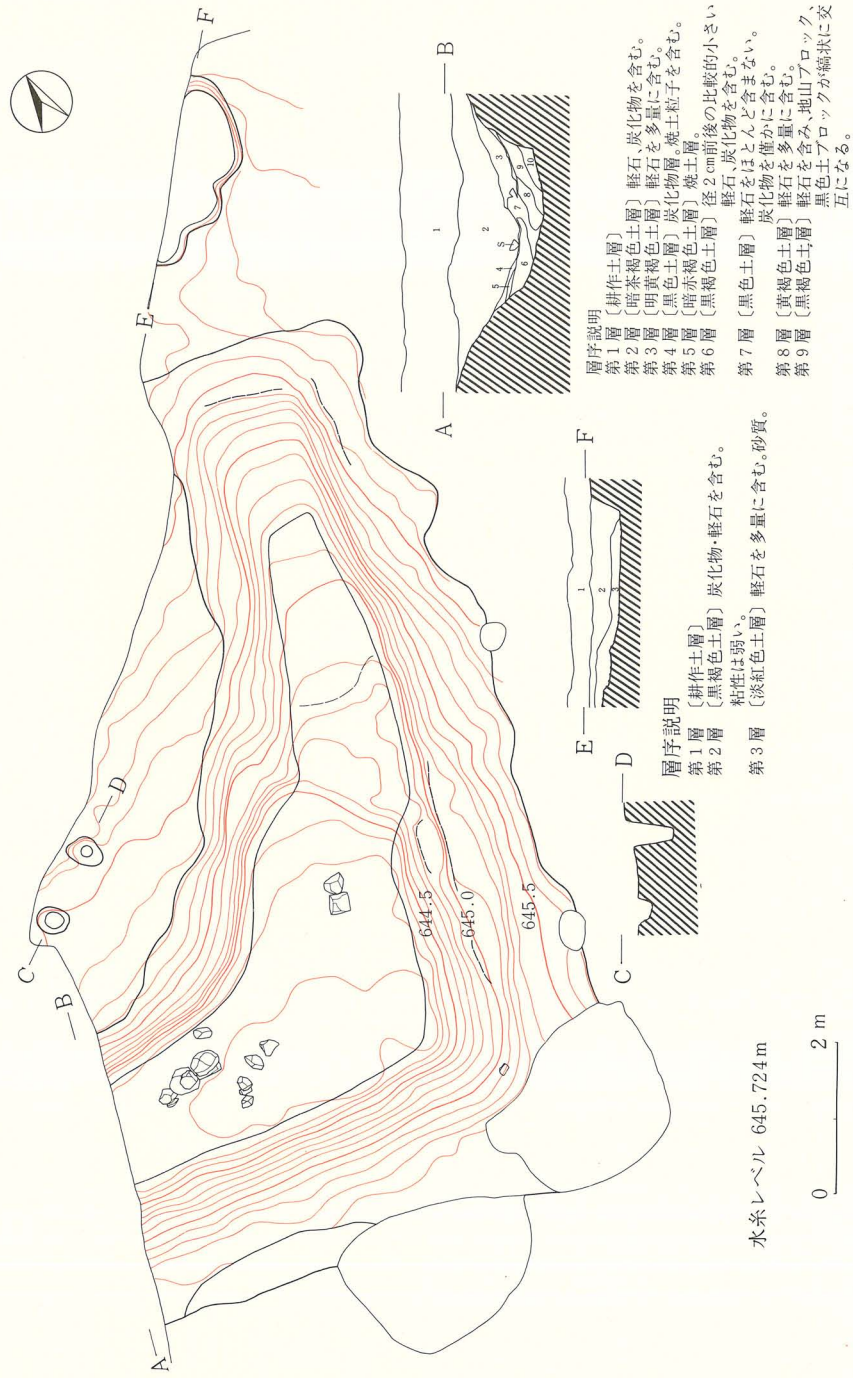
半は第2層により充填されている。

下部は、炭化物を含む層と地山に近い層とに大別される。第3～10層は、自然堆積ではなく、人為的なものと考えられる。

堀底面および壁は火熱を受けた痕跡は認められなかった。

土層断面の観察、炭化物(材)の出土状況及びその後の検討により、調査範囲外であるが堀で囲まれた建物を焼いた後、堀へ廃棄し、地山等の土を埋めたものと考えられる。

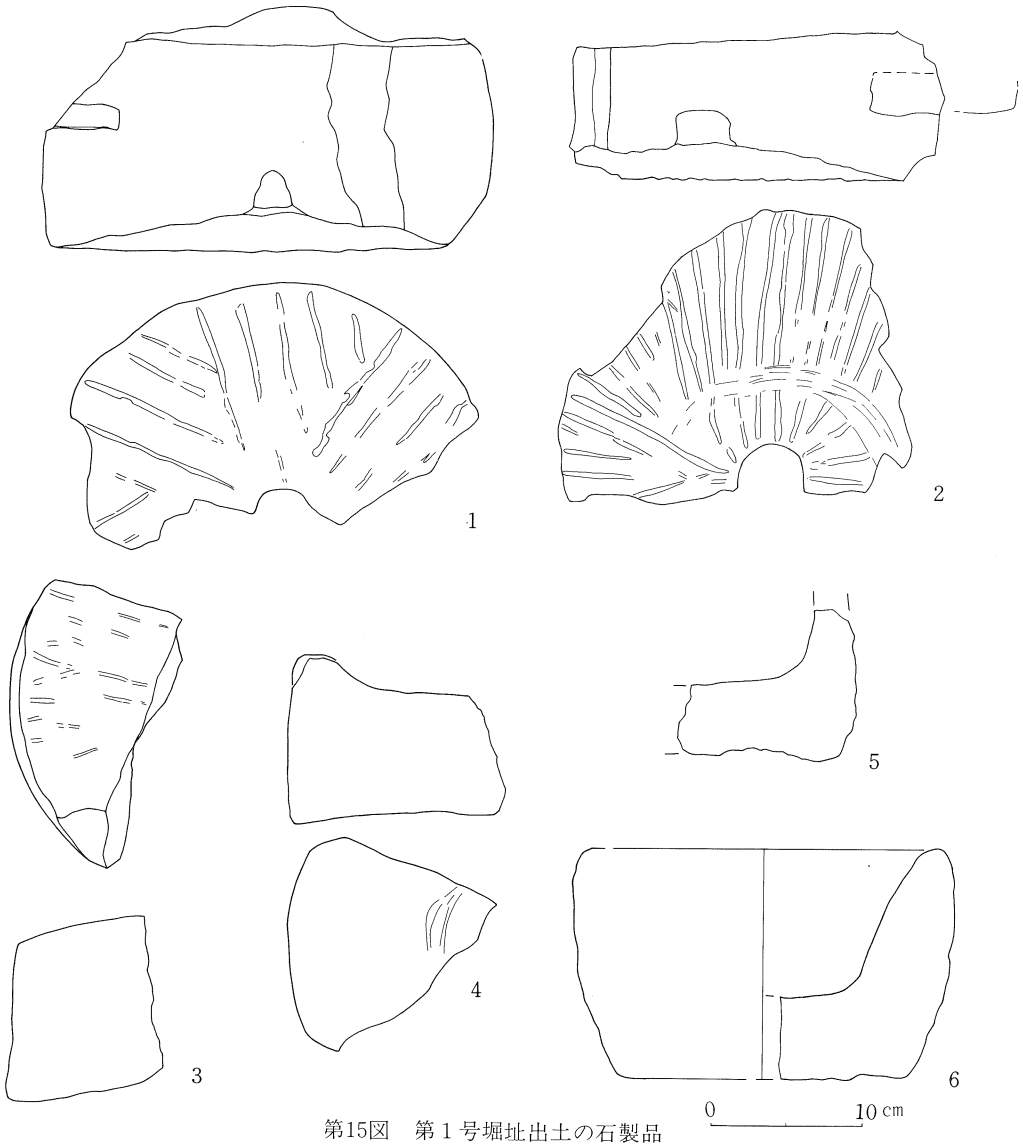
堀の形態は、箱薬研の範疇に含め得る。



第14図　第1号堀址実測図

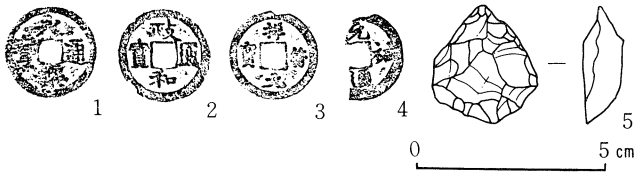
遺物（第15～17図、図版21･22･24）

本遺構からは、土師器片、内耳土器片、鉄製品、石製品、古銭、炭化米が出土している。このうち、図示したものに、石臼、石鉢、凹石、砥石、打製石斧、石製円板、石鏃、鉄釘がある。

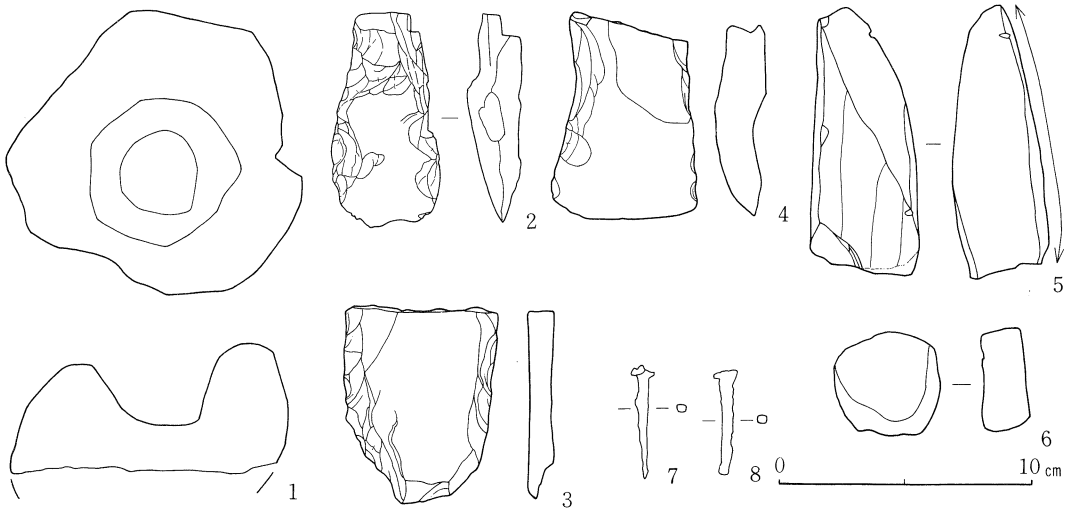


第15図　第１号堀址出土の石製品

石臼（第15図１～４）、石鉢（第15図５～６）いずれも安山岩を石材として用いて作られている。石臼はすべて粉挽き臼で、上臼３点（第15図１・２・４）、下臼１点（第15図３）である。目のパターンには、８分画（第15図１）、６分画（第15図２）があり、第15図３・４のように使用の結果、磨耗のため目が消えかかっているものがある。石臼の中には、二次焼成を受け、煤の付着したもの（第15図３）があるが、割れ口には煤の付着が認



第16図　第１号堀址出土遺物（Ａ）



第17図　第１号堀址出土遺物（Ｂ）

められず、先述したように建物を燃やした際、同時に火を受け、その後割られた可能性を有するものがあった。

古銭は４点出土しており、永楽通宝（第16図１）、政和通宝（第16図２）、祥符元宝（第16図３）、元祐通宝（第16図４）がある。

鉄釘（第17図７・８）は２点あり、いずれも小形品である。

砥石（第17図５）は、流紋岩製で重さ194ｇを測る。

軽石製品は２点あり、凹石（第17図１）と円板（第17図６）がある。

打製石斧は３点出土した。第17図２は粘板岩製で重さ82ｇ、第17図３・４は砂岩製で各々82ｇ、120ｇを計る。

石鏃（第16図５）は、チャート製で重さ10ｇを計る。

自然遺物では、図示しなかったが、炭化した木材と考えられるもの、炭化米、炭化したアワと考えられるものがあった。このうち、炭化米の一部については鑑定を受け、後述したい。

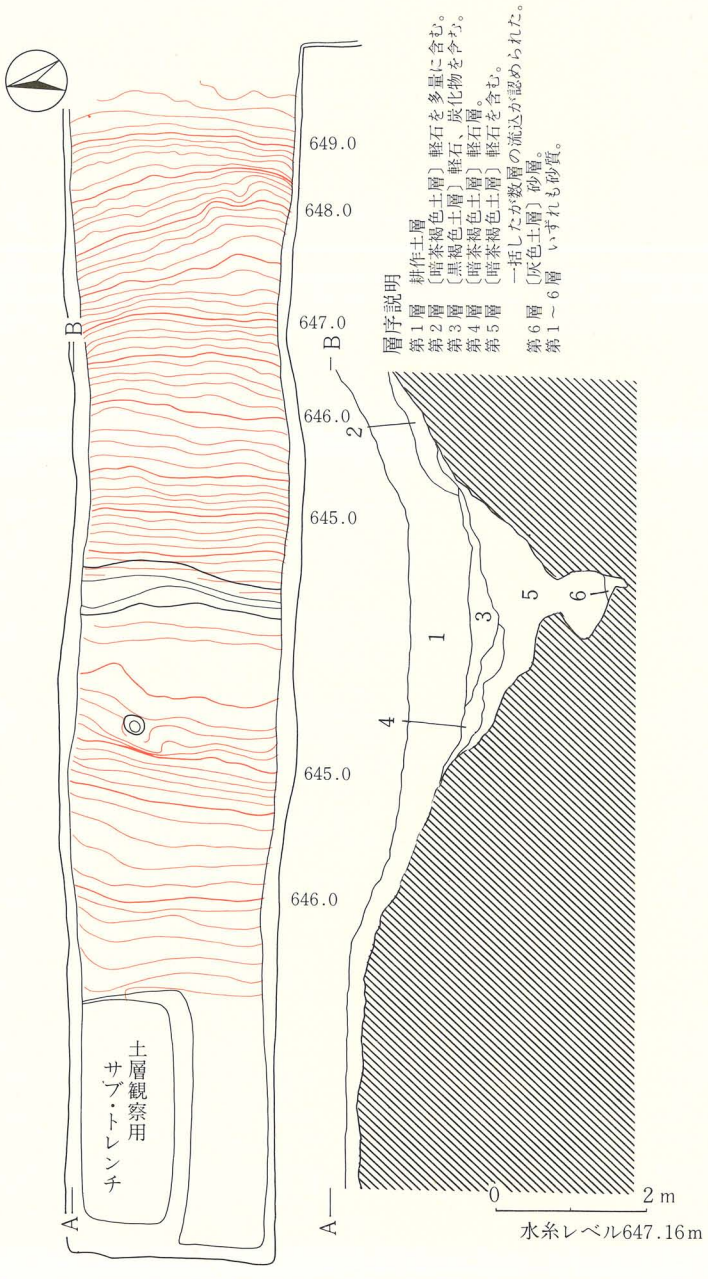
２）第２号堀址

遺構（第18図、図版５～７）

本遺構は、第II地区北西部に位置する。北東から南西に延びる遺構で、堀切の形態をとる。

調査区域内での長さは、約70ｍを測り、北東部は戦時中の防空壕により壊されている。

幅11.5ｍ、深さは最深部で6.5ｍを測る。堀の形態は、薬研の形態をとる。堀の底部には、幅0.6ｍ、深さ1.1ｍの溝が認められ、主に砂層によって充塡されていた。調査時の所見では、北から南へ水が流れたものと思われる。



第18図　第2号堀址実測図

覆土は、表土を除き、5層に区分される。

土層観察の所見では、自然堆積と考えられる。

また、北壁南部では、一段高い個所があり、当時は北壁に沿って土塁が設けられていたものと思われる。

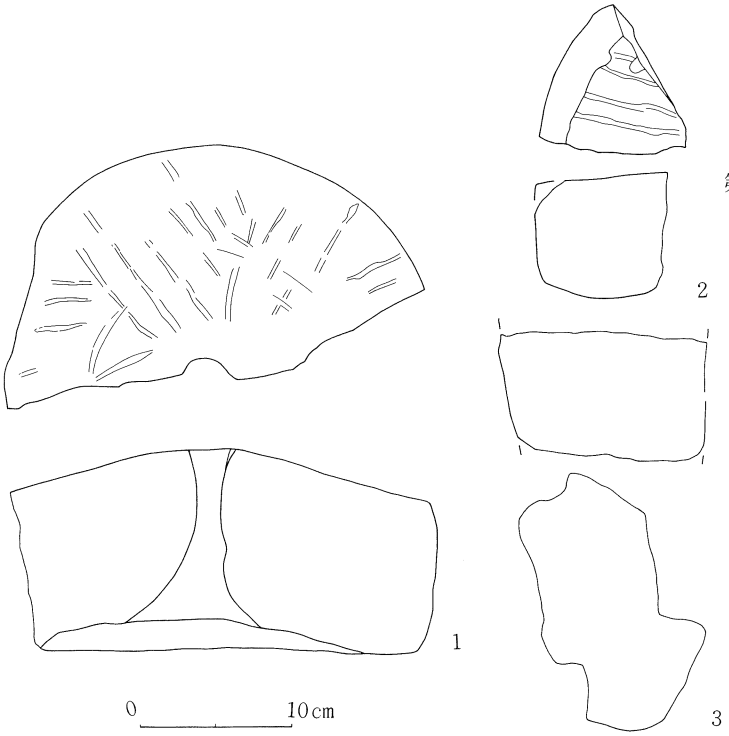
遺物（第19・20図、図版22）

本遺構からは、土師器片、内耳土器片、古銭、石臼が出土している。

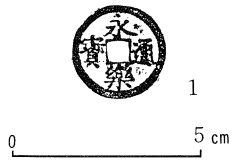
このうち、図示したものに、古銭、石臼がある。

石臼（第19図1～3）は総計3点出土している。内訳は、上臼（第19図3）1点、下臼（第19図1・2）2点である。目のパターンが明らかなものは第19図1の1点で、6分画である。第19図3は、表面が剝落している。いずれも、安山岩製である。

古銭（第20図1）は、永楽通宝である。



第19図　第２号堀址出土の石臼



第20図　第２号堀址出土の古銭

３）第３号堀址

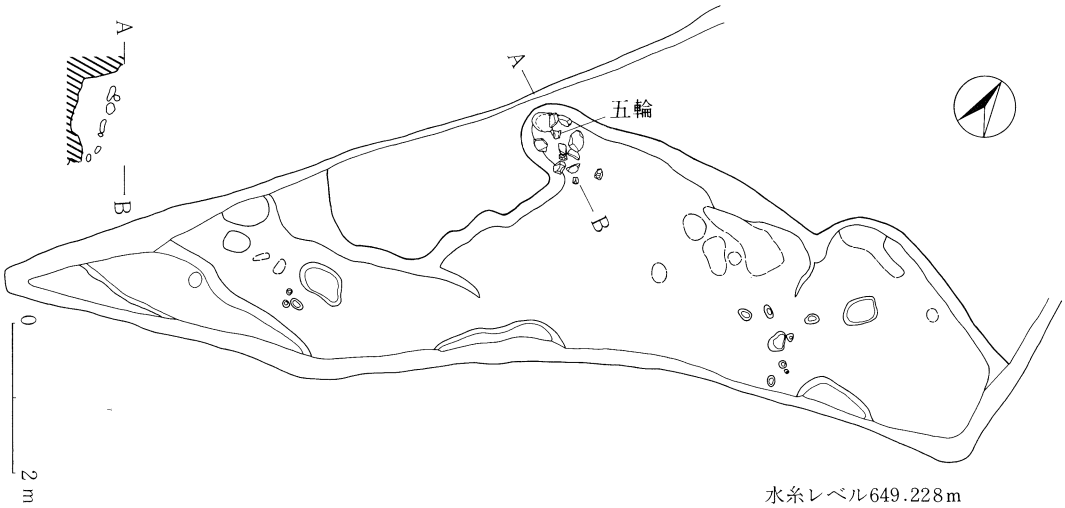
遺構（第21図、図版７）

本遺構は、第Ⅰ地区に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において確認された。

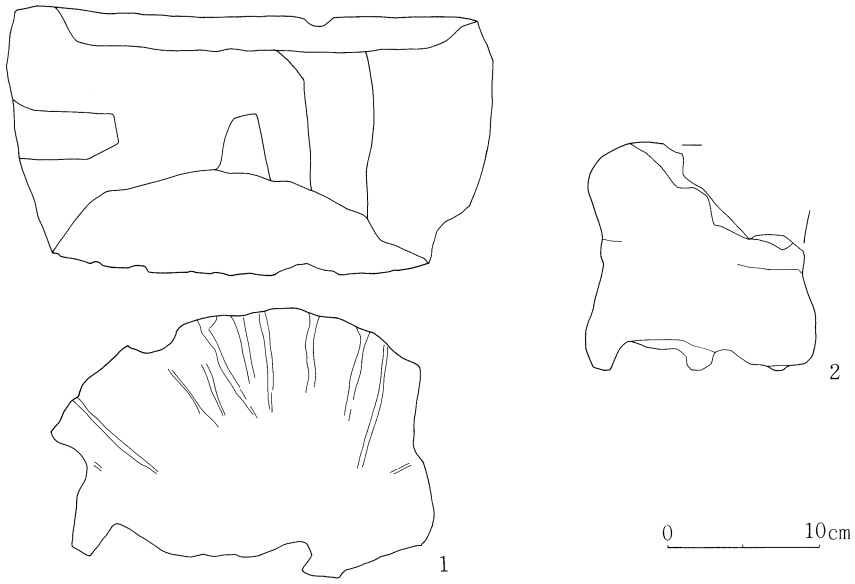
他遺構との重複関係はない。

南壁がはっきりしなかったが、一応堀として把えた。

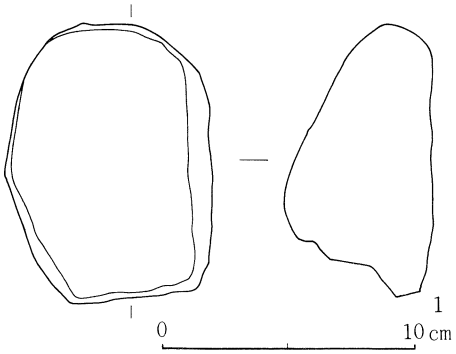
調査範囲内で、長さ13ｍ、深さは最深部で約1.0ｍを測る。北壁ほぼ中央部に礫・五輪塔の一部が検出された土壙状の



第21図　第３号堀址実測図



第22図　第３号堀址出土遺物(Ａ)



第23図　第３号堀跡出土遺物（Ｂ）

遺構が認められたが、遺構検出時では重複関係が認められず、一応同一の遺構として把握した。

底面は、東から西へ水が流れた可能性があり、砂が認められたほか、凹凸がはげしかった。

遺物（第22・23図、図版22）

本遺構からは、土師器片・石臼・五輪塔・磨石が出土した。遺物の量は総じて少ない。

図示したものに、石臼・五輪・磨石がある。

石臼（第22図１）は、上臼で安山岩製である。目のパターンは磨耗のため、不明確である。

第22図２は、五輪塔の一部で軽石製である。空輪と風輪が一つになったものと思われ、火輪と組み合わせるための柄が認められる。

第23図１は、磨石と考えられ、軽石製である。磨石により平面が平坦となっている。

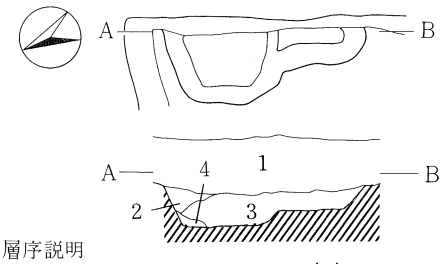
４）第４号堀址

遺構（第24図、図版８）

本遺構は第Ｉ地区北部に位置し、全体層序第III層上面において検出された。調査範囲は、長さ2.7ｍ、幅約0.9ｍと小さいが、一応堀址として把握した。

調査範囲内では、他遺構との重複関係はない。

遺構覆土は、3層に区分され自然堆積と考えられる。



層序説明
第1層〔表　土〕
第2層〔茶褐色土層〕軽石を含む。
第3層〔暗茶褐色土層〕軽石を含むが第2層に比して少ない。
第4層〔暗淡紅色土層〕地山が崩落したと考えられるもの。
第1層～第4層　いずれも砂質。

水糸レベル 650.02m

遺物

本遺構からは、土師器片、内耳土器片が出土しているが量は少なく、図示し得るものは皆無である。

5）第5号堀址

遺構（第24図、図版8）

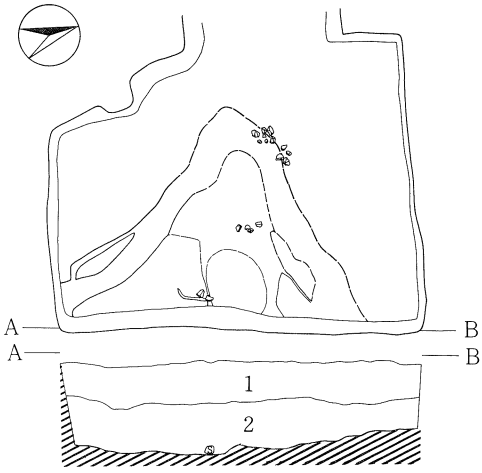
本遺構は、第Ⅰ調査区北東部に位置し、全体層序第Ⅲ層において検出された。

他遺構との重複関係はない。

第4号堀址と対をなすものと思われ、中間は陸橋になるものと考えられる。

遺構覆土は、茶褐色土層一層である。

底面付近から、拳大の礫がまとまって検出されたが、性格は明らかでない。



水糸レベル 650.72m

層序説明
第1層〔表　土〕
第2層〔茶褐色土層〕軽石を含む。砂質。

0　2 m

第24図　第4・5号堀址実測図

遺物

本遺構からは、土師器片、内耳土器片が出土しているが、量は少なく、また、図示し得るものは皆無であった。

6）第1トレンチ

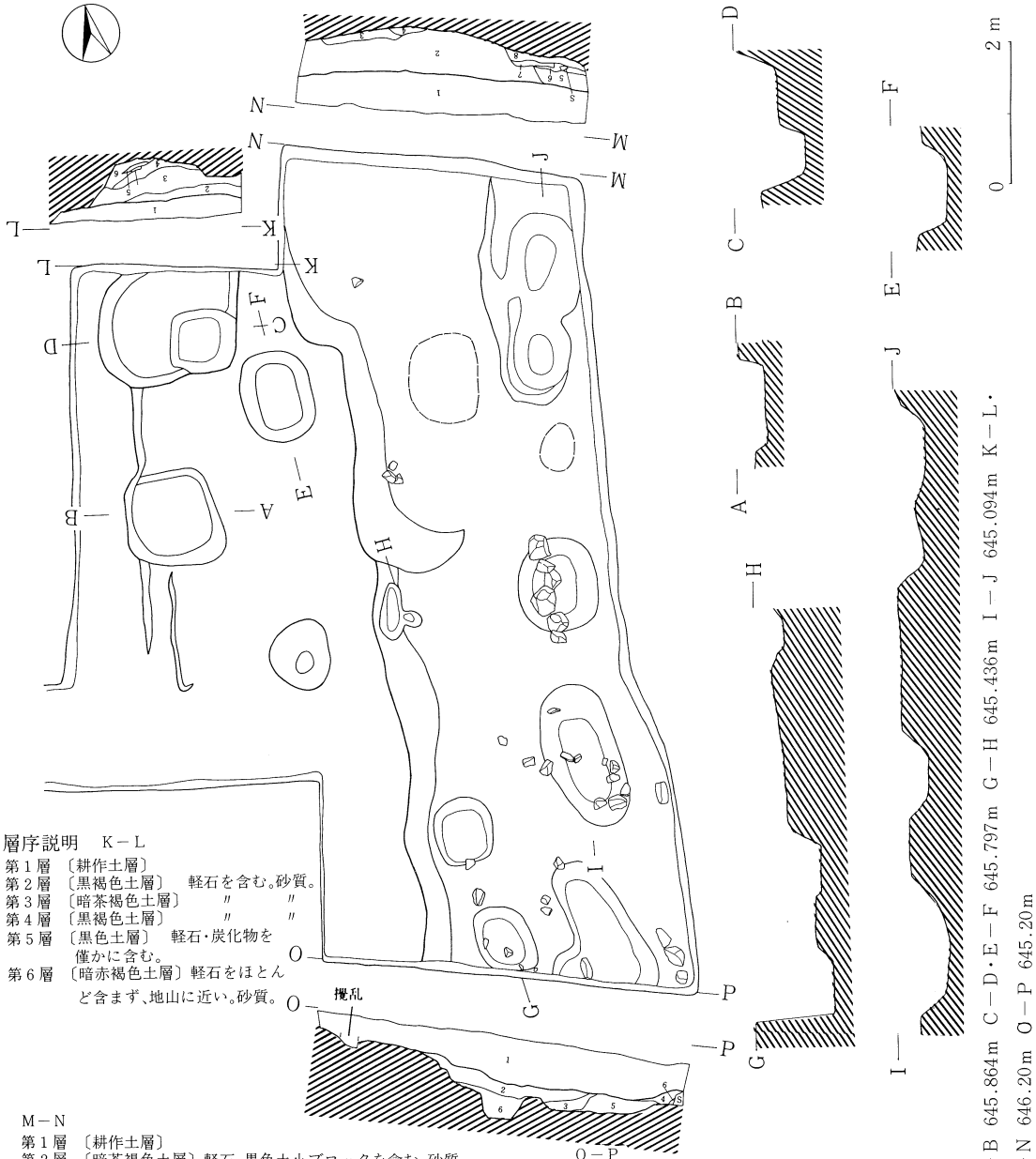
遺構（第25図、図版9）

第Ⅲ地区に南東に設置した。土層断面の観察により、少なくとも2時期にわたり構築されていることが判明した（上から第2次面、第1次面とする）。このうち、図示したものは、第1次面である。

遺構覆土は、表土を除き、5層に区分される。第1次面が使用を停止した後、第2層の暗茶褐色土層を中心に用いて埋土されたものと思われる。したがって、第2次面は、ほぼ平坦面となり東に向かってやや緩やかに傾斜する程度であったものと思われる。

前後するが第1次面は、段を有し、南東部に向かって緩やかな面を作り出し、6基の土壙が認

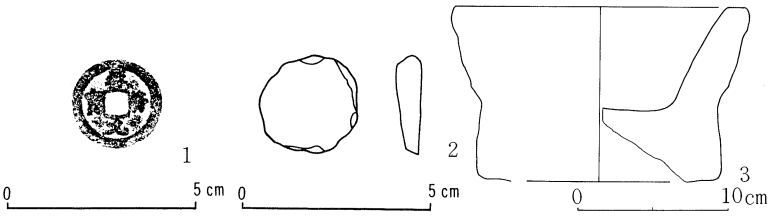
められた。また、内部に礫群が認められた。第 27 図に示した須恵器片は、礫を被うような状態で出土しており、再利用されたものであろう。礫群は、散在しているものに、規則性が認められるものの２種に大別できる。規則性が認められるものは、トレンチ東壁にほぼ併行するように存在している。したがって、第Ⅲ地区東縁部にほぼ併行しているものと把えられる。



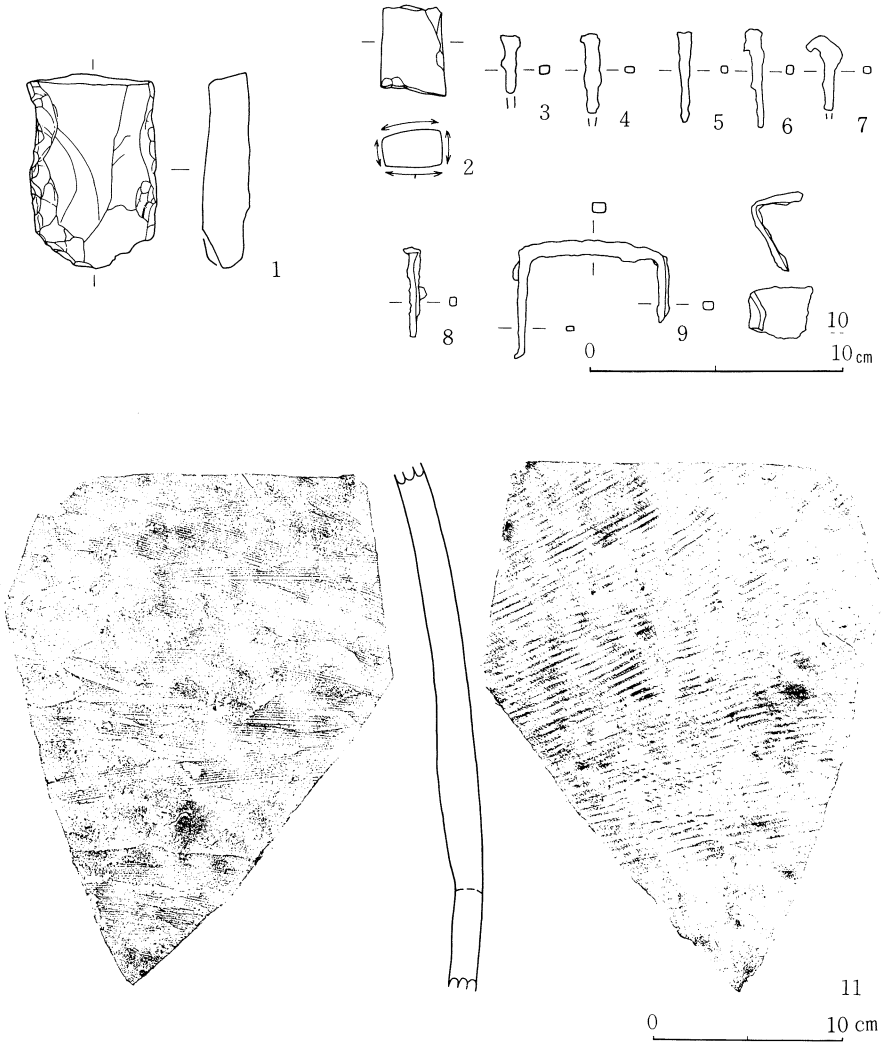
第25図　第１トレンチ遺構実測図

第２次面上には、黒色土により充塡された浅い掘り込みが認められ、内耳土器片、釘などが出土している。

したがって、第１次面



第26図　第１トレンチ出土遺物(A)



第27図　第１トレンチ出土遺物(Ｂ)

と第２次面では、ある程度の機能差が考えられるものと考えられる。

また、後述するが、こうした２時期にわたる構築は、第５・６トレンチにおいても認められた。

遺物（第 26・27 図、図版 23）

土師器片・須恵器片・内耳土器片、石鉢、砥石、鉄製品、打製石斧、土製円板、古銭、炭化米が出土している。このうち、図示したものに、石鉢、古銭、砥石、鉄製品、打製石斧、土製円板がある。

遺物のほとんどが第2次面からの出土である。第2層遺構は遺物はほとんどなく、石鉢（第26図2）と須恵器甕片（第27図11）が出土した程度である。

石鉢（第26図3）は、安山岩製で約1/4が残存している。

古銭（第26図1）は、かなり磨耗しているが文字は判読でき、祥符元宝である。

砥石（第27図2）は小形品で、流紋岩製である。重さ32gを計る。

鉄製品（第27図3～10）には2種あり、鉄釘（第27図3～9）の外、第27図10は、破片ではっきりしないが、鎌の可能性がある。

土製円板（第26図2）は、土師器甕胴部破片を用いている。ロクロ調整を残しており、平安時代の所産であろう。

打製石斧（第27図1）は、粘板岩製で重さ96gを計る。

以上のほかに、トレンチ北部より炭化米の塊が出土している。

第6表　第1トレンチ出土土器一覧表

挿図番号	器形	法　量	器形の特徴	調　整（外面）	調　整（内面）	備　　考
27－11	須恵器甕	―― (28.0) ――		タタキ。	ハケメ。	暗灰色。 自然釉がかかる。

7）第2トレンチ

遺構（第28図、図版9・10）

第III地区西部に設定した。南部に各々約50㎝、10㎝の段差を有し、南に向かって傾斜している。

覆土は、大半を占める耕作土層を除き、2層に区分される。

第1段目において、溝状遺構が3本検出され、中央部の1本は第3号土壙と重複関係を有し、第3号土壙により切られている。また、東部・中央部の溝の底部には僅かに砂が認められた。

また、北部に4基のピットが検出されたが、性格は不明である。

第1トレンチで認められた2度の構築は認められない。

遺物

土師器片・須恵器片・内耳土器片が出土しているが、図示し得るものは皆無である。

8）第3トレンチ

遺構（第29図）

第1トレンチ南部に設定した。

中央部南寄りになだらかな段差を有し、南に向かって緩やかに傾斜している。

覆土は、耕作土層が大半を占めるが、下部に2層が認められた。

第2トレンチと同様、第1トレンチで見られた2度の構築は認められなかった。

遺物

土師器片・内耳土器片などが出土しているが、いずれも小片であり、図示し得るものは皆無であった。

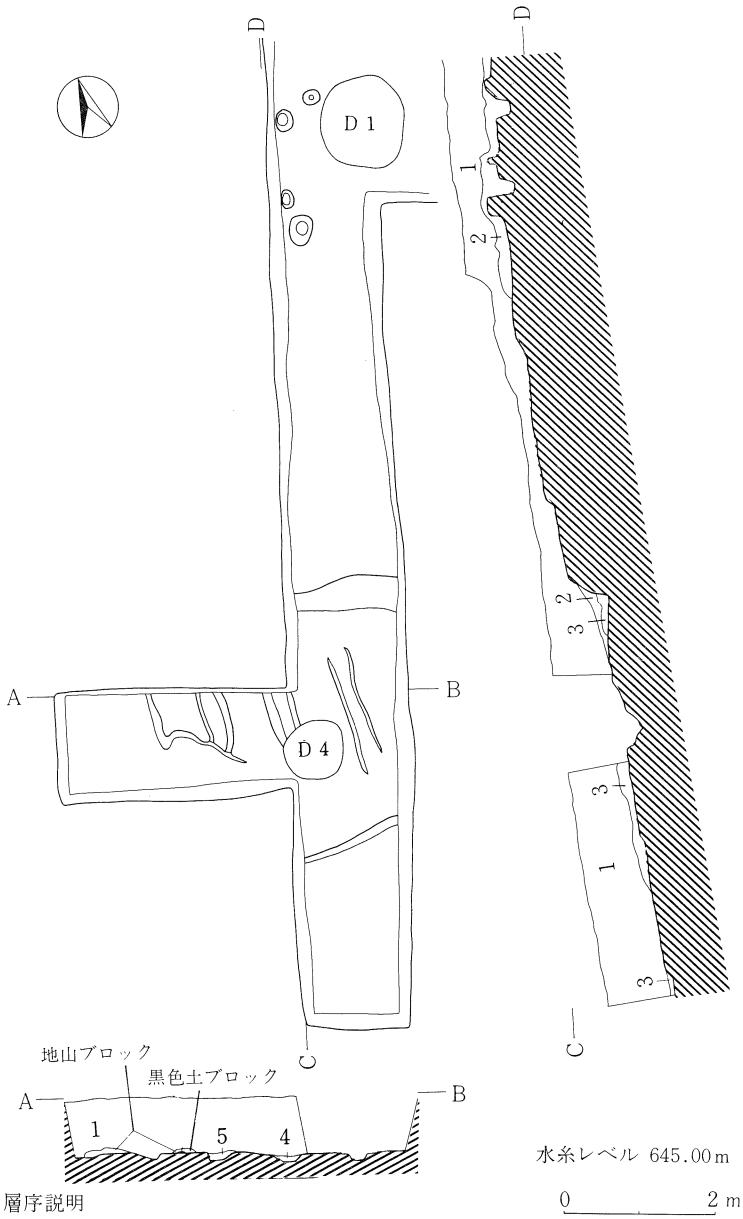
9） 第4トレンチ

遺構（第29図、図版10）

第III地区北部に設定した。

遺構覆土は、表土を除き、4層に区分される。

第1トレンチと同様、2度の構築が認められた。



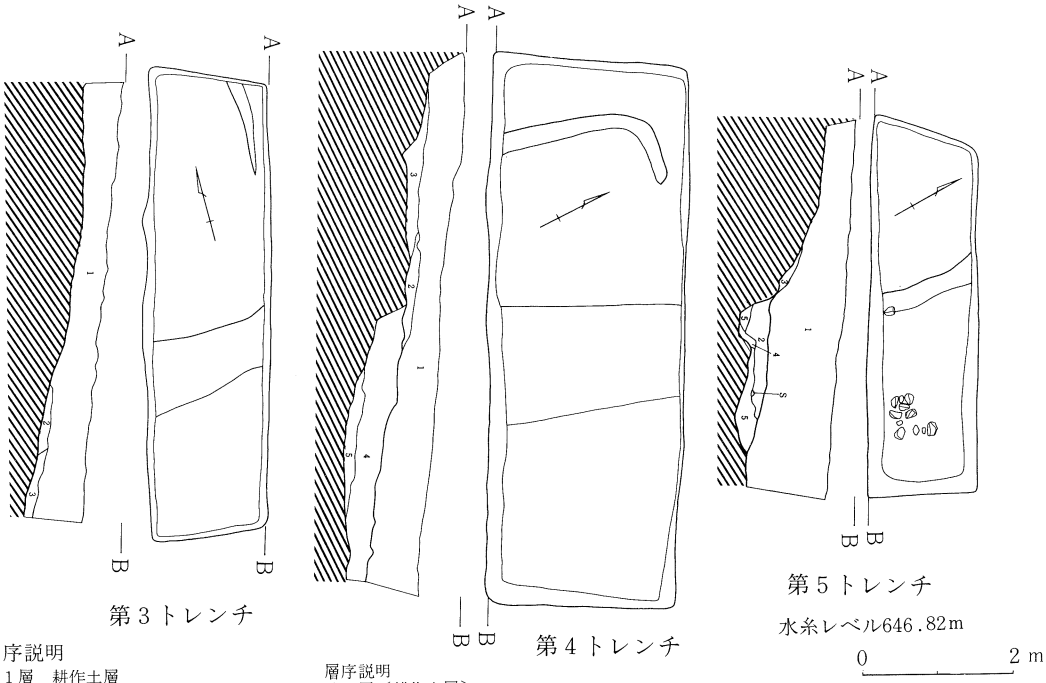
層序説明
第1層　耕作土層
第2層〔黒褐色土層〕　炭化物、軽石を含む。粘性は弱い。
第3層〔暗赤褐色土層〕地山の崩落したものと思われる。砂質。
第4層〔漆黒色土層〕　軽石を全く含まない。砂質。
第5層〔暗茶褐色土層〕小軽石を僅かに含む。砂質。

第28図　第2トレンチ遺構実測図

第1次面は、中央部に約70cmの段差を設け、東部にほぼ平坦な面を作出している。

第2次面は、土層断面図第4層にあたる暗淡紅色土層を主に用い、埋土としている。したがって、第2次面は、東方にやや緩やかに傾斜するが、平坦面として使われたと考えられる。

また、トレンチ北部において約20cmの高さの壁が冂字状に認められた。これが、第1次面、第



層序説明
第1層　耕作土層
第2層〔暗赤褐色土層〕地山が崩落したものと思われる砂質。
第3層〔暗赤褐色土層〕粘性を帯びる。

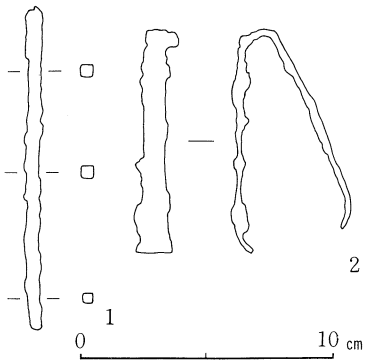
水糸レベル 645.20m

層序説明
第1層〔耕作土層〕
第2層〔黒色土層〕軽石を含む。
第3層〔暗茶褐色土層〕軽石をほとんど含まない。
第4層〔暗淡紅色土層〕軽石を多量に含む。引き締まっている。
第5層〔暗茶褐色土層〕軽石、薄い(0.5cm前後)の砂のブロックを含む。
第1～5層　いずれも砂質。

水糸レベル646.75m

層序説明
第1層　耕作土層
第2層〔暗淡紅色土層〕軽石を多量に含む。引き締まっている。
第3層〔暗赤褐色土層〕下部に砂が混入。
第4層〔漆黒色土層〕軽石を含まない。
第5層〔暗茶褐色土層〕軽石を含む。
第1～5層　いずれも砂質。

第29図　第3～5トレンチ遺構実測図



第30図　第6トレンチ出土の鉄製品

2次面のどちらに伴うものかはっきりしなかったが、土層断面の検討からは、第2次面に伴う可能性が強い。

遺物

第1～3層5層下部より、土師器片・内耳土器片、石臼片などが出土している。第4層中には遺物は包含されていない。

10）第5トレンチ

遺構（第29図、図版11）

第III地区最北部に設定した。遺構覆土は、表土を除き、4層に区分される。第1・4トレンチと同様、2度にわたる構築が認められた。したがって、第III地区では、東部だけが2度の構築を受けたものと考えられる。

第1次面は、第4トレンチと同様、中央部に約50cmの段差を設けている。また、10～15cm前後の礫の集積が認められたが、性格は不明である。

第2次面は、土層断面図第2層にあたる暗淡紅色土層（第4トレンチ第4層に対応）を主に用い、埋土としている。第5トレンチは、第4トレンチの第2次面よりも傾斜は急となる。

遺物（第30図、図版23）

内耳土器片、鉄製品などが出土している。図示したものに鉄製品2点がある。

第30図2は、毛抜き形の鉄製品である。第30図1は、軸状のものであるが用途は不明である。

3　竪穴状遺構

1）第1号竪穴状遺構

遺構（第31図、図版14）

本遺構は、第Ⅲ地区に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第1号掘址と重複関係を有するが前後関係については明らかでない。

東西245㎝、南北は残存値で175㎝、深さ29㎝を測る。長軸方位は、N－77°－Wを示し、平面プランは、不整な隅丸方形を呈する。

遺構は、暗茶褐色土により充塡されており、壁は緩やかに立ち上がる。底面には、堅緻な個所は認められなかった。

遺物

本遺構からは、土師器片が出土しているが量は僅かであり、いずれも小片で図示し得るものは皆無である。

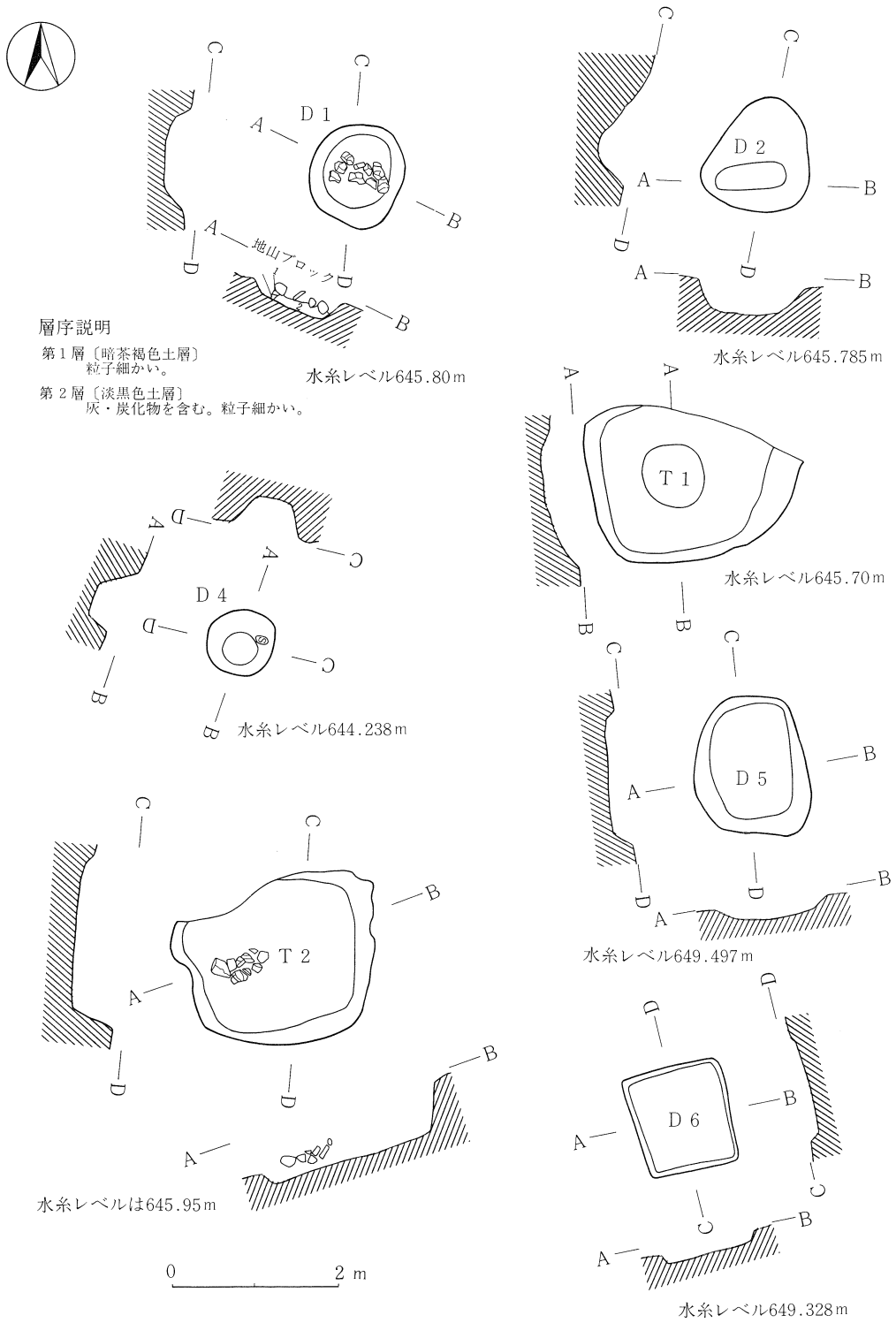
本遺構の所産期・性格については不明である。

2）第2号竪穴状遺構

遺構（第31図、図版14）

第7表　竪穴状遺構一覧表

土壙No.	平面形	規模（cm）			長軸方位	出土遺物	備考
		東西	南北	深さ			
1	不整隅丸方形	245	(175)	29	N-77.0°-W	土師器片	第Ⅲ地区
2	不整隅丸方形	240	(195)	50	N-44.5°-E	砥石	第Ⅲ地区
3	不整隅丸方形	(210)	345	22	N- 8.5°-E	なし	第Ⅲ地区
4	隅丸長方形	258	203	54	N- 7.0°-W	土師器片	第Ⅱ地区
5	隅丸長方形	795	(400)	70	N-82.5°-W	土師器片 刀子	第Ⅰ地区



層序説明

第１層〔暗茶褐色土層〕
粒子細かい。

第２層〔淡黒色土層〕
灰・炭化物を含む。粒子細かい。

第31図　第１・２号竪穴状遺構・第１～６号土壙実測図

本遺構は、第III地区に位置し、全体層序第III層上面において検出された。第１号堀址と重複関係を有するが前後関係については明らかでない。

東西 240 cm、南北は残存値で 195 cm、深さ 50 cmを測る。長軸方位は、N－44.5°－Eを示し、平面プランは、不整な隅丸方形を呈する。

遺構覆土は、暗茶褐色土により充塡されていた。中央部においてやや底面より浮いた状態で礫が認められた。底面は比較的堅緻で、壁は比較的急角度をもって立ち上がる。

遺物（第 35 図、図版 23）

本遺構からは、土師器片・内耳土器片、砥石が出土している。このうち、図示し得たものは、砥石１点である。

砥石（第 35 図１）は凝灰岩製で重さ 132 gを計る。

本遺構の所産期および性格は明らかではない。

３）第３号竪穴状遺構

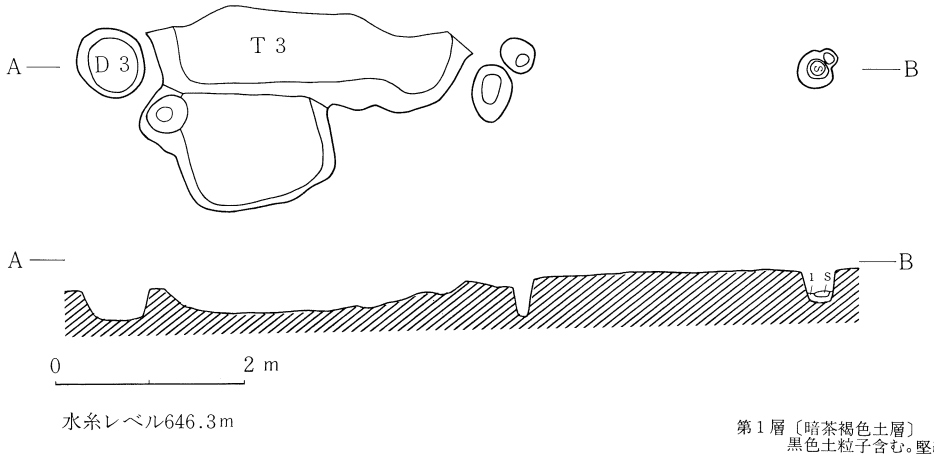
遺構（第32図）

本遺構は、第III地区に位置し、全体層序第III層上面において検出された。第１号堀址と重複関係を有するが前後関係については明らかでない。

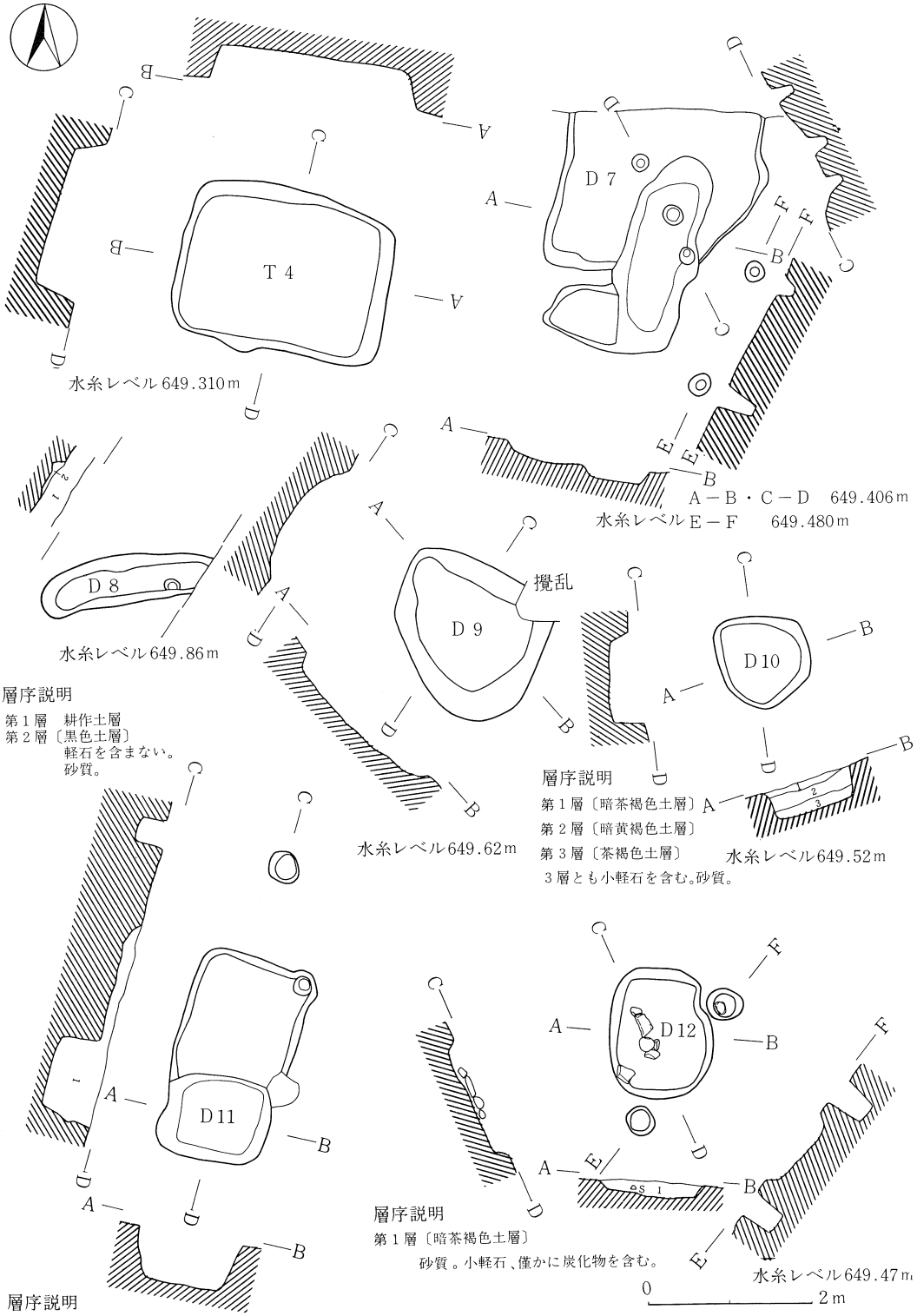
東西は残存値で 210 cm、深さ 22 cmを測る。長軸方位は、N－8.5°－Eを示し、平面プランは、不整な隅丸方形を呈する。

遺構覆土は、暗茶褐色土により充塡されていた。底面では堅緻な個所は認められなかった。

壁は、緩やかに立ち上がっている。



第32図　第３号竪穴状遺構・第３号土壙・第１号ピット群実測図



層序説明
第1層　耕作土層
第2層〔黒色土層〕
軽石を含まない。
砂質。

層序説明
第1層〔暗茶褐色土層〕
砂質。軽石含む。

第33図　第4号竪穴状遺構、第7－12号土壙実測図

遺物

本遺構出土の遺物は皆無であり、所産期、性格については不明である。

4）第4号竪穴状遺構

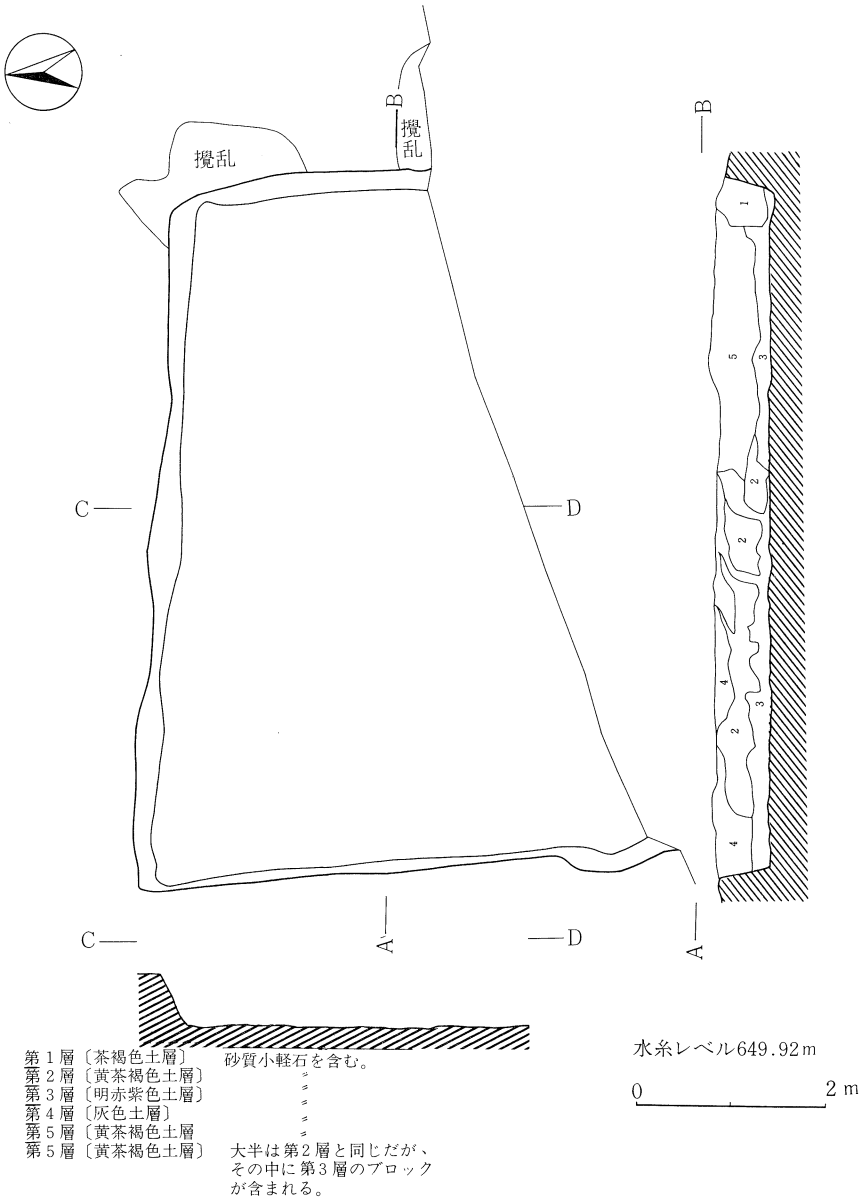
遺物（第33図、図版14）

本遺構は、第II地区に位置し、全体層序第III層上面において検出された。

北東コーナーは、第2号溝状遺構に接している。

東西258㎝、南北203㎝、深さ54㎝を測る。長軸方位は、N－7°－Wを示し、平面プランは隅丸長方形を呈する。

遺構覆土は、暗茶褐色土により充塡されていた。床面は、中央部では比較的堅緻であった。また、壁は比較的急角度に立ち上がる。



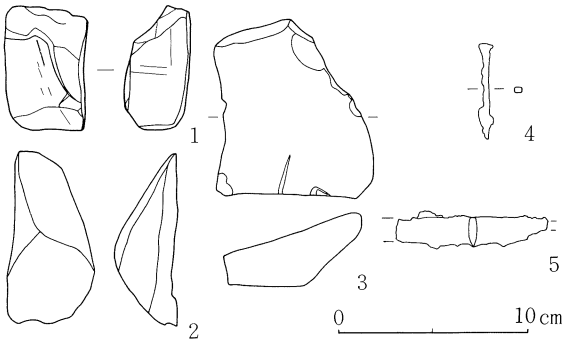
第34図　第5号竪穴状遺構実測図

遺物

本遺構からは、土師器片が出土しているが量は僅少であり、図示し得るものは皆無である。

本遺構の所産期、性格は明らかでなかった。

5）第5号竪穴状遺構



第35図　第２・５号竪穴状遺構、第13号土壙出土遺物

遺構（第34図、図版15）

本遺構は、第Ⅰ調査区に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。他遺構との重複関係はないが南壁部は攪乱を受けている。

東西795㎝、南北は残存値で400㎝、深さ70㎝を測る。長軸方位は、N－82.5°－Wを示す。

平面プランは、隅丸長方形を呈し、壁は比較的急角度をもって立ち上がる。

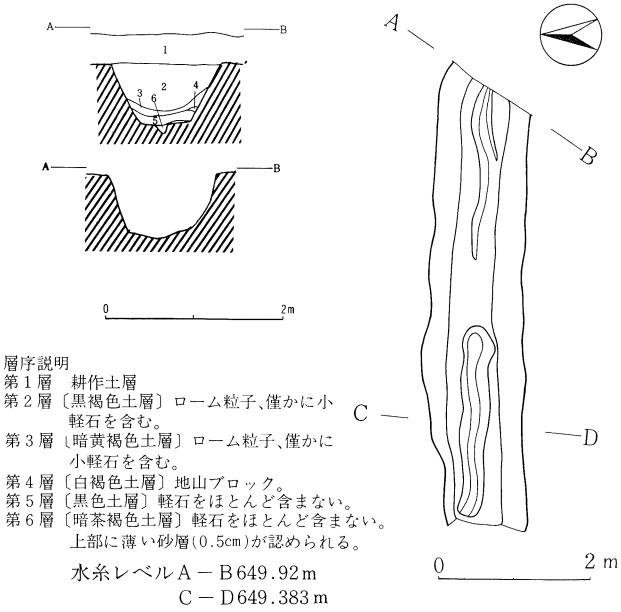
遺構覆土は、５層に区分される。遺構確認面は非常に堅緻であった。土層断面の観察によれば、自然堆積でなく、第２層の黄褐色層を主として用い、埋土された可能性が強い。

また、底面は全体的に軟弱であり、堅緻な個所は認められなかった。

遺物（第35図、図版23）

本遺構からは、土師器片、鉄製品が出土しているが図示し得たものは鉄製品１点である。

鉄製品（第35図５）は、覆土中から出土したもので、刀子と考えられる。



第36図　第１号溝状遺構実測図

4　溝状遺構

1）第１号溝状遺構

遺構（第36図、図版11）

本遺構は、第Ⅱ調査区西部に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。第７号土壙、第２号堀址と重複関係を有し、第７号土壙を切って構築されている。第２号堀址とは、ほぼ同時期と考えられる。

調査区を南北に縦断するように、ほぼ直線的に延びる遺構で、調査区域内において調査された部分は、約6.25 mの範囲である。

遺構覆土は、5層に区分され、大半は第2層黒褐色土により充填されている。また、底部には砂層が認められた。

溝幅は、120 cm前後で、確認面からの深さは、74～78 cmを測る。また、壁は比較的しっかりしていた。

遺物

本遺構からは、土師器片・須恵器片・内耳土器片・青磁片、石臼片、鉄鏃が出土しているが、図示し得るものはない。遺物の量は、調査範囲に比して比較的多い。

本遺構の所産期は、内耳土器片が遺物の大半を占めることから、城跡に伴うものと考えられる。

2）第2号溝状遺構

遺構（第37図、図版12）

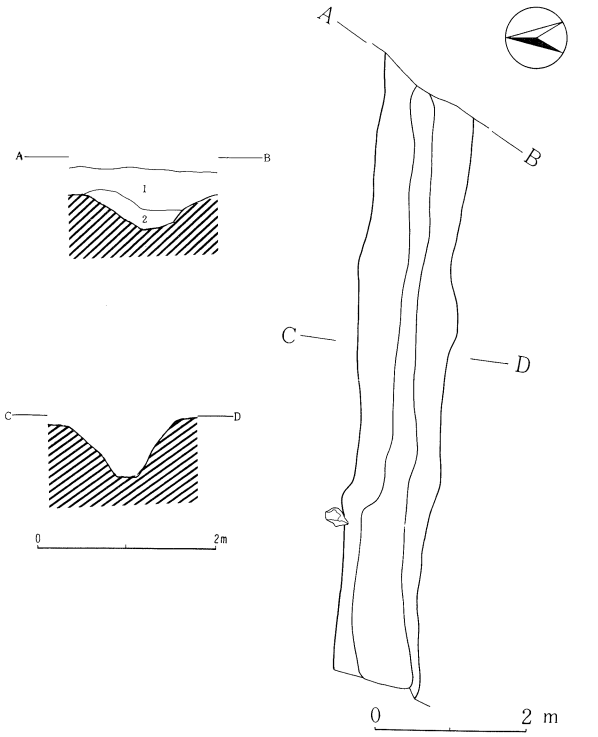
本遺構は、第II調査区ほぼ中央部に位置し、全体層序第III層上面において検出された。第2号住居址と重複関係を有し、第2号住居址を切って構築されている。

第1号溝状遺構と併行している。調査区域内において調査された部分は、約8.5 mの範囲である。

遺構覆土は、2層に区分されるが、大半は第2層により充填されている。

なお、砂の堆積は認められなかった。

溝幅は、120 cm前後で、確認面からの深さは53～59 cmを測る。壁・底面は比較的しっかりしていた。



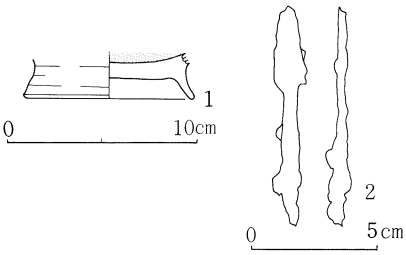
層序説明
第1層　耕作土層
第2層〔黒色土層〕　ローム粒子、小軽石を含む。砂質。

第37図　第2号溝状遺構実測図

遺物（第38図、図版23）

本遺構からは、土師器片・内耳土器片・鉄製品・鉄鏃が出土している。

このうち、図示したものに、土師器高台付杯（第38図1）と、鉄製品（第38



第38図　第23号溝状遺構実測図

図2）がある。

土師器高台付杯は、内黒で口辺部を欠いている。平安時代に比定される。

第38図2は、鉄鏃である。

本遺構の所産期は、重複関係から平安時代中葉(10世紀後半）以降であろう。

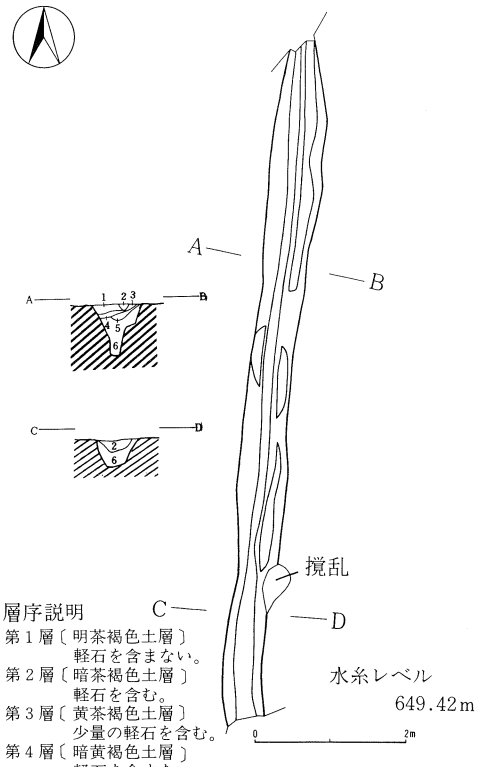
第8表　第2号溝状遺構出土土器一覧表

挿図番号	器形	法　量	器形の特徴	調　整（外面）	調　整（内面）	備　　考
33－1	高台付杯	—— （8.7） 2.5		ロクロナデ。 糸切り。(貼り付け高台)	黒色処理。暗文。	暗茶褐色。 口辺部欠損。

3）3号溝状遺構

遺構（第39図、図版12）

本遺構は、第Ⅰ調査区西部に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。他遺構との重複関係はない。



層序説明
第1層〔明茶褐色土層〕
軽石を含まない。
第2層〔暗茶褐色土層〕
軽石を含む。
第3層〔黄茶褐色土層〕
少量の軽石を含む。
第4層〔暗黄褐色土層〕
軽石を含まない。
第5層　暗赤褐色土層　軽石を含む。
第6層　茶褐色土層　軽石を含む。
第1～6層　いずれも砂質。

第39図　第3号溝状遺構実測図

調査区域内において調査された部分は、約9.1mの範囲である。

遺構覆土は、北部では6層、南部では2層に区分されるが、大半は第6層である。また、砂の堆積は認められなかった。

溝幅は、55cm前後で、確認面からの深さは29～58cmを測る。壁・底面は、比較的しっかりしていた。

遺物

本遺構出土の遺物は皆無であり、所産期・性格ともに不明である。

4）第4号溝状遺構

遺構（第40図、図版13）

本遺構は、第Ⅰ調査区に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

他遺構との重複関係はない。

調査区域内において調査された部分は約16.9m

である。コ形を呈し、調査区域内で終結しているが、一端切れて北へ続く可能性もある。

遺構覆土は、5層に区分されるが、大半は第3層の茶褐色土により充塡されていた。また、遺構内には砂の堆積は認められなかった。

土層断面の観察では、一端溝を掘った後、すぐ埋められた可能性がある。

このことに関連するかどうか、壁下半部・底面がはっきりせず、底面は、土層の硬・軟により把えた。

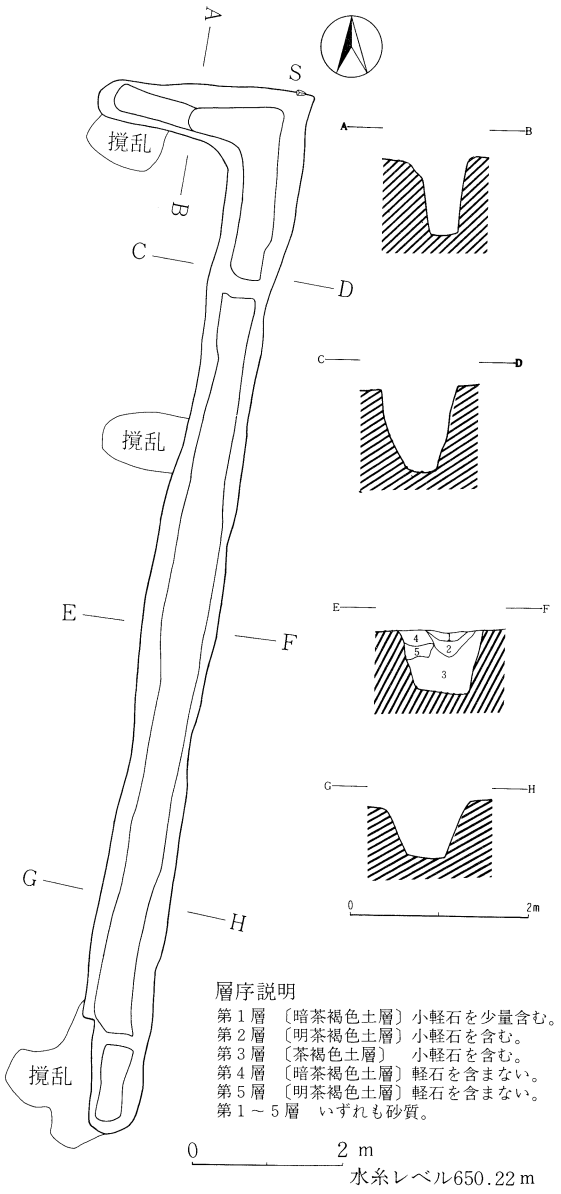
溝幅は、100 cm前後で、確認面からの深さは28.5～60 cmを測る。

遺物

本遺構からの遺物は少なく、須恵系の甕の破片2点のみである。

この点は、先述したように本遺構が短期間しか機能しなかったことと関連するものと思われる。

本遺構の所産期・性格については明らかにし得なかった。



第40図　第4号溝状遺構実測図

5　土　壙

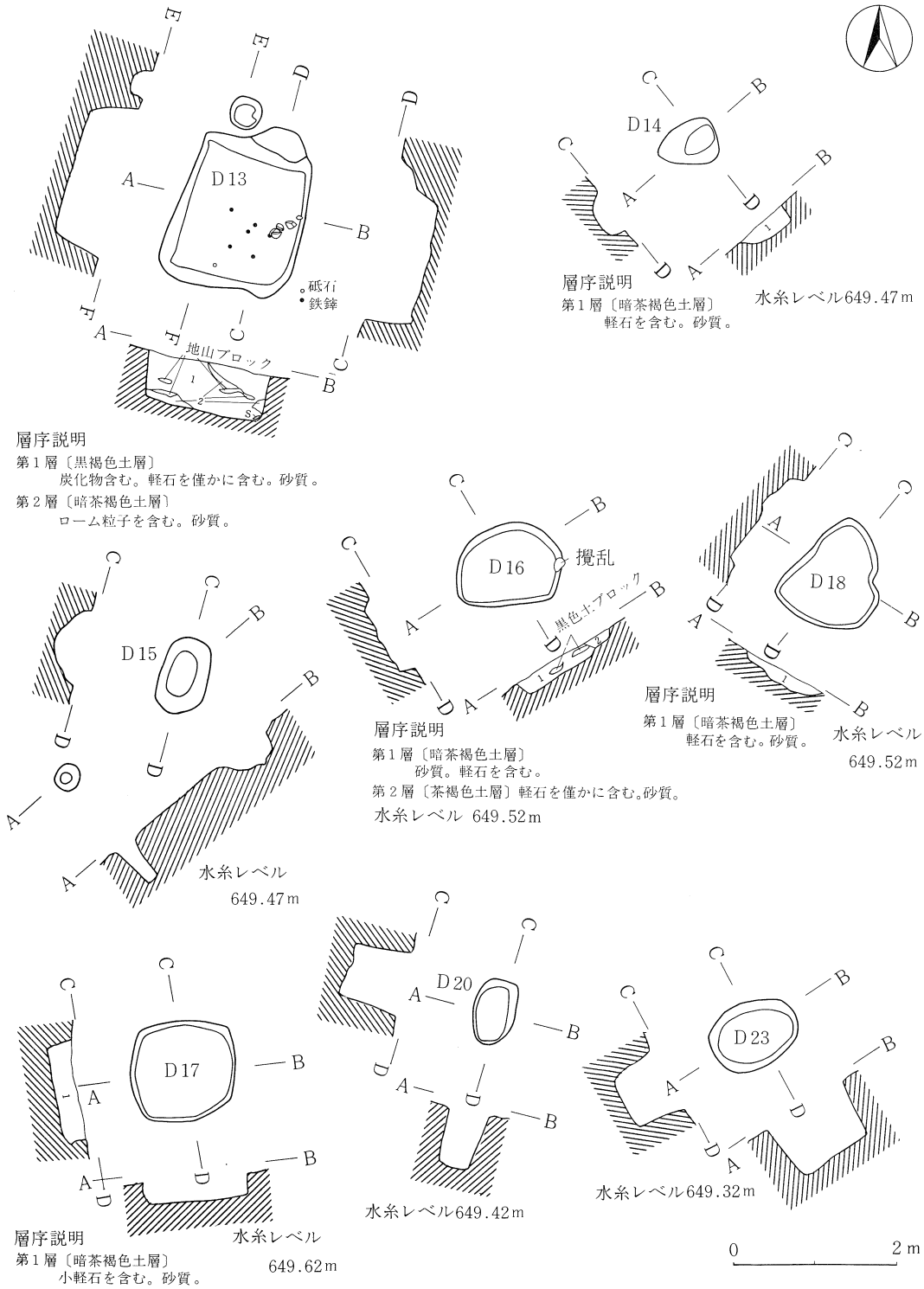
遺構（第31～33・41・42図、図版14～18）

本遺跡では、第Ⅰ地区・第Ⅱ地区・第Ⅲ地区において、総計24基の土壙が検出された。

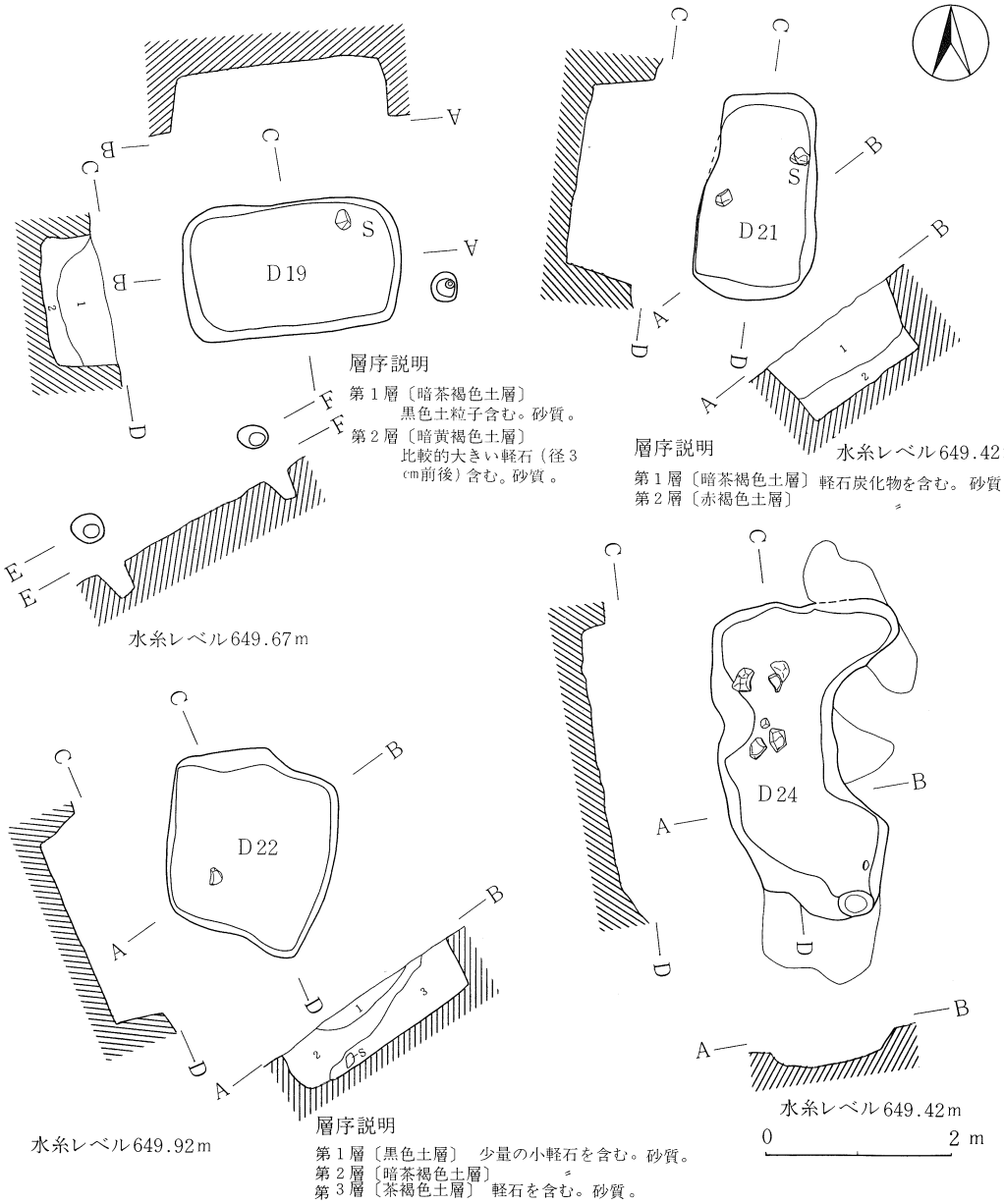
内訳は、城跡に伴う土壙6基、石組を伴う土壙2基、馬の埋葬を伴う土壙1基、性格の決定できない土壙15基となっている。これらの土壙の詳細については、第9表に示した。

1）土　壙

所産期・性格が不明な土壙は、第3・5～8・10・14～20・22・23号土壙の10基である。平面



第41図　第13～18・20・23号土壙実測図



第42図　第19・21・22・24号土壙実測図

形態、長軸方位等には、傾向性は認められない。また、ほとんどの土壙は出土遺物がなく、所産期・性格については明らかにし得なかった。

2）城跡に伴う土壙

城跡に伴う土壙は、第４・９・11・13・21・24号土壙の６基がある。これらの土壙は、３種に

第9表　土壙一覧表

土壙No.	平面形	規模(cm)			長軸方位	出土遺物	備考
		東西	南北	深さ			
1	円形	115	125	26	N- 5.5°-W	内耳土器片	第Ⅲ地区。上部に礫。
2	楕円形	130	138	36	N- 2.0°-W	茶臼・獣骨	〃
3	円形	75	72	34	N-74.5°-E	なし	〃
4	円形	80	80	38	N-62.5°-E	内耳土器片 礫1	〃 焼土・灰・炭化物充塡。
5	不整楕円形	140	164	34	N-26.0°-W	土師器片 灰釉陶器片	第Ⅱ地区
6	方形	115	130	15	N-13.5°-W	なし	第Ⅱ地区
7	不整隅丸長方形	255	(295)	20	N-14.0°-E	土師器片 灰釉陶器片 内耳土器片	第Ⅱ地区
8	不整長楕円形	187	62	12	N-80.0°-E	なし	第Ⅱ地区
9	不整楕円形	173	198	32	N-31.5°-W	石臼片	第Ⅰ地区
10	不整円形	116	113	42	N-53.0°-W	なし	第Ⅰ地区
11	不整隅丸長方形	150	255	63	N-14.5°-E	内耳土器片	第Ⅰ地区
12	不整隅丸長方形	125	160	15	N- 5.0°-E	土師器片	第Ⅰ地区
13	不整隅丸方形	158	190	63	N-15.0°-W	内耳土器片 砥石、釘、 鉄鏃陶器片	第Ⅰ地区
14	不整楕円形	70	55.5	23	N-70.5°-E	なし	第Ⅰ地区
15	長楕円形	65	90	35	N-15.0°-E	なし	第Ⅰ地区
16	不整楕円形	125	105	14	N-57.5°-E	土師器片 鉄鏃	第Ⅰ地区
17	不整方形	130	125	32	N-82.5°-E	なし	第Ⅰ地区
18	不整楕円形	115	135	22	N-38.5°-E	なし	第Ⅰ地区
19	隅丸長方形	235	143	70	N-85.5°-E	土師器片 須恵器片	第Ⅰ地区
20	不整長楕円形	53	80	74	N-18.0°-E	なし	第Ⅰ地区
21	隅丸長方形	132	220	84	N- 6.5°-E	内耳土器片 鉄器片、鉄鏃	第Ⅰ地区
22	不整隅丸方形	183	218	50	N- 6.5°-E	土師器片、内耳土器片、土製円版3、打製石斧、鉄器片	第Ⅰ地区
23	不整楕円形	105	87	76	N-55.0°-E	土師器片	第Ⅰ地区
24	不定形	200	335	32	N- 7.5°-W	須恵器片、内耳土器片、鉄器片、鉄鏃、釘	第Ⅰ地区

大別される。一つは、焼土・灰・炭化物を伴う土壙で、第4号土壙がこれにあたる。第4号土壙からは、内耳土器片が出土しており、煮炊きの場としての機能が想定される。

2番目として、廃棄の場としての土壙で、第13・21・24号土壙が該当する。3基とも第Ⅰ地区に位置する。鉄鏃・内耳土器片が共通の出土遺物で、第13号土壙では、砥石・釘などが加わっている。いずれの土壙も、焼けた痕跡、鞴羽口などが認められないことから、廃棄の場として把握した。こうした点から、第Ⅰ地区の調査区域外に生産の場としての鍛冶遺構が存在した可能性が

強い。

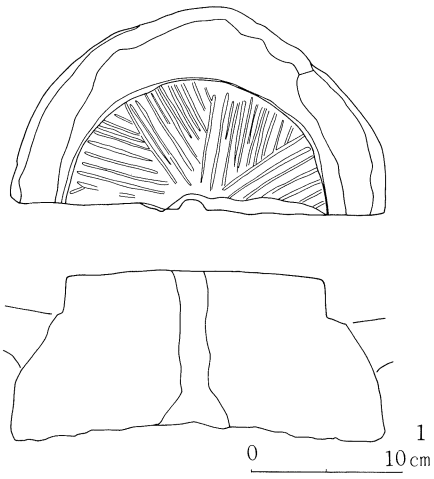
3番目のものは、一応遺物から判断した。第9・11号土壙がこれに該当する。

3）石組を伴う土壙

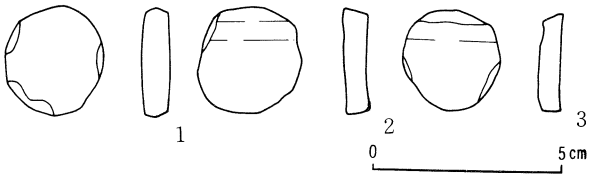
第1・12号土壙の2基で、直線状に礫を配するものである。

平面プランにやや相違があるが、2基とも浅い擂鉢状の断面を呈している。このうち、第1号土壙は、内耳土器片が伴出していることから、前項に含められるが、一応ここに含めた。

第12号土壙は、覆土中から土師器片が出土しているが、時期は断定し得なかった。また、第12号土壙の礫には、磨面を有するものが1点存在した。



第43図　第2号土壙出土の石臼



第44図　第22号土壙出土の土製円版

4）馬の埋葬を伴う土壙

第2号土壙の1基である。鑑定を受けていないが、馬と判断した。上部より茶臼が出土しており、年代的には城跡に伴うものと考えられる。

遺物（第35・43・44図）

遺物の出土した土壙14基のうち、図示したものに第2・13・22号土壙出土遺物がある。

第2号土壙からは、茶臼（第43図1）が出土している。下臼の約1/2である。安山岩製で目のパターンは、8分画である。

第13号土壙出土遺物のうち図示したものには砥石2点、鉄釘がある（第35図）。砥石には、砂岩製（第35図3）と流紋岩製（第35図2）の2種があり、各々317g、96gを計る。また、鉄鏃は、写真で示した。

第22号土壙からは、土製円板（第44図）が3点出土している。土師器甕の破片を利用したもの（第44図2・3）が2点、内黒の杯の破片を利用したもの（第44図1）が1点である。

6　ピット群

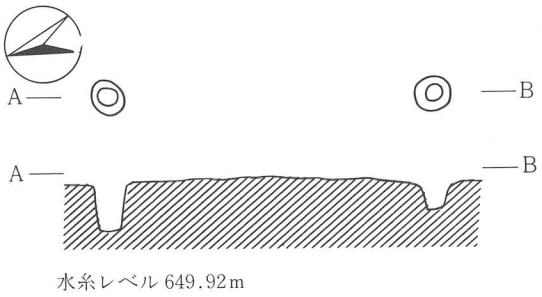
遺構（第32・42・45図）

第Ⅰ～Ⅲ地区で、ピットが検出されている。いずれも、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

これらのうち、所産期・性格がある程度推定できるものは、第32図に示した第1号ピット群のみである。P_1は、底部に偏平な礫を設している。礫の表面には煤の付着が認められた。本ピット群は、柵列に関連する柱穴ではないかと思われ、城跡に伴うものと考えられる。

また、第1号堀址で触れなかったが、第1号堀址北側で検出された2基のピットも、性格は不明ながら城跡に伴うものであろう。

この外、第Ⅱ地区第7号土壙、第Ⅰ地区第3号土壙に接するピット群、第2号ピット群については、所産期、性格ともに明らかにできなかった。



第45図　第2号ピット群実測図

7　遺構外出土遺物

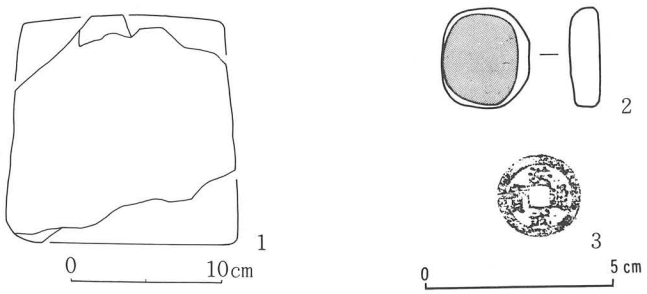
（第46図、図版24）

図示したものには、石製品、土製円板、古銭がある。

石製品（第46図1）は、第Ⅱ地区の表採品である。五輪塔の水輪で、軽石製である。

土製円板（第46図2）は、第Ⅰ地区遺構検出作業時に出土した。弥生時代後期の箱清水式土器の壺胴部の破片を利用したものと考えられる。外面に赤色塗彩が認められるが、ほとんど剝落している。

古銭（第46図3）も同じく第Ⅰ地区の遺構作業の際出土した。洪武通宝である。



第46図　遺構外出土遺物

V　耳取城跡
－歴史的背景と遺構について－

耳取は古代の美理郷〔里〕（ミトリノゴウ）といわれた郷里制のなごりの地名が訛って、「ミミトリ」となったといわれている。その後、現在のように「耳取」の文字が当てられたという。その真偽はしばらく措(お)いて、いずれにしても古代にその地名の源流があったと考えてよかろう。

大化の改新の制に50戸を以て1里とせよと定めているが、この1里は現在のような核家族の1戸とは異なる。核家族の1戸は当時は房戸と呼び、戸主を中心にしていくつかの房戸が集まって構成される大きな世帯を「郷戸」と呼び、これが1戸と見なされた。したがって古代社会ではまだ人口が少なく、且つ、1戸がいくつかの房戸の集まりであるとしたならば、いくつかの集落を寄せなければ1里（郷－大化改新〔645〕で里と定めたものを霊亀元年〔715〕には郷と改めた。）つまり50戸形成することは困難であった。したがって美理郷のひろがりも「地名辞典」にあるように旧三岡・中津・中佐都村等の範囲を考えてよかろう。

その中心的な地域に美理（ミトリ－ミミトリ）の地名が残存したものであろう。しかし、残存地名はその地域のはしに残ることもあるので一様に考えることはできない。そして、集落名も時の流れに隨って変化することも考慮したい。

中世にこの付近の集落名として表れているものを諏訪の造宮帳から拾うと、およそ次の通りである。　根々井・塚原・長土呂・曽根上・下（天正6年、同7年の諏訪上社造宮帳）　白和瀬之郷（白瀬－白合(しらせ)〔耳取地籍に字名として残っている。〕）市村之郷、塚原之郷、今井之郷（天正7年造宮帳）長享2年（1487）7月諏訪下社春宮の造宮帳に「御門屋(みかどや)」（現在の拝幣殿）の造宮を割り当てられた平原庄(ママ)の中の集落名として、耳取・市村・森山・前田原があらわれる。

天正6年（1578）にも平原之庄(ママ)の中に前記の集落名が見られる。天正7年の造宮帳には平原・森山・市村・耳取の集落名が見え、前田原は脱落している。ところが、前記白和瀬（白合）は上社の割り当てで、壱貫四百文出しており、同じ年に耳取は下社春宮の割り当てで壱貫七百文出している。この資料からすると同じ天正7年（1579）には現在の耳取地籍に白和瀬集落と耳取集落と2つの集落があって、それぞれ独立村として存在していたことが考えられる。

耳取のはじめの集落はどこにあったか、これも判然としない。もし、想定するとしたならば、字宮ノ北・宮・宮ノ前・字原・字宮ノ下等に散在していたものであろうか。白和瀬集落は現在字白合と呼ばれる地籍にあって、後に城下町耳取に吸収合併されたものと考えてよかろう。

桃源院寺記等によると小笠原系大井光長の四男行氏は耳取に入居して、この地域を領したと記している。その居館址は現耳取集落ではなく字五領・字白合付近が該当地域と推定される。

その理由は大井氏のはじめの菩提寺であったと伝えられる天龍山万福寺が字白合にあったといわれている。この寺跡に関しては小諸市誌編纂委員会の調査により、同寺の参道遺構が残存して

いることを確認している。(小諸市誌歴史扁（二）531頁～533頁参照)

また、その付近に残された石祠の向拝の石柱に刻まれた「五霊神社」の文字等からしてもこの付近の歴史的景観が浮かんで来る。また五霊城址も大井氏のはじめの居館の防衛がうかがわれる遺構である。そして、この付近に館跡と推定できる遺構が残されている。(小諸市誌歴史扁（二）小諸地域の城館址参照)

鎌倉時代後期から戦国時代初頭までおよそ250年間ほど字五霊（領）字白合付近に館を構えて、この付近の村落を支配したと考えてよかろう。その後応仁・文明の乱（1467～1477）がきっかけとなって戦乱は全国に波及した。佐久の地もその例外でなく四鄰譚藪の表現をかりると－、　延徳元年（1489）6月5日甲斐の武田、佐久郡に乱入云々（中略）岩村田を取り、岩尾を取る。国中壌（つちくれ）の如くわかれて、闘争やむ時なし、郷土拠レ山帯レ水陣城を築く、天変地妖かわるがわるあらわれ、天下飢饉す。－　甲斐国からは武田氏が攻め入り、更埴からは村上氏が戦いをしかけて来て戦乱の止むときがなかった。佐久の小豪士たちは競って山に據り、河を備えとして陣城を築いて自領を衛ろうとした。

小諸城は長享元年（1487）に大井光忠が築城したといわれる。岩尾城は文明10年（1478）大井行俊が築城したと伝えている。小田井城は大永年中（1521～1527）の築城といわれ、平尾城は永正年中（1504～1520）築城とされている。築城年月日の不明な城館址も多いが、創築のわかっている例から推測して応仁・文明の乱を契機として、その後30年か40年間に多くの城は築かれたと見てよかろう。

耳取城の構築の始期は耳取村誌によると「当城は寛元年間（1243～1246）大井光長、草創して四男行氏移住しせより累世の居城なれども、天正18年8月、城主大井政成、上野国へ国替えとなり、遂に廃城となる。」とあって、これによると大井光長が寛正年間に創築したことになっている。長光は小笠原系大井朝光の嫡子で岩村田宗家を継いでおり、岩村田には石並城等の備えがあったので、耳取まで出向いて築城する必要はない。光長の四男行氏が耳取に入居したことに信を措いても、その時代に直ちに陣城を築いて居住したとは考えられない。先に述べたように万福寺、五霊神社等のある字五領、字白合付近に居館したと考えるのが妥当であろう。

耳取大井の家譜もきわめて錯綜していて判断に迷うのであるが、笠系大成によると、

小笠原長清－朝光（大井庄）－光長（大井庄）－行氏（耳取）－行景（同）－長行（同）

（大井）岩村田　　岩村田

長行まででその後は途切れている。また高崎市阿久津町玄頂寺にある家譜によると、

大井新右衛門玄信（げんしん）（平賀玄信）－政勝（耳取城主）－政継-(同)－政成　（同）－政吉 ── 政景

とあって先の笠系大成とはつながりがない。玄信は平賀玄信（源心）といわれて、海の口城で初陣の武田晴信に滅ぼされた武将ではなく、海の口城の戦史は甲陽軍監の虚説ともいわれている。その限りに於いては玄信は実在した人物ではないことになる。

一方、平賀庄にいた平賀氏は文安三年（1448）大井氏と戦って滅び、平賀氏の所領は大井氏の手

に移ったとも言われている。内山城には大井左衛門尉貞清が入ったとされている（南佐久郡誌中世二武田氏の佐久侵入参照）　大井新衛門玄信と大井左衛門尉貞清との関係もさだかではない。さらに寛政重修諸家譜によると、次の通りである。

朝光――光長――時光――光家――政光――政朝――政則――政茂――政信――忠孝┐
　├忠重
　├忠次
　├貞隆〔佐久郡岩村田に在す。小県郡長久保に在す。信玄に捕らえられ甲府に死す。耳取に天竜山万福寺を建てたという説あり。
　├某（玄信）〔海野口に於いて討死すという〕┐
　├貞親　　┐三人は貞隆の
　├貞友　　┤子という説あり
　└貞清〔長篠の役で討死す。〕┘
　└政勝〔法名玄勝〕－政継〔信濃国耳取城を攻めとり、其の辺邑を知行す。時の人その名を耳取という。法名玄紅（江）〕－政成――政吉――政景

まことに混沌としているが、ここで今までの系譜を整理すると、大井二代光長の長子時光は大室に分駐したとされている。笠系大成では二代家光で系譜が切れている。その後時光の系譜が平賀に移って続いたとしても内山城に貞清が入ったのはいつのことか。寛政家譜では天正３年（1575）貞清は長篠で戦死したことになっていて年代的に合わなくなる。

貞隆も謎の人物であるが、明応２年（1493）に長久保氏の嫡子を大井氏の名跡にするとあり、また同５年６月には大井宗家（岩村田）を継いだものとしている。（四鄰譚藪）　この人物が耳取に天竜山萬福寺を開基したのではないかという説もあるが、耳取に居館しないでそのようなことは可能であろうか。

次に政継が耳取城を攻め取ったとしている。とすれば、政継の系譜の築城は考えられない。先に耳取に入居したと伝承されている光長の四子行氏の系譜の誰かが築城したものであろう。いずれにしても、ここでは築城の時期とその鍬入れをした人物は明らかにすることはできない。ただ考えられることは、戦国動乱の世の中に付近の諸城が次々に築かれる情勢の中で、相呼応するようにして鷹取山の要害を利して城造りをしたものと考えてよかろう。

耳取城の原地勢を概観すると、まず、西方に大河千曲が流れ、城域まで数十メートルの比高がある。北方は皿掛（さらかけ）の谷が次第に深さを増しつつ沢水を集めて千曲にそそいでいる。

皿掛の崖の西北角に奇巌鷹取山（たかとりやま）が大地から突兀と牙のような鋭い形姿で大空を刺している。南方は東久保田の田切が向かい合う玄江院境内との間に天然の隍を形成している。

このようなすぐれた自然の地形を利用して、東方の備えを人為的に施せば城地となるような優良な地形である。

耳取城も一挙に築造されたものでなくしだいに強化されたものと思われる。耳取城の細部を内

城から見ると、1．本郭（本丸）は千曲川に裾を洗われていてきわめて要害である。ところがよく見ると千曲のほとりから立ちあがる崖と本郭との間に横隍が穿たれていて防備をより堅固にしている。この備えはちょうど、小諸城が大平山と馬場との間に横隍を掘って本丸の備えを鞏固にしている手法とよく似ている。築城技術が相互に影響し合っていることがうかがえて興味が深い。

この横隍は南方に傾斜していて隍の中を歩くと字東久保田の田切に降り立つことができる。沢に降り立つあたりに湧水があって、水草が繁っている。当時は城の水の手として利用したことも考えられる。本郭の南側は字久保田の沢で一部は断崖となっていて十分な備えとなっている。

東側は深い隍を掘って、第二郭と区切っている。北側は矢張り内堀を縦に穿って西小屋曲輪と隔てている。内城の一つ一つの曲輪はそれぞれ独立して防備されている。

2．二の郭（二の丸）も同じように備えが厳重である。西方は本廓との間に深い隍を掘ってへだてられている。北方は西小屋曲輪との間に深い内堀を掘って区切っている。東方は三の郭との間に内堀がある。また、その内堀には西小屋曲輪と観音堂曲輪との間の内堀の低地に観音堂曲輪の下に隧道を穿って通している水路があり、二の郭と三の郭の間の隍を流れて字東久保田の水田を養（やしな）っている。往時、城水として隧道を穿つ技術があったか疑問である。後考を俟ちたい。

3．西小屋曲輪は本郭の北方の衛（まも）りであり、本廓との間には深い空隍がある。この郭の北方は皿掛の深い沢によって衛られている。西側は千曲の深い渓谷となっている。この北西廓の一角に「鷹取山」とよばれる奇巌がそそり立っている。西方を展望するには屈強な「物見台」があり、小諸方面から千曲川沿いに通じていた旧道を進撃する軍は一兵とも見逃すことはなかったであろう。

二の郭（二の丸）観音堂曲輪とは深い内堀によって区切られている。

4．三の郭（三の丸）は二の郭とは水路のある内堀によって隔てられ、北側は内堀によって観音堂曲輪と隔てられている。南側は字東久保田の田切地形によって自然の隍となっている。東側は現在人家や道路によって旧態を失っているが、往時はやはり空隍となっていたように思われる。5．その北側は観音堂曲輪で三の郭と空隍で相対し、西側は西小屋曲輪である。北側は皿掛の深い沢となっている。東方は現状では県道が通っているが、往時は空隍となっていたと思われる。

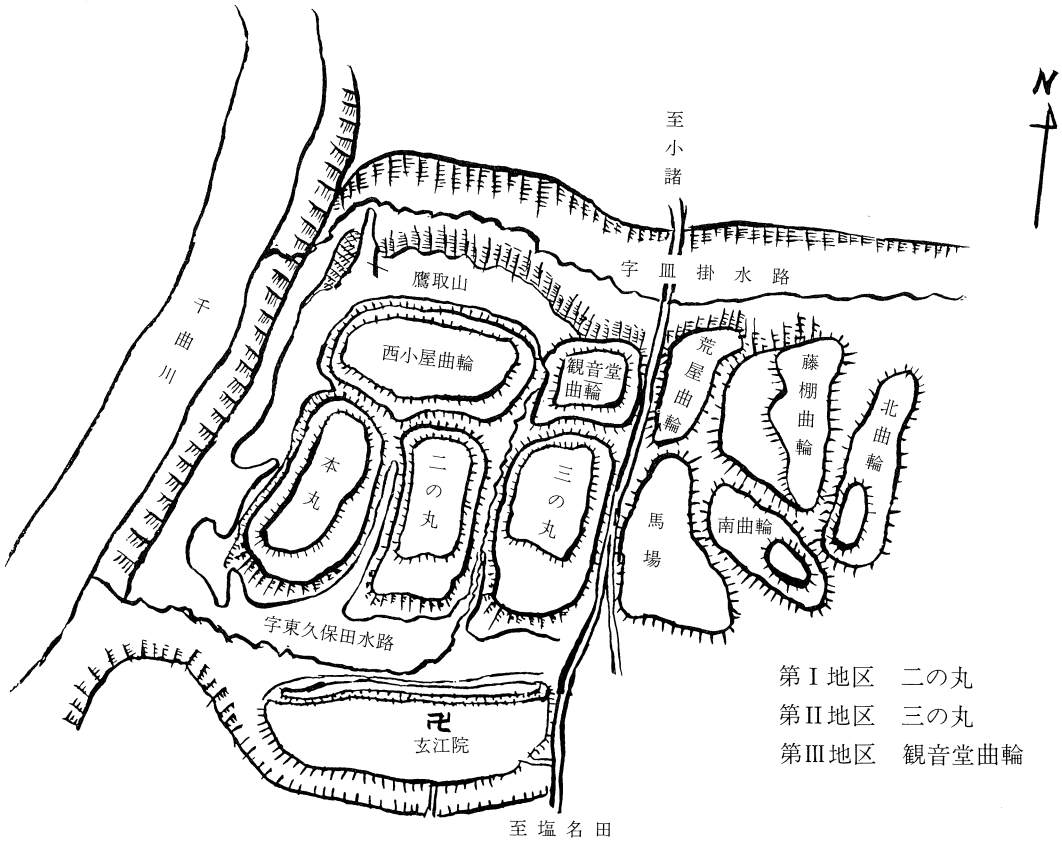
以上述べた本郭・二の郭・三の郭・西小屋曲輪・観音堂曲輪は内城と見てよかろう。外郭として、荒屋曲輪・馬場・藤棚曲輪・南曲輪・北曲輪があった。この外郭の規模も大きく、内城・外郭を合わせると佐久でも有数な大城である。南曲輪と北曲輪との間が大手になっていて、往時は大手門があったと伝えられている。外郭の形状については詳述はさけるが大手門の外側には城下町が拡がっていたとおもわれる。つまり現耳取集落の前身とみてよかろう。なお北曲輪の外側にも隍様（ほりよう）の凹地が延々と続いていて水路のように思われる。或いは城内へ水を導入したものであろうか。

また二の郭、三の郭等と字東久保田の田切をへだてて向かい合っている玄江院境内（けいだい）にも特異な遺構が見られる。すなわち、字東久保田に隣接した境内台地に東久保田の田切と平行するように空隍を穿っている。東側の県道沿いの寺院境内には土塁が残存している。県道はいわば隍跡の凹

地を利用して後に施設したものと考えてよかろう。

寺院の南側からまわって西側は現状は水田であるが、やはり自然の田切地形を利用して備えとした形跡が見られる。つまり玄江院境内そのものが、大井政継の隠館といわれているように城館の遺構とも考えられる。

滅びしものはなつかしいといわれるが、このような規模の大きい城郭を築いた往時の人々の営みのすさまじ程のエネルギーに驚嘆すると同時に一抹のはかなさを禁じ得ない。



第47図　耳取城略図

Ⅵ 総　　括

耳取城跡（古城遺跡）において検出された各々の遺構・遺物については、前述した。

検出された遺構には、住居址2棟、堀址5基、竪穴状遺構5基、溝状遺構4基、土壙24基がある。

一方、出土遺物には、土器、石製品、鉄製品、銅製品、自然遺物として、炭化米・炭化アワがある。

住居址は、平安時代の一時期である。

以下、順をおって、耳取城跡の遺構・遺物について一瞥したい。

まず、縄文時代では、遺構は検出されなかったものの、遺物として、縄文土器片、打製石斧、石鏃があるが、量は少ない。時代的には、縄文時代後期と考えられる。出土遺物が少なく、推測の域にとどまるが（本遺跡に縄文時代の遺構の存在も考えられるが）、本遺構が採集・狩猟の場所であった可能性がある。先に調査された宮の北遺跡[(1)]でも打製石斧・石鏃が出土しており、本遺跡の傾向と類似している。第2章でも触れたが、付近に、久保田遺跡[(2)]があり、それとの関連が考えられる。

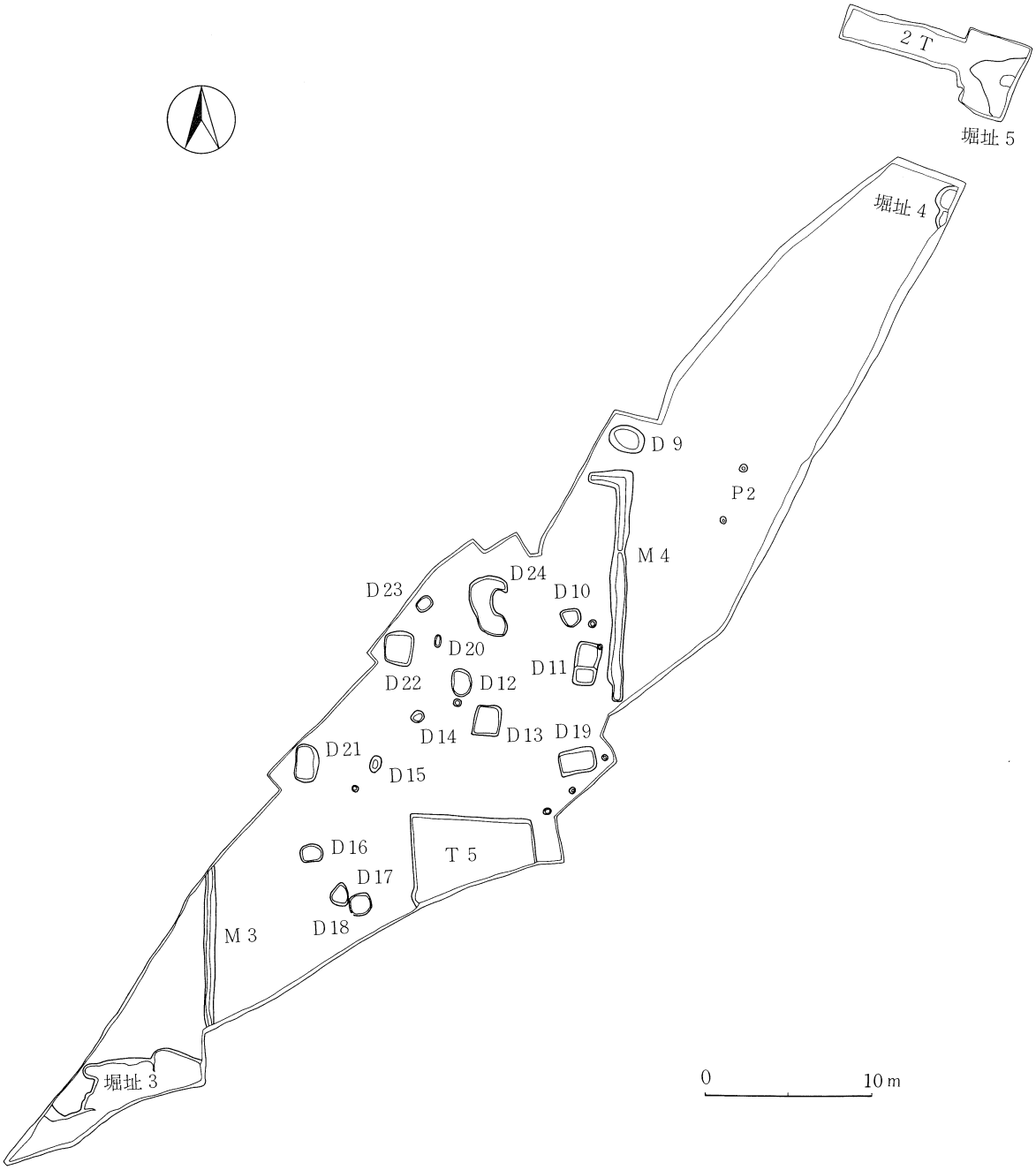
弥生時代も、遺構は認められなかったものの、弥生時代後期箱清水期の土製円板が1点出土している。同時期の遺跡には、前述した久保田遺跡のほか、宮ノ北遺跡でも破片が出土している。何分、土製円板1点の出土だけであり、弥生時代人の足跡が残されている点を指摘しておくにとどめておきたい。

弥生時代以降は、しばらく空白があるようだ。出土土器片の中には、古墳時代後期の土師器片があり、既出資料で、第Ⅲ地区から、奈良時代の長胴の甕が出土しており、この前後の時期の住居址が存在していた可能性が強い。このように、古墳時代後期、平安時代の住居址が重複する例は、市内南部の遺跡での一般的な在り方となっている。

平安時代にはいると、住居址が認められる。第1・2号住居址がこれにあたり、出土土器から

第10表　耳取城跡住居址一覧表

住居址	平面プラン				壁高	カマド	時期
	形態	規模（cm）		主軸方位			
		東西	南北				
H1	隅丸長方形	375	472	E-5.0°-S	10～30	東	平安時代中葉
H2	隅丸長方形？	(318)	(300)	E-13.5°-S	0～7	東	平安時代中葉



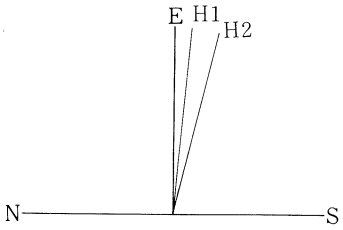
第48図　第Ⅰ地区遺構全体図

10世紀中葉に比定される。このうち、第2号住居址は、第2号堀址の構築により南部を壊されている。

平面形態は、第2号住居址が完存しておらず、はっきりしないが、隅丸長方形を基本とするようだ。

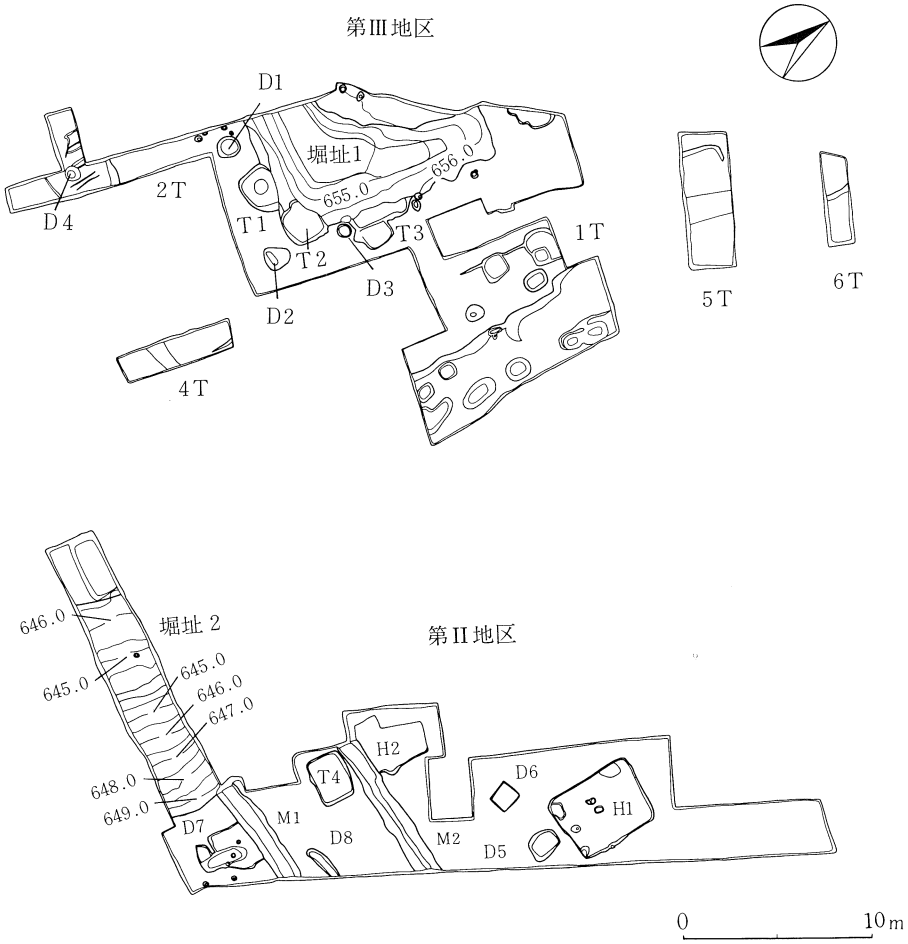
規模は、第1号住居址が17.7㎡を量る。第2号住居址はそれよりも小形になるかもしれない。

第1号住居址の数値は、時間差を有しているが、小諸市宮ノ反遺跡の平安時代（9世紀前半）の住居址4棟の平均値16～17㎡と大差ない。

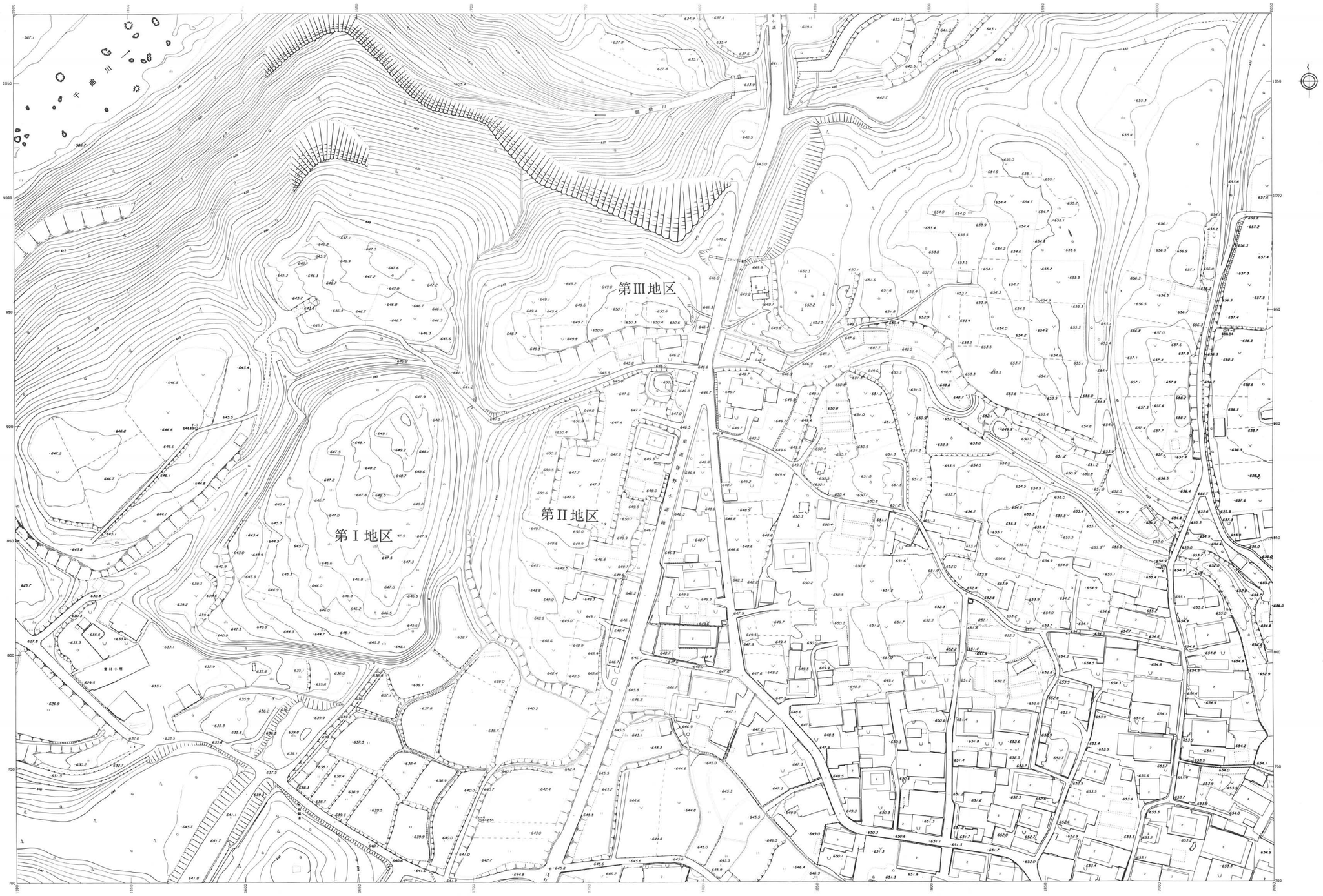


カマドを中心とする主軸方位

カマドを中心とする主軸方位は、右の図に示したように、2棟とも東を示している。また、カマドの残存状況は2棟とも悪く、ほとんど言及できないが、カマドに用いられた石材の多くは、千曲川に近いこともあり、川原石である。



第49図　第Ⅱ、Ⅲ地区遺構全体図



第50図　耳取城跡実測図

1:500

カマドについては、小山岳夫氏により、佐久平における古墳時代後期から平安時代の108棟の集成がなされている[3]。氏によると北壁(中央)にカマドが設置される例は、古墳時代後期～奈良時代においては9割以上を示すという。続く平安時代では、前半期では北壁に構築される例が多く、時期が降るにつれて東壁あるいは東方隅に設けられる例が増加するようだ。氏は、こうした要因については、地形的な要因だけで決定されるとは考えられず、当時の社会的・自然的要因を勘案すべきであると指摘されている。いずれにせよ、平安時代にはいると東向きのカマドが増えてくる点は注目されてよく、本遺跡の住居址においてもその傾向が認められた点指摘しておきたい。

柱穴については、他の遺跡でも見られるように、2棟ともはっきりしなかった。

貼床は、2棟ともに認められた。いずれも掘り方は、中央部が浅く、壁周辺部が深くなっている。貼床がなされるのは、2棟とも床面が全体層序第III層の軽石層にとどまっていることにも関連するものと思われる。

一方、遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器の土器類の他、銅器、鉄製品、砥石がある。

土師器には、杯・高台付杯の外、図示しなかったが甕がある。杯類では、内面黒色処理されたものは少なくなるようだ。須恵器では、在地産の甕が主体を占め、杯は皆無に等しくなる。灰釉陶器の進出と関係があろう。須恵器については、御牧原窯産と考えられるが、御牧原窯址についていま一つ明らかでないため、今後の課題すべき点が多い。

灰釉陶器はいずれも破片で図示しなかったが、東濃窯産の製品で、大原2号窯期に比定され10世紀後半に位置付けられよう。

この他、第1号住居址から銅器が出土している。椀状の器の口辺部にあたる。佐久平では、今まで例がないため、今後の類例の増加に期待したい。

中世の城跡に関連する遺構には、堀・帯郭・土壙などがある。

堀址は、総計5基検出された。第1号堀址は、第III地区において検出された。調査以前の段階では確認できなかったものである。1個所で堀が切れており、出入口部としての通路と考えられる。遺物から推測すると、堀で囲まれた内部には、建物があった可能性が強い。伝承によると、穀物倉があったとされる[4]。第1号堀址出土の炭化米、炭化アワはそれを裏付けるものではないだろうか。同じく、これも伝承ではあるが[5]、耳取城は、戦火に遭っておらず、廃城となったとされる。おそらく、建物を焼き(米等の貯蔵物も含む)、廃材を堀に埋めたのではないだろうか。また、石臼にも表面に煤の付着があり、割れ口にないものがあるから、建物の焼却後割られ、廃棄されたと考えられるものがある。いずれにせよ、第1号堀址は、本城の最後の状態を示していると思われる。

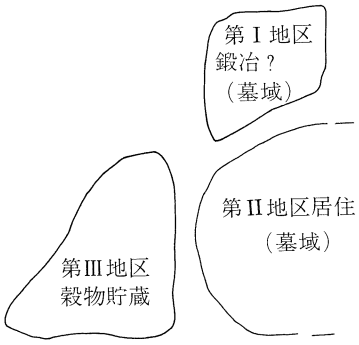
第2号堀址は、堀切で、北部に土塁が設けられていたと考えられる。また、堀址底部に溝が認められ、水の流れた形跡を示している。この溝が、どのような機能を果たしていたのかは、明確にし得なかった。

この外、第3～5号堀址は、全体を把握していないが、一応、堀として把えた。

以上の外、第III地区第１・４・５トレンチは帯曲輪と考えられ、南部のみ２度にわたる構築を行っている。

第１トレンチの第１次面は、土壙が認められた。推測にとどまるが、防御的な施設と考えられなくもない。また、第５トレンチの第１次面で認められた礫の集積もあるいは投石用としての意図をもって置かれたのかもしれない。

第２次面は、第１次面の埋め立てを行い平坦面を作っている。第１トレンチの所見では、内耳土器による煮炊きが行われた可能性がある。



第51図　各郭（第Ⅰ～Ⅲ地区）の機能想定図

第Ⅰ地区では、鉄鋌等を出土した土壙が認められ、出土状態等から、排鋌場と考えた。こうした遺構は、鍛冶遺構と伴うようであり、したがって、第Ⅰ地区に鍛冶遺構の存在する可能性が強い。

この他、第III地区の馬の埋葬された土壙も、この時期に伴うと考えたい。

以上を総合すると第51図に示すように、調査された三つの郭に関し、次の機能が想定される。

調査は、郭全体に及んでいないため、この外にも当然異なった機能も考えられるが、一応の目安として提示したものである点、予めお断りしておく。

まず、第III地区は、穀物倉の存在が考えられる。繰り返しとなるが、出土遺物の検討からであり、伝承を裏付けるものであろう。また、第２次面では、煮炊きの場として使われた時期があったらしい。

第II地区は、第１号溝状遺構から内耳土器、青磁が出土していることから、付近に居住的施設があったものと考えたい。北部に、堀に併行して堀切（第２号堀址）を設けていることも注目される。また、採集資料ではあるが五輪塔の一部があり、それ自体移動した可能性もあるが、付近に墓域が存在した可能性もある。

第Ⅰ地区は、鍛冶が行われていた時期があったらしい。また、第３号堀址から、五輪の一部が出土していることから、第II地区と同じく墓域が存在した可能性がある。

遺物では、内耳土器片、青磁片、石臼、石鉢、鉄製品、古銭などのほか、自然遺物として炭化米・炭化アワがある。

内耳土器・青磁は、図示し得るものがなく割愛したい。また、土師質の土器もほとんど見られなかった。遺構の性格によるものであろうか。

石臼は、図示したもので９点ある。粉挽き臼がほとんどで、茶臼は第２号土壙出土の１点のみである。いずれも破片で、割られたものと考えられている。

三輪茂雄氏は、次のように述べられている。すなわち、「遺跡や古い住居址などから発掘される石臼は、真二つに割れているものが大部分である。まれに、畑の中や、土手、石垣の間などでみつかる場合も、たいてい二つに割れている。割ってすてるのは石臼に限らず使い古した道具を廃

棄処分するときは一般に行われた。山口県大島郡久賀町立歴史民俗資料館長、松田國雄氏によると次の通りである。『挽き臼は餅つき臼、だいがら臼と同じく神聖視され、臼をまたがない、臼の上にものを置かない、もちろん正月には、わかざりや餅を供える。不要になった挽き臼は「魂ぬき」といって、げんのうなどで二つ割りにして捨てる。この割られた臼には神様は宿っていないので、普通の石と同じように処理してもよい。』とされている[6]。

目のパターンは、使用による磨耗のため、不明なものがあるが、6分画と8分画のものが認められた。

鉄製品には、鉄釘などの他、毛抜き形のものが1点出土した。鉄釘は小形品である。

毛抜き形鉄製品については、当地方で類例がないため、今後の課題としておきたい。

古銭は、5種7点が出土している。城跡の年代とも関連して触れておこう。

まず、築城時期については、遺構・遺物の面からは類推できず、第Ⅴ章で永原秀山先生が、触れておられるので、そちらに譲りたい。

一方、城跡の年代のある一時期については、古銭からの推測がある程度可能である。桐原　健氏は、多くの事例をもとに、遺構の年代決定を出土した古銭のみで行うことの危険性を説かれておられる[7]。しかしながら、年代を推定する遺物がほとんどない場合、ある程度は用いざるを得ない。ここでは、こうした指摘を踏まえ、年代の目安を得るため、古銭を用いて考えたい。また、本銭と私鋳銭の区別も必要であるが、時間的制約もあり、全てにわたっては明確にし得なかった。先述したように本遺跡出土の古銭には5種があるが、最も新しいものは、永楽通宝で渡来銭と考えられる。

鋳造は、永楽6年(1408)とされている。したがって、本城跡のある一時期は、中世後半の15世紀代を与えても大過なかろう。

自然遺物については、炭化米の一部について後述するように中川原捷洋先生の鑑定を受けた。佐久平においては、佐藤敏也氏による佐久市市道遺跡第9号住居址（古墳時代後期、7世紀）出土の炭化米の鑑定結果がある[8]。市道例は、米粒は小つぶながら短型、日本型の玄米で、極少量の長粒・円粒も含まれているという。水・陸稲の別、粳・糯の別については明らかでないという。

また、市道例は、中世の山城である、佐久市鷺林城出土の米粒の計測値にも近似しているという[9]。ここでは、検討する余地がなく、一応データの提示にとどめておきたい。

いずれにせよ、当時の農業史、食物史の一端を探る上で寄与することになろう。

以上、耳取城跡（古城遺跡）で検出された遺構・遺物を中心に瞥見してきた。当地方では、今までのところ、中世の遺跡の調査例は徐々に増えてきたとはいえ、少ないこともあり、小稿では問題点の指摘に終始した感がある。こうした点については、今後の課題としておきたい。

最後に、寒風の中調査に参加された皆さん、報告書作成に際し、ご協力いただいた皆さんに厚く御礼申し上げ、総括としたい。

註

1　小諸市教育委員会　1979・1980　『宮ノ北　第1・2次』

2　小諸市教育委員会　1984　『久保田』

3　小山岳夫　1984　「佐久平におけるカマドについて」　佐久市教育委員会　『若宮遺跡』

4　調査員山浦　実氏による。

5　前掲註4に同じ。

6　三輪茂雄　1978　「第7章　臼の民俗　1　臼の神聖視」　『ものと人間の文化史26　臼』
法政大学出版局
また、小諸市菱形城址、五ヶ城遺跡出土の石臼についても同様である。
小諸市教育委員会　1980　『菱形城』
小諸市教育委員会　1981　『五ヶ城』

7　桐原　健　1985　「研究の窓　編年資料としての銭貨の限界」　『信濃』第37巻第5号

8　佐藤敏也　1976　「V　第9号住居址出土の炭化米」　市道遺跡発掘調査団　『市道』　佐久市教育委員会

9　前掲註8に同じ。

付編

小諸市耳取城跡より出土した炭化籾の判別について

農業生物資源研究所　遺伝資源部
中川原　捷洋

我が国では古代の遺跡調査に際して、炭化した植物遺物がしばしば発見される。これらは、その時代の民衆がどのような生活を送っていたか、どのような生活水準であったか、農業の発達レベルは如何であったかなどを示し、ここから貴重な情報が得られることがある。

小諸市耳取城跡で、完全な形を有する稲籾の炭化遺物が多数出土した。ここでは、その炭化物の植物の形状から判定したのでその結果を報告する。

1　炭化米の保存状況

出土した炭化米は、殆どすべてが籾であって、玄米あるいは精白米はなかった。また、籾以外の異物も少なく、均質であった。その意味では、極めて人工的な遺物で籾の貯蔵を主としたものであったとみられる。籾の外観は形の崩れや歪みがなく、保存状態は極めて良かった。遺物の圧縮や変形がないと見られることは、あとに述べる外観形質の調査精度を高めたとともに、炭化前の籾の管理が行き届いていたことを裏付けるものであろう。

2　炭化米の形状について

炭化した材料は籾を単離し外観の調査を行った。長さと幅の計測が可能であった粒について、ソニックディジタイザー（川上ら 1980）を用い機械測定を行った。

1）　炭化籾の形について

測定可能な粒に分離できた炭化籾 35 粒についてその結果を述べる。表 1 に示すように、粒の長さは平均 5.9 ㎜、幅は 3.0 ㎜で、長軸比は平均 2.0 であった。全サンプルの変異は極めて小さく（図 1）、この炭化籾が均質な集団からなっていることを示すものである。長幅比 2.0 は現在世界に栽培される稲品種と比較すると明らかに短粒種に属している。したがって、粒形からみた分類基準からのみ判定すれば、典型的なジャポニカに属する。図 1 の変異は付図（中川原 1985）のなかでみると、アジア北部とりわけ日本産の材料に近い値であり、そのなかでも短粒種に偏っているといえるものであった。

2）　炭化玄米の形状について

本遺物の籾殻の部分は破壊されやすく、完全な籾に分けるのはやや困難であったが、籾殻ははく離しやすく玄米として取り出すのは比較的容易であった。そこで、籾と同じように玄米の長さ、

幅を測定した(表2)。測定した42粒では、長幅比は平均1.8であり、籾の場合と同じく、変異幅は小さく、均質な米粒であることを示した(図3)。炭化米の玄米からその形状や特性を推定するには、永松(1977)によるの結果が参考となる。それによると、九州の立岩遺跡から出土した炭化米の形状の分布がしめされているので、我が国で出土した炭化米の玄米が直接比較できる。ここで測定した材料の長幅比1.8と立岩遺跡のそれとを比較すると、耳取炭化米は「短粒の中」に入ると結論できた。したがって、玄米の形状からも本炭化米が短粒種に属していることが明らかである。

3　炭化米の粒大について

1）　籾の粒大について

次に粒の大きさについて述べる。ここでは籾の長さと幅の積を指標として、粒の大きさを判断の基準とした。値の平均は17.9㎜であって、かなり小粒に偏っている種類であった。付図に示した乾物材料による長幅積の値からのみ判断すると、ジャポニカが多いとされる北部アジアの値より明らかに小さい値を示し、これからはインドやスリランカ等にみられる極小粒類の仲間ではないかとも考えられた。

一方、植物遺物は炭化する過程で幾分かは縮小すると考えられる。その縮小比率は耳取炭化米の場合どの程度であったかを明らかにするのは難しいが、実験による炭化では極めて僅か（1～2％）しか縮小しないとされている（安田1927)。これが耳取炭化米にも適用されると仮定すれば、この種類は現存する日本稲とは違ったグループに属する可能性があるといえないことはない。

2）　炭化玄米における粒大について

さらに、推論を重ねるために、前述した立岩遺跡の炭化米と比較してみた。すなわち、立岩出土米は全体的に小粒種に属するが、それと比較しても、耳取炭化米はさらにやや小粒の部類に入ると判断される。一方、立岩炭化米の周到な分析(永松1977)から、立岩米は現在の日本稲と比べると、小粒あるいは極小粒に属するものが多いとされた。したがって、これと比べても大きくはない耳取米は小粒米に属する可能性が高いと思われる。

4　その他の特徴

籾からみると、表面には小毛があるようである。また、芒のない籾が優先しているので、作物としては栽培化の進んだ洗練された種類(品種)と思われる。玄米の形から判断すると、粒肩の張りと厚みから糯種（もち）である可能性は低く、粳種（うるち）であったと考えられる。

5　結論

以上から判定した耳取炭化米は次のようである。すなわち、籾と玄米の形からは現在の日本稲と同じく、無芒の短円粒種で、極小粒種に属し、集団内の変異が小さいため、品種の混ざりは少

ないと考えられ、均質な粳米であると推定される。また、農学的な分類基準であるインディカ、ジャポニカの範疇からすれば、ジャポニカに対応する品種であろう。

また、現在の日本稲と比べると、耳取米は極小粒種に属した。これまで我が国で出土した炭化米は短粒種が多く、いわゆる古代出土米は現在までのところ短粒種が優先して災害されていたと考えられている。そのなかでも、耳取米は極短粒種に入るものであった。以上から推定されることは、この地域が本遺跡の時代において、すでに独特の稲品種を生み出していた可能性を示すものではなかろうか。しかしながら、結論を出すには他の遺物および多量の分析をさらに行わねばなるまい。

以上からさらに結論すれば、作物としての完成度が高いことから、耳取城跡で発見された炭化米は、かなり高度な生活を営む人々によって、栽培され保存されたいわば確立した品種ではなかったかと考えられる。

米　茨城県谷田部町観音台２丁目１－２

文献

1、川上潤一郎・宮崎尚時・中川原捷洋　(1980)「超音波計測機利用による形質の長幅および面積の迅速測定とデータの処理装置の開発」『育雑 30 別冊２』

2、中川原捷洋　(1985)「稲と稲作のふるさと」　今昔書院（東京）：PP 234

3、永松土巳　(1977)「植物性遺物」『立岩遺跡』：Ｐ 325－334

4、安田貞雄　(1927)「日本太古の米」『農園』：Ｐ２－９

表1　炭化籾の長さ・幅・積および比の計測結果

籾の調査				
No.	長さ (A)	幅 (B)	積(A×B)	比(A/B)
1	5.8 mm	3.0 mm	17.4 mm²	1.9
2	6.5	3.0	19.5	2.2
3	5.8	3.2	18.6	1.8
4	6.5	3.2	20.8	2.0
5	5.9	3.1	18.3	1.9
6	5.6	3.0	16.8	1.9
7	5.9	2.9	17.1	2.0
8	5.9	2.8	16.5	2.1
9	6.4	3.0	19.2	2.1
10	6.4	3.3	21.1	1.9
11	5.6	3.0	16.8	1.9
12	6.3	3.1	19.5	2.0
13	6.1	3.3	20.1	1.8
14	6.3	3.0	18.9	2.1
15	5.6	3.0	16.8	1.9
16	5.5	3.0	16.5	1.8
17	5.7	3.1	17.7	1.8
18	5.7	2.9	16.5	2.0
19	5.8	2.8	16.2	2.1
20	5.6	3.0	16.8	1.9
21	5.8	3.1	18.0	1.9
22	6.3	3.1	19.5	2.0
23	6.3	2.8	17.6	2.3
24	5.5	2.8	15.4	2.0
25	5.8	3.3	19.1	1.8
26	5.7	3.0	17.1	1.9
27	5.7	2.9	16.5	2.0
28	5.8	3.0	17.4	1.9
29	5.5	3.0	16.5	1.8
30	6.5	3.1	20.2	2.1
31	5.8	2.8	16.2	2.1
32	6.2	2.7	16.7	2.3
33	5.9	3.2	18.9	1.8
34	5.7	3.0	17.1	1.9
35	5.9	3.2	18.9	1.8
AVE (平均)	5.9	3.0	17.9	2.0

表2　炭化米の玄米における長さ・幅・積および比の計測結果

玄米の調査				
No.	長さ (A)	幅 (B)	積(A×B)	比(A/B)
1	4.6 mm	2.6 mm	12.0 mm²	1.8
2	4.3	2.6	11.2	1.7
3	4.1	2.5	10.3	1.6
4	4.2	2.6	10.9	1.6
5	4.3	2.3	9.9	1.9
6	4.5	2.3	10.4	2.0
7	4.1	2.1	8.6	2.0
8	4.0	2.2	8.8	1.8
9	4.2	2.5	10.5	1.7
10	4.0	2.3	9.2	1.7
11	4.2	2.6	10.9	1.6
12	4.6	2.4	11.0	1.9
13	4.2	2.3	9.7	1.8
14	4.5	2.6	11.7	1.7
15	4.3	2.5	10.8	1.7
16	4.3	2.5	10.8	1.7
17	4.1	2.4	9.8	1.7
18	4.9	2.4	11.8	2.0
19	4.0	2.6	10.4	1.5
20	3.9	2.5	9.8	1.6
21	4.6	2.4	11.0	1.9
22	4.3	2.5	10.8	1.7
23	4.3	2.3	9.9	1.9
24	4.1	2.5	10.3	1.6
25	4.0	2.4	9.6	1.7
26	4.1	2.4	9.8	1.7
27	4.5	2.5	11.3	1.8
28	4.3	2.4	10.3	1.8
29	4.2	2.4	10.1	1.8
30	4.3	2.4	10.3	1.8
31	4.1	2.8	11.5	1.5
32	4.0	2.4	9.6	1.7
33	4.2	2.4	10.1	1.8
34	4.2	2.4	10.1	1.8
35	4.1	2.2	9.0	1.9
36	4.0	2.3	9.2	1.7
37	4.2	2.3	9.7	1.8
38	4.3	2.4	10.3	1.8
39	4.0	2.3	9.2	1.7
40	4.1	2.3	9.4	1.8
41	4.3	2.5	10.8	1.7
42	4.6	2.6	12.0	1.8
AVE (平均)	4.2	2.4	10.3	1.8

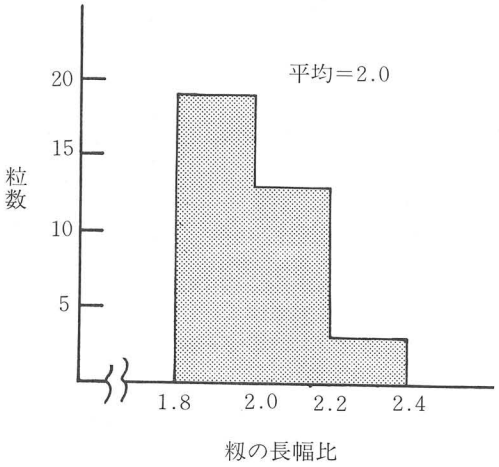


図１　炭化籾の形の変異

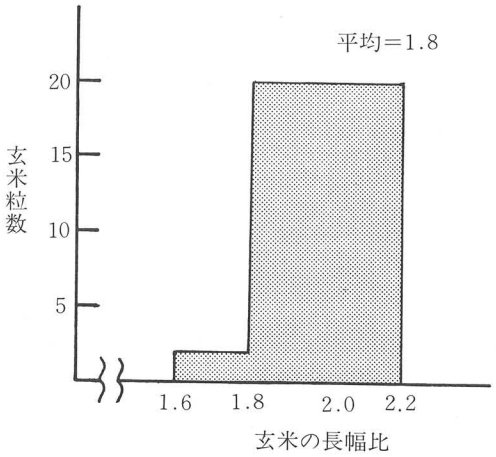


図３　炭化米の玄米の形の変異

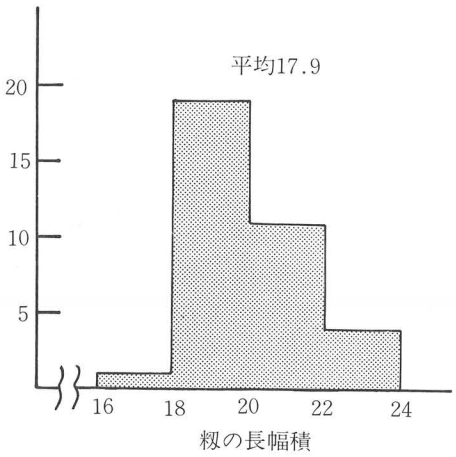


図２　炭化籾の大きさの変異

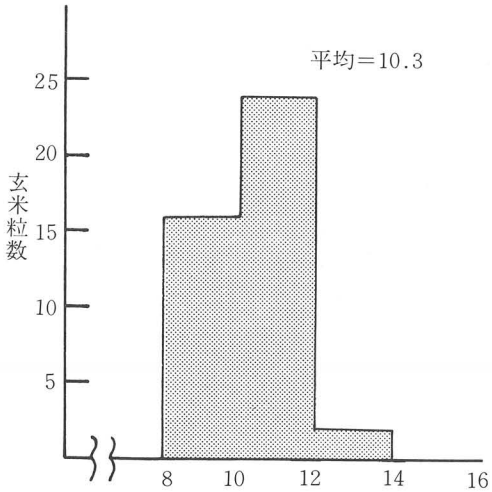
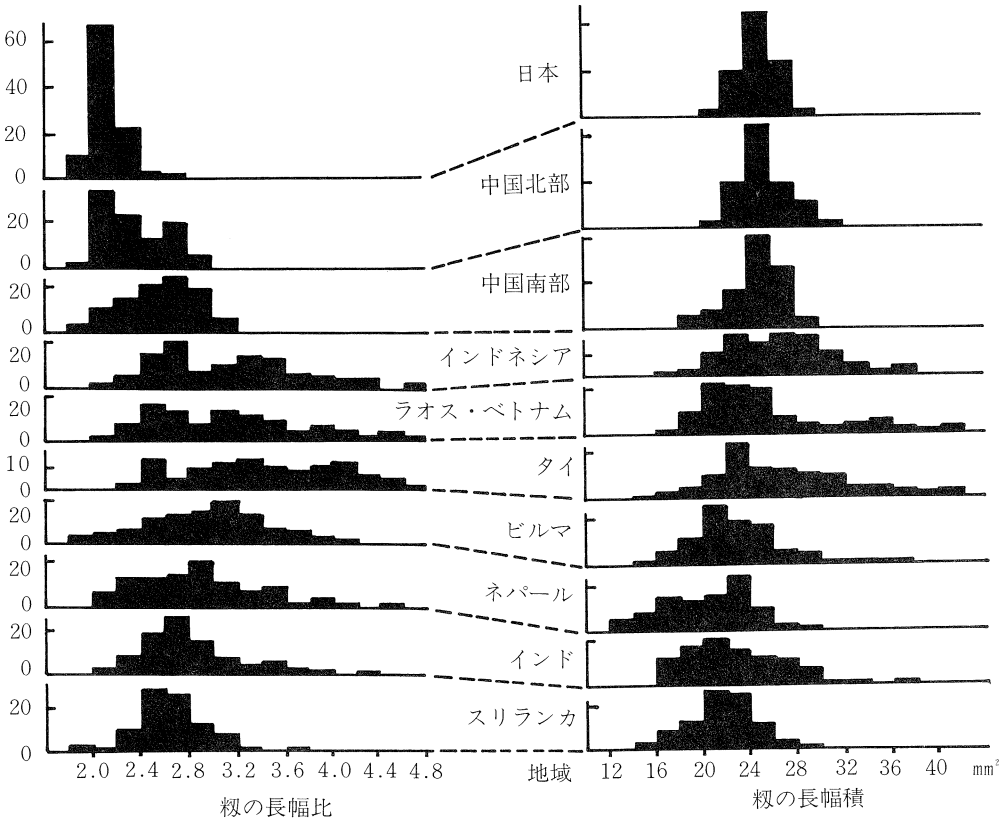


図４　炭化米玄米の大きさの変異



付図　アジア各地における稲籾の粒型および粒大の変異
（中川原「稲と稲作のふるさと」1985ＰＰ234.古今書院Ｐ140より）

引用参考文献

浅科村教育委員会　1985　『矢嶋城跡』

荒牧重雄　1968　『浅間火山の地質』　地学団体研究会

伊那市教育委員会・南信土地改良事務所　1979　『カンバ垣外－工藤氏（小井出）にまつわる中世城館址－』

井上宗和　1973　『ものと人間の文化史 9　城』

伊礼正雄・熊野正也　1975　『臼井南』

伊礼正雄　1977　「III　さまざまな遺跡と調査の問題点　11　中世城館址の調査」　甘粕　健編　『考古資料の見方＜遺跡編＞』

上田正昭編　1977　『日本古代文化の探究　城』　社会思想社

小川　浩編　1976　『日本の古銭』　人物往来社

葛西城址調査会　1974　『青戸・葛西城址調査報告II』

小諸市教育委員会　1980　『菱形城址』

小諸市誌編纂委員会　1979　『小諸市誌　歴史扁(1)』

小諸市誌編纂委員会　1984　『小諸市誌　歴史扁(2)』

佐久教育会歴史委員会　1980　『佐久の歴史年表』

佐藤甦信・遮那藤磨呂　1975　「開善寺境内遺跡」『下伊那考古学会誌II』

佐藤甦信　1975　「松尾南の原遺跡概報－中世屋敷跡を中心とした－」『下伊那考古学会誌II』

信濃教育委員会南佐久部会　1935　『南佐久郡の古城址調査』

内藤　昌　1979　『城の日本史』　日本放送協会

伴　信夫他　1978　「大熊城址」　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市　その1・その2　昭和48年度』

平井　聖他　1980　『日本城郭大系　8長野・山梨』　新人物往来社

平井　聖他　1981　『日本城郭大系　別巻I　城郭研究入門』　新人物往来社

平井　聖他　1981　『日本城郭大系　別巻II　城郭研究便覧』　新人物往来社

三輪茂雄　1976　『ものと人間の文化史 25　臼』　法政大学出版会

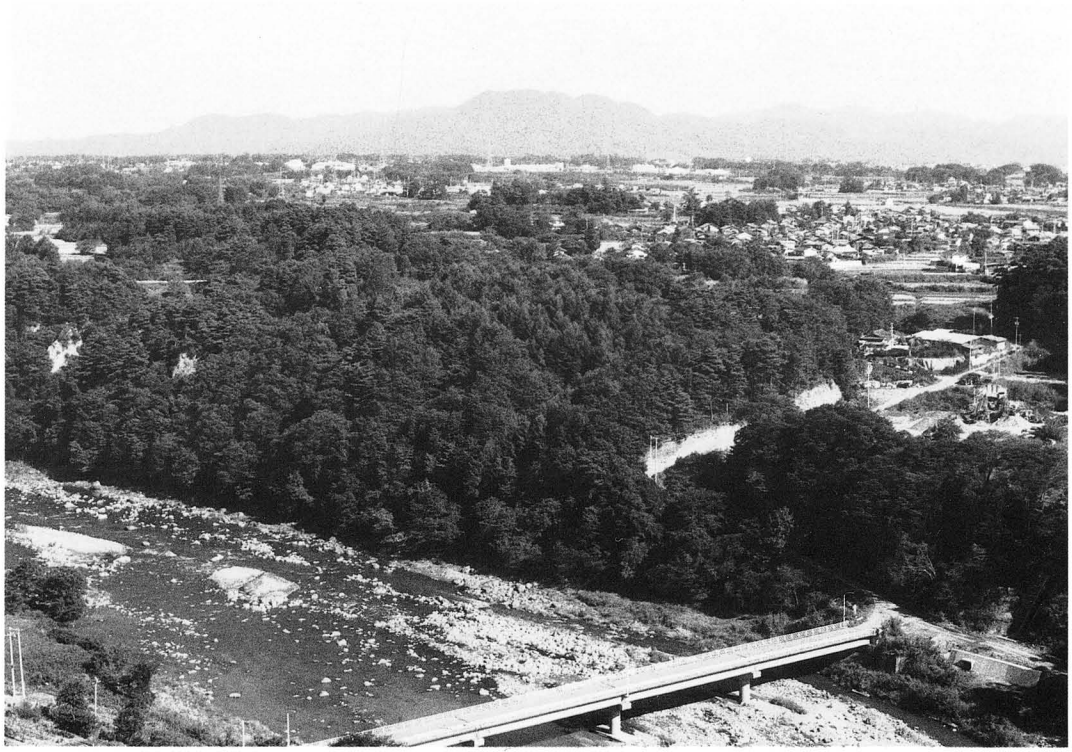
望月町教育委員会　1985　『望月城跡』

八木貞助　1936　『浅間火山』　信濃教育会佐久部会

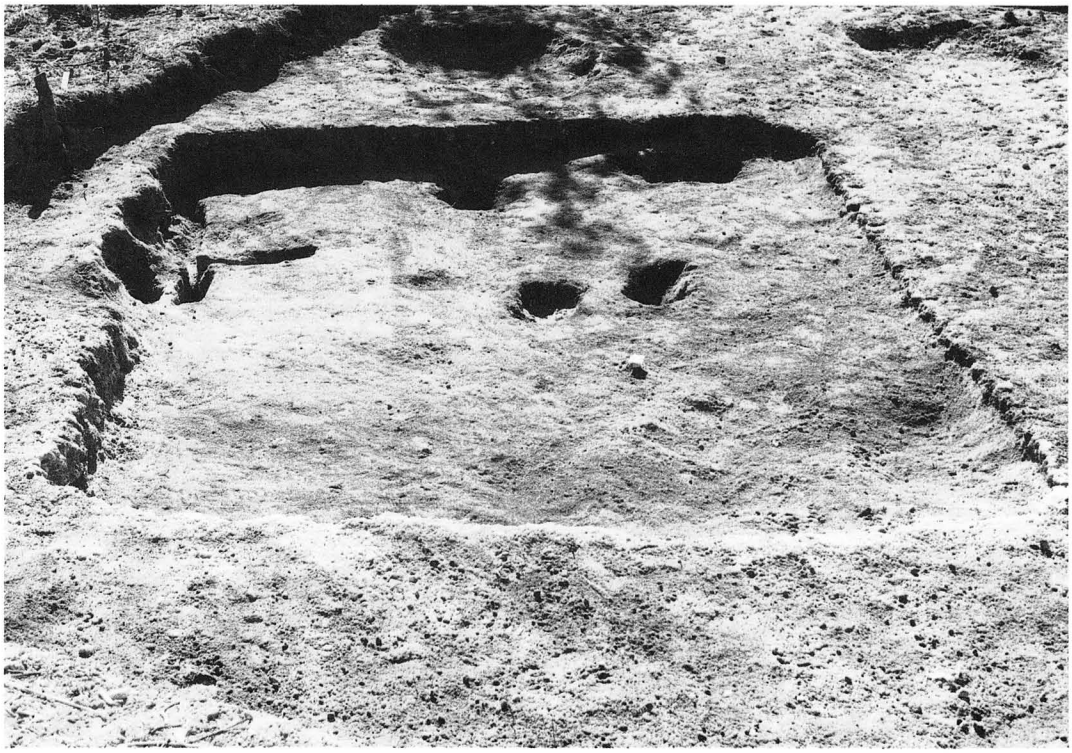
山田瑞穂他　1975　「小坂城址遺跡」　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　岡谷市　その1・その2　昭和49年度』

山田瑞穂　1978　「長野県における中世山城調査の現状と問題点－南信地方を中心として－　『中部高地の考古学』

図　　版



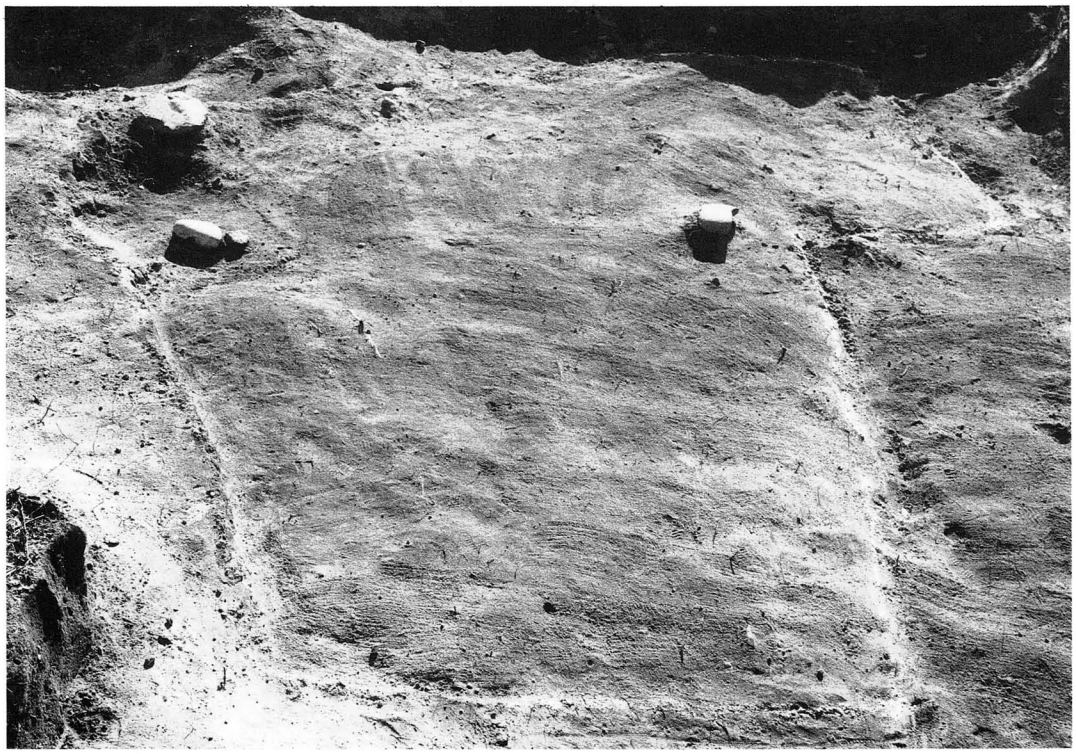
1　遺跡遠景（北方より）



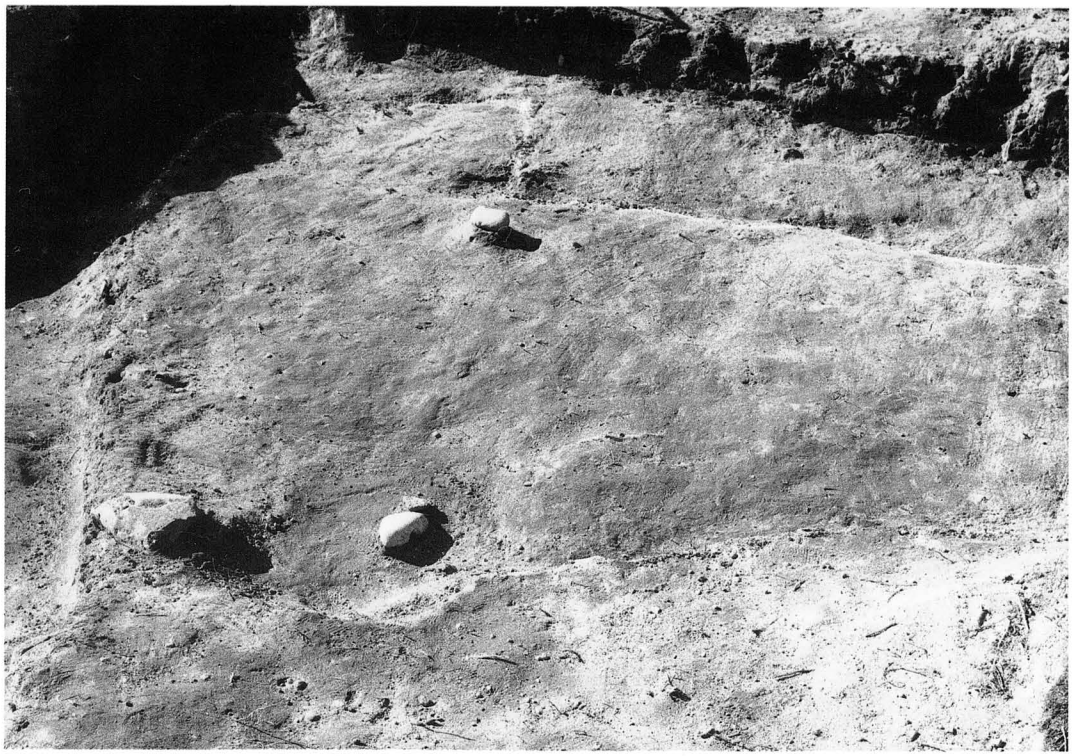
2　第１号住居址（東方より）

図版 2

1　第１号住居址掘り方（東方より）



2　第２号住居址（東方より）

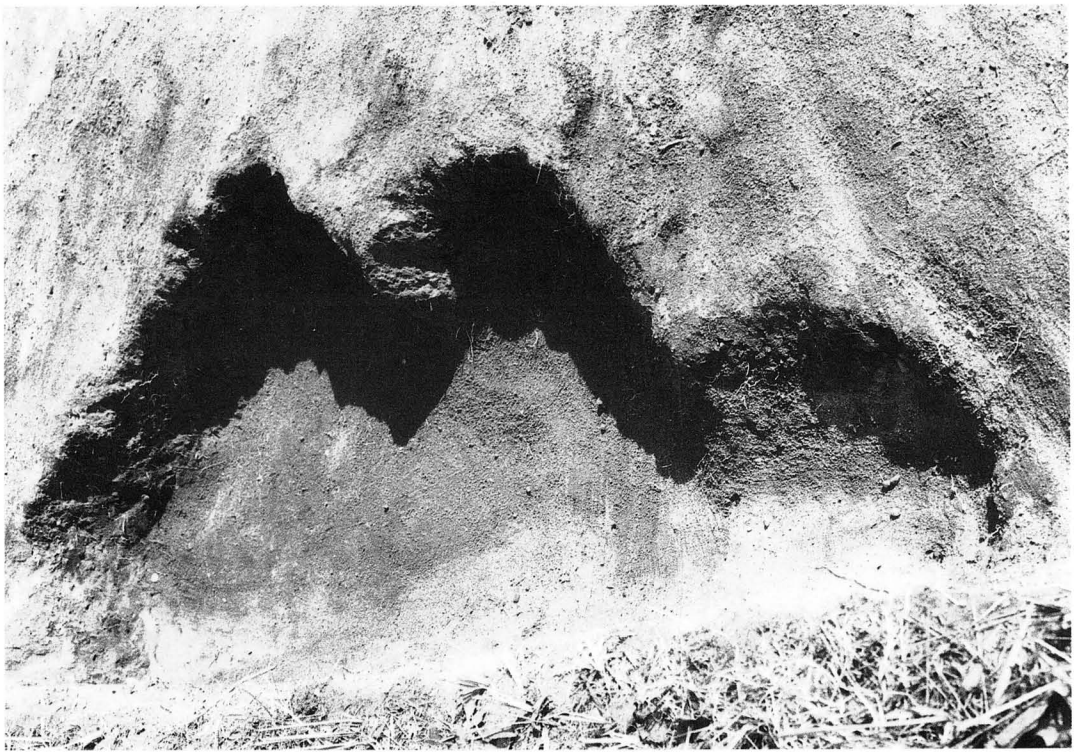


1　第２号住居址（南方より）

2　第２号住居址掘り方（東方より）

図版 4

1　第１号堀址（東方より）

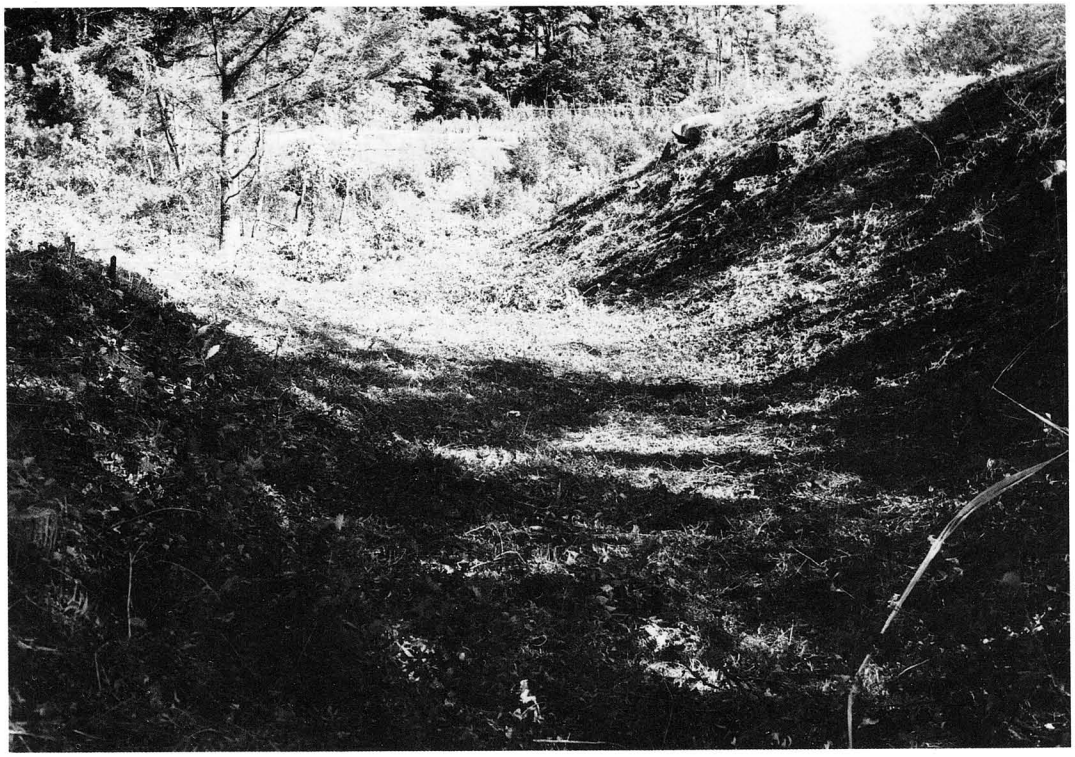


2　第１号堀址東部（北方より）

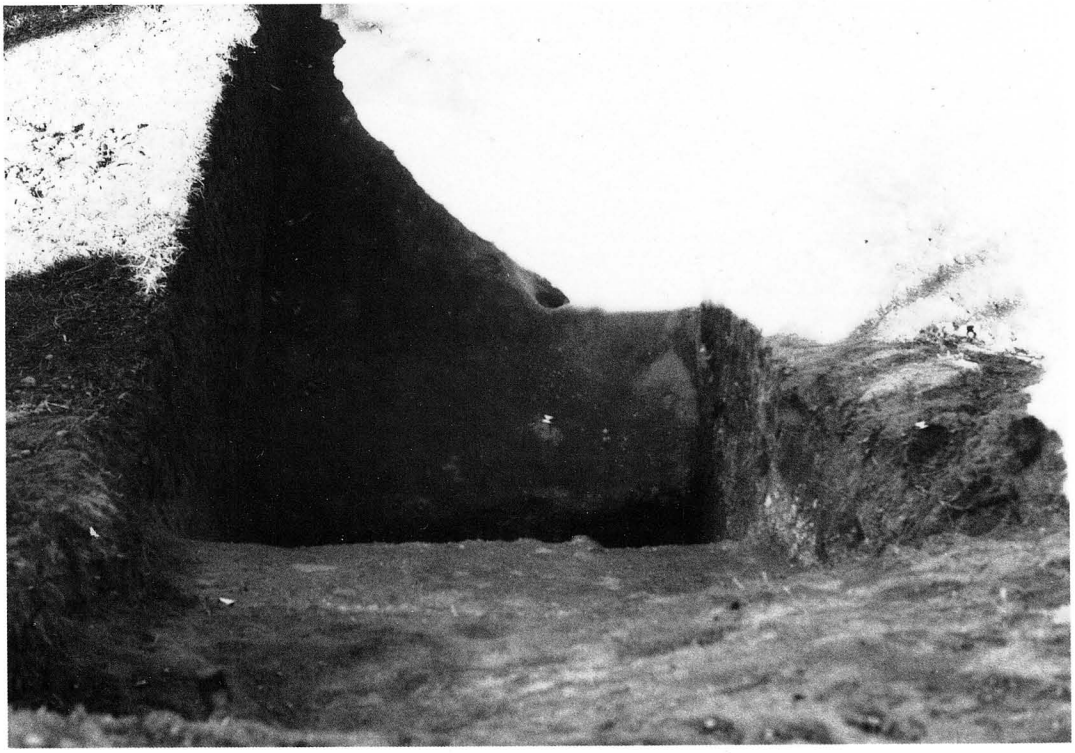
1　第１号堀址土層断面

2　第２号堀址（東方より）

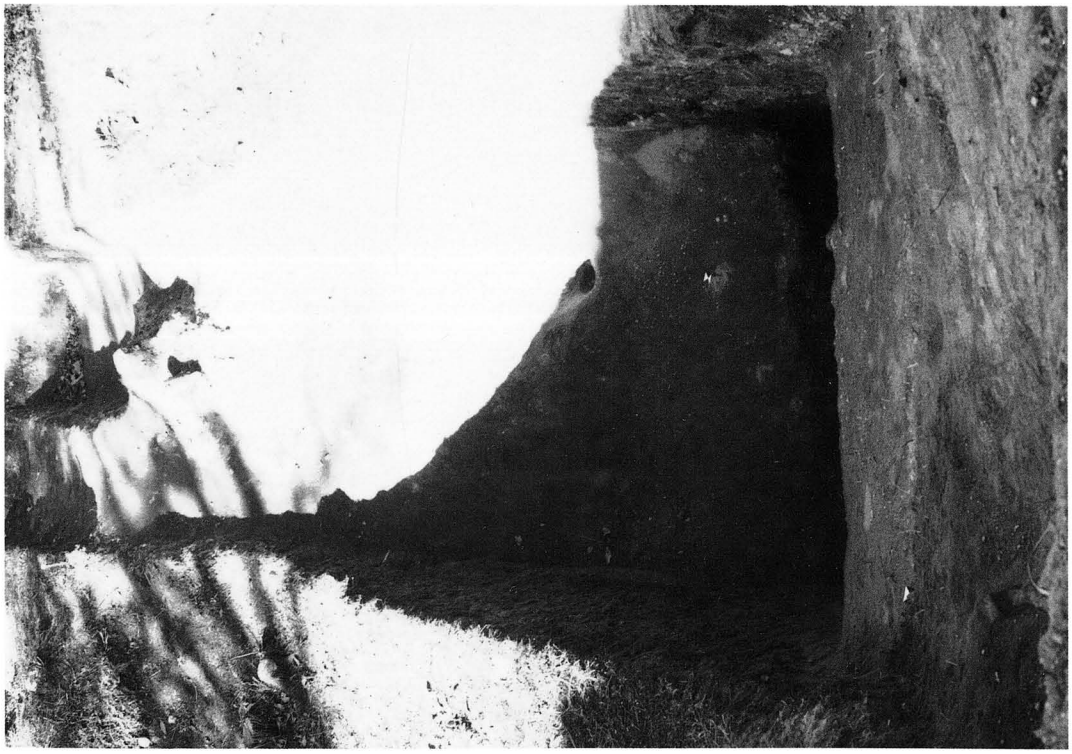
図版 6



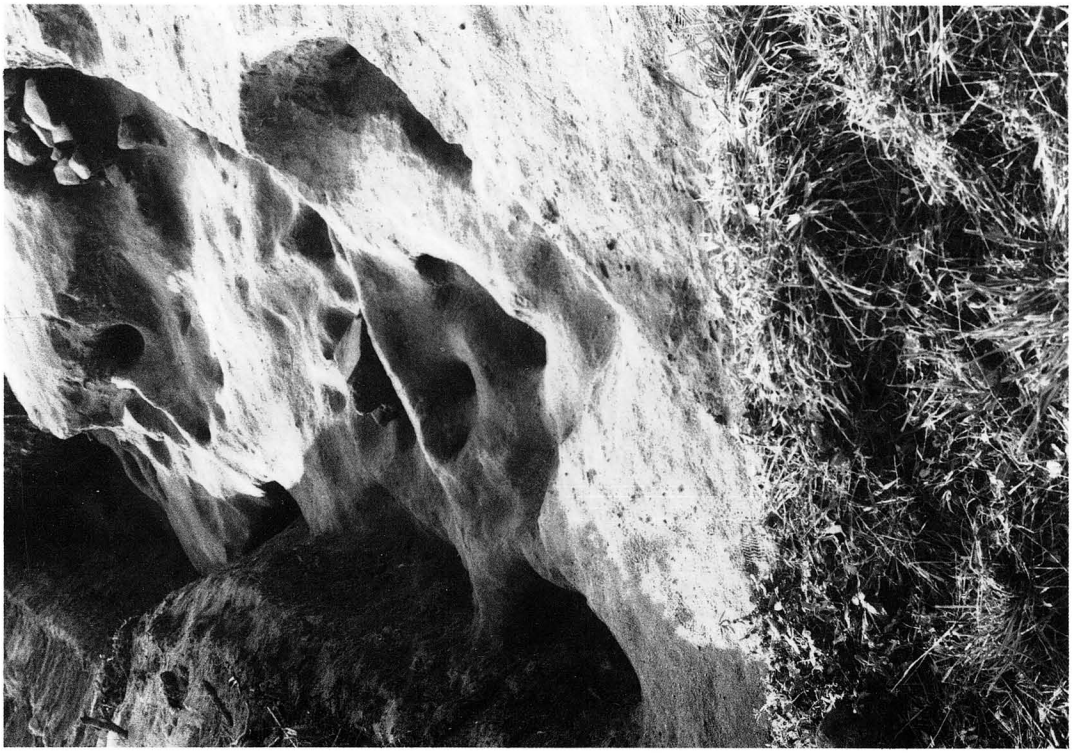
1　第２号堀址（西方より）



2　第２号堀址（南方より）



1　第 2 号堀址（南方より）

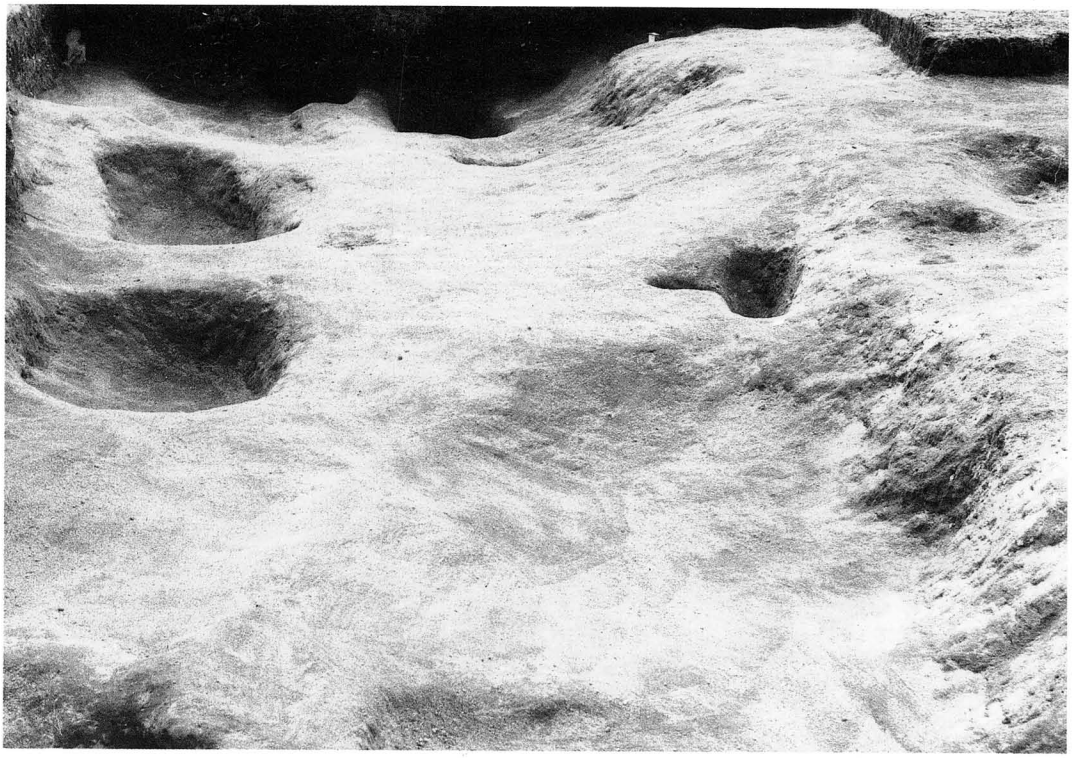


2　第 3 号堀址（南方より）

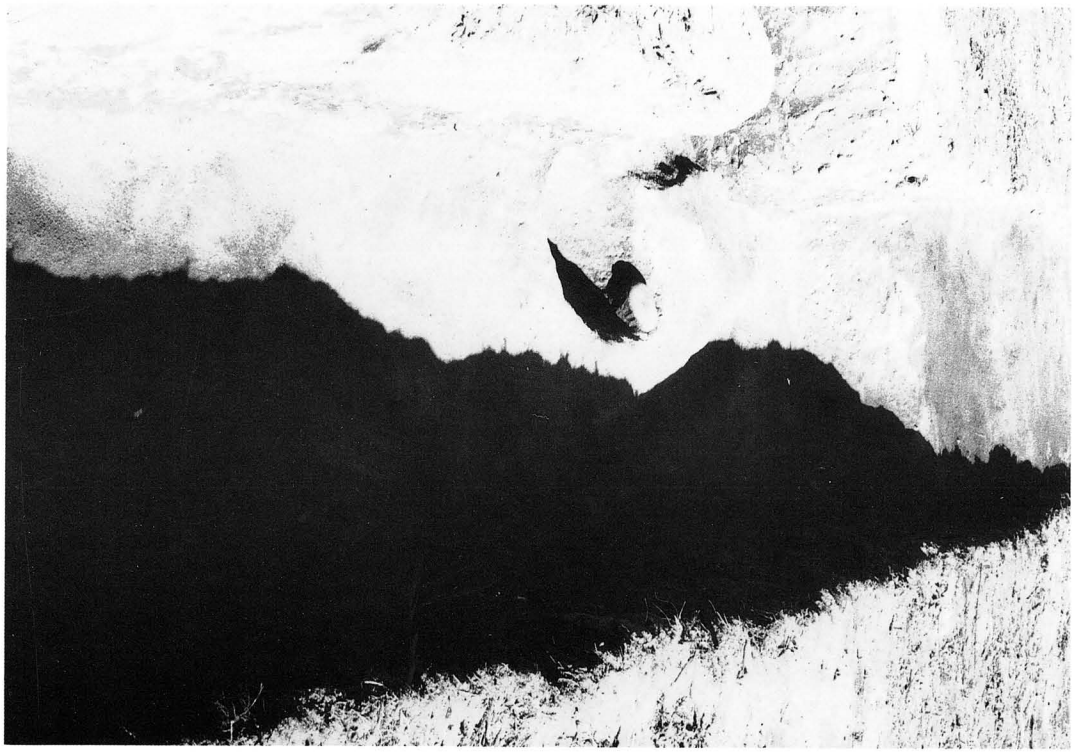
図版 8

1　第 4 号堀址（北方より）

2　第 5 号堀址（北方より）

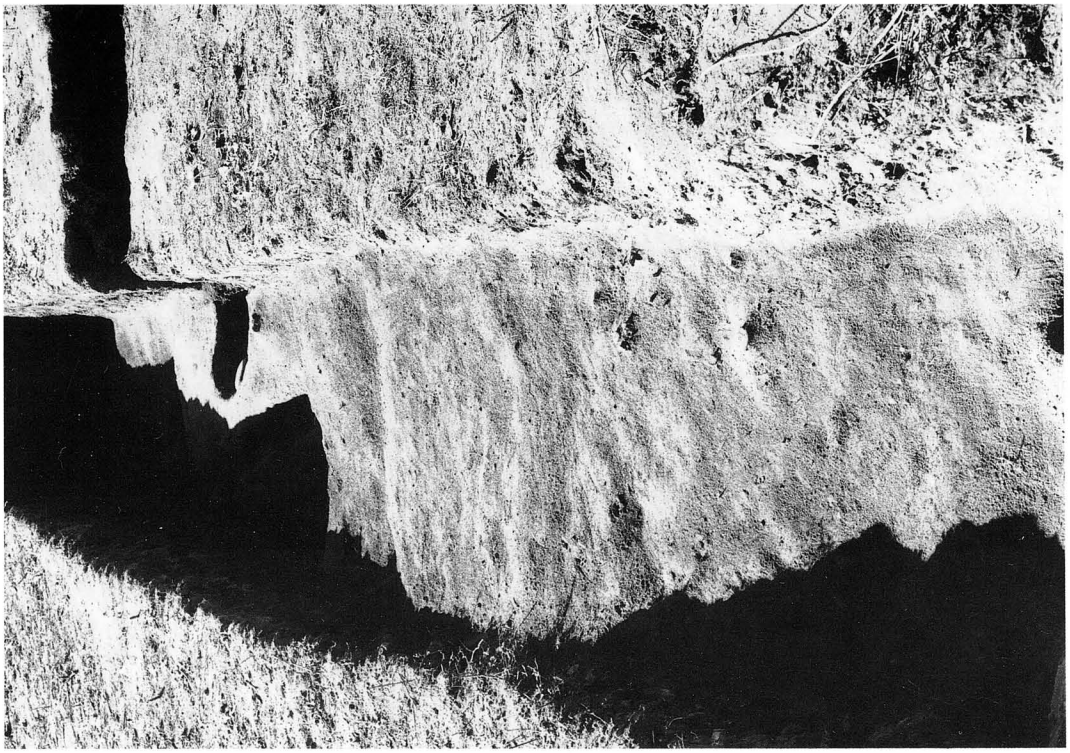


1　第１トレンチ（第１次面、東方より）

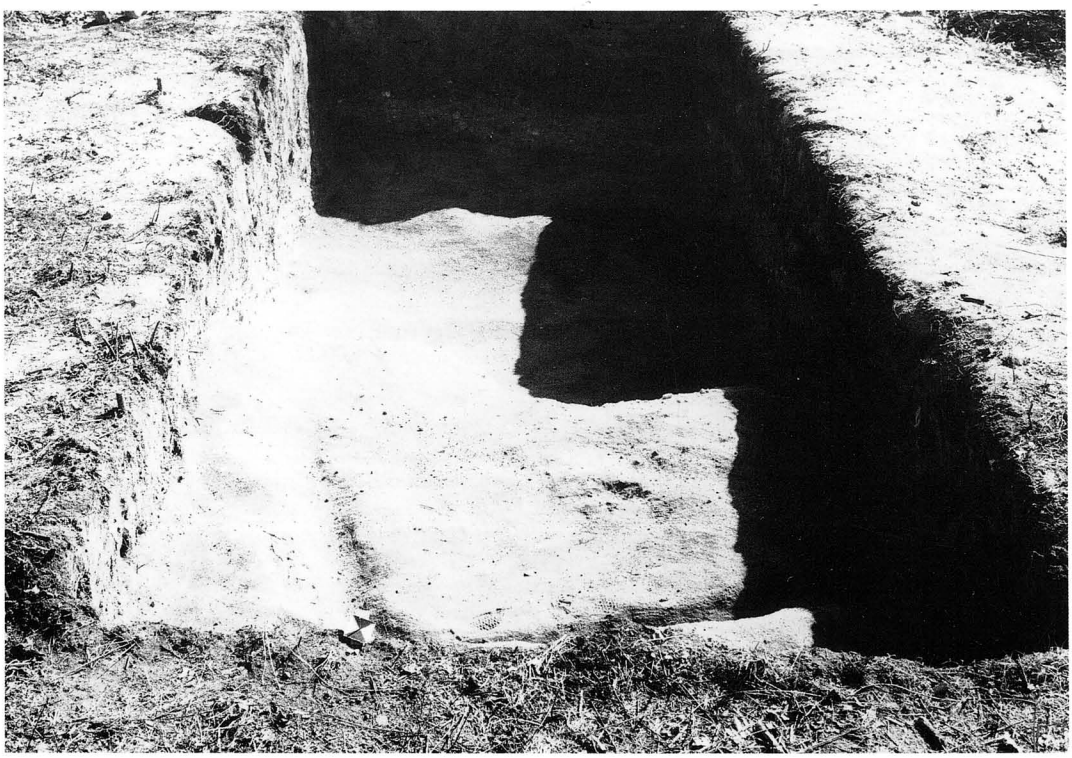


2　第２トレンチ（西方より）

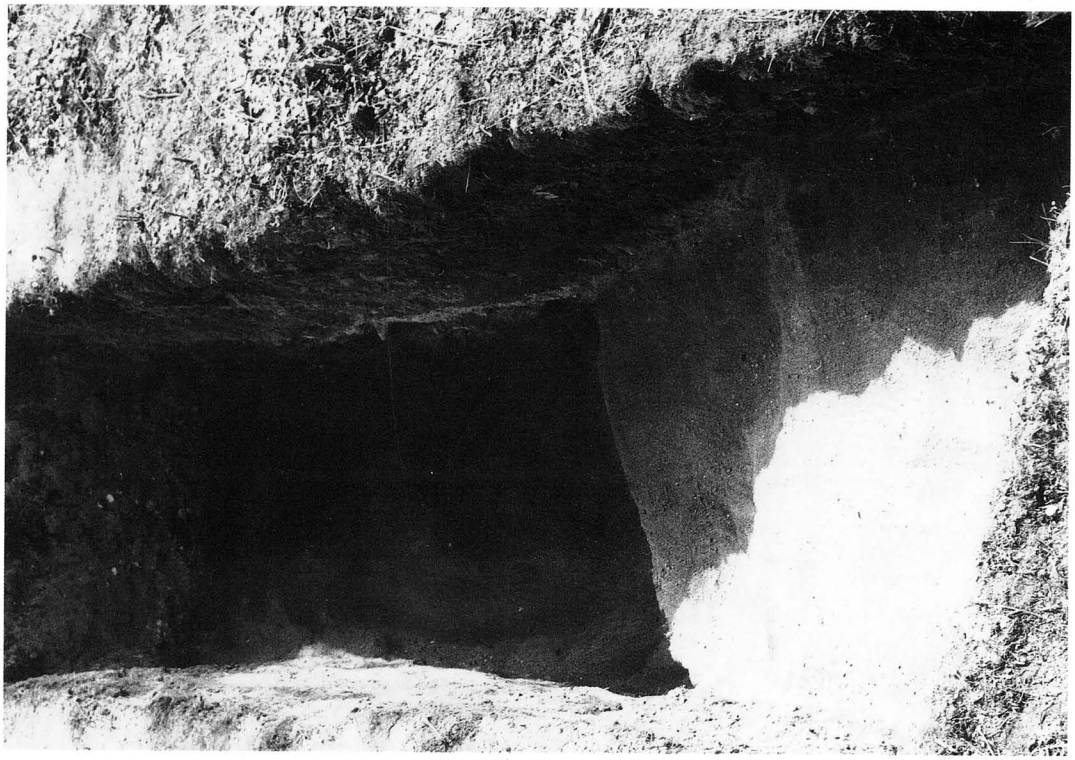
図版10



1　第2トレンチ（東方より）



2　第4トレンチ（第1次面、北方より）

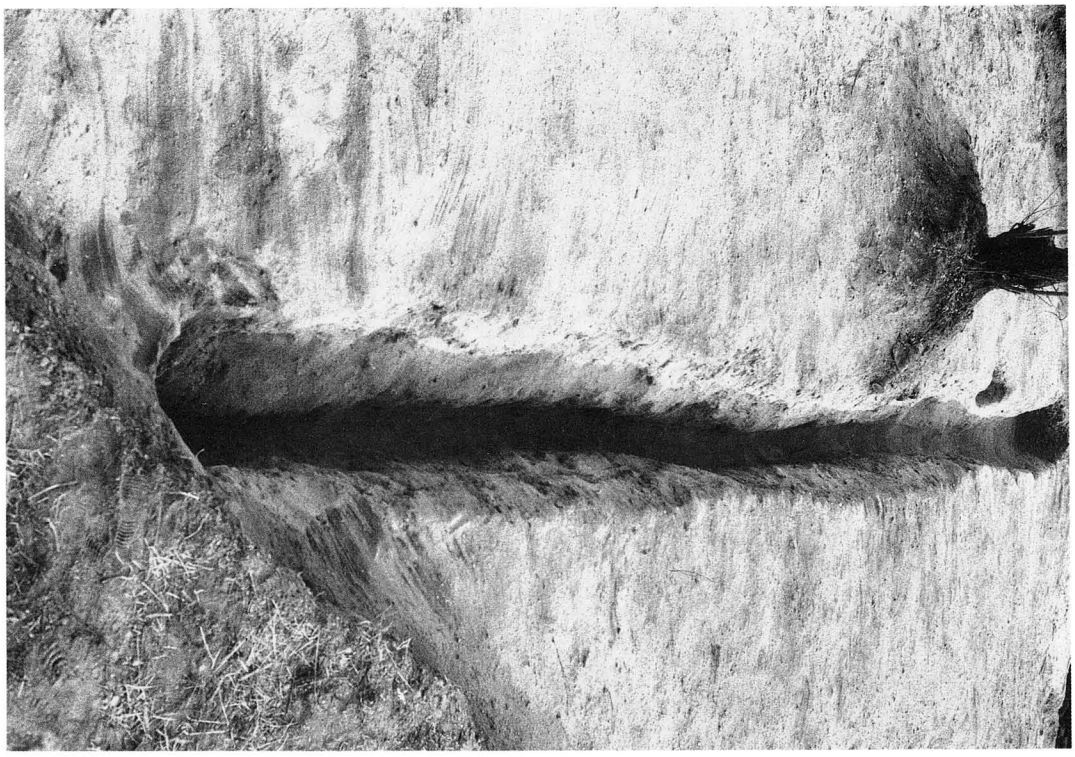


1　第５トレンチ（第１次面、北方より）

2　第１号溝状遺構（南方より）

図版12

1　第２号溝状遺構（北方より）

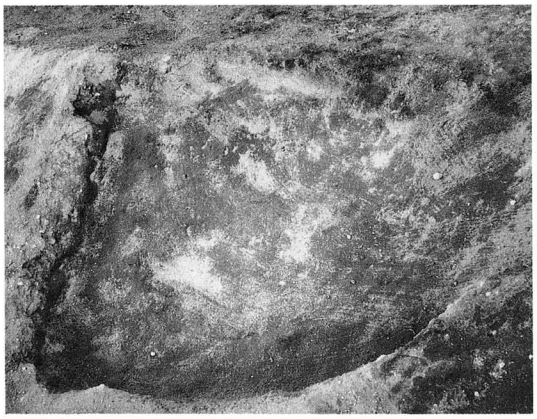


2　第３号溝状遺構（西方より）

1　第４号溝状遺構（西方より）

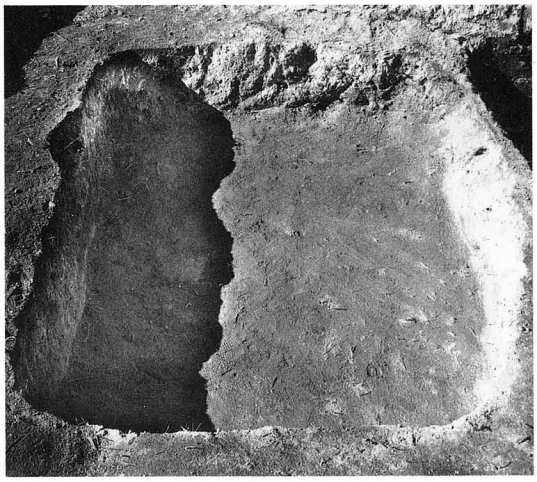
2　第１地区近景（南東より）

図版14

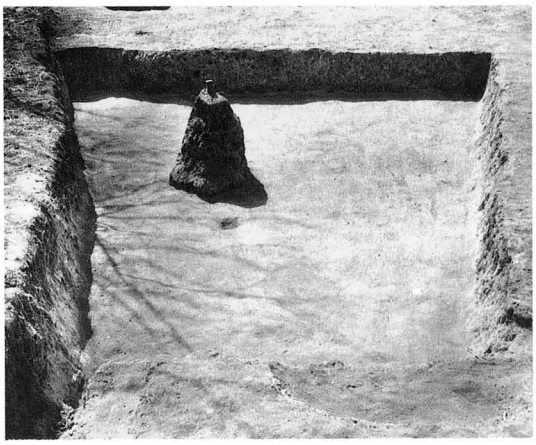


1　第１号堅穴状遺構（西方より）

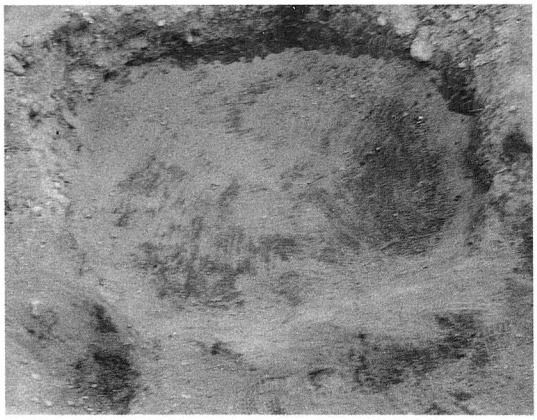
2　第２号堅穴状遺構（南方より）



3　第４号堅穴状遺構（南方より）



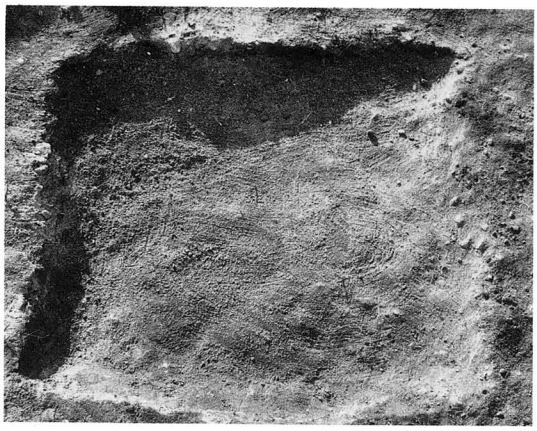
4　第５号堅穴状遺構（南方より）



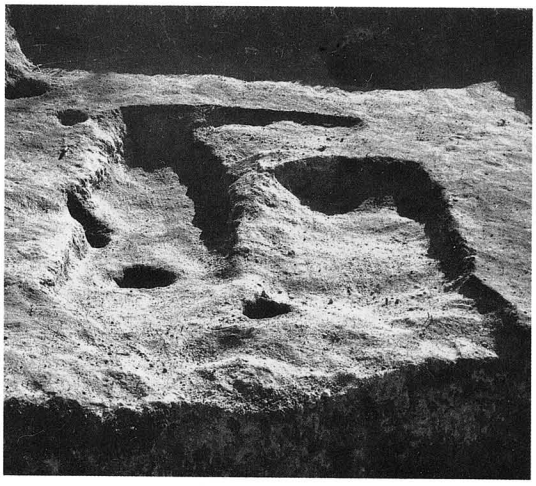
5　第１号土壙（西方より）

6　第２号土壙（南方より）

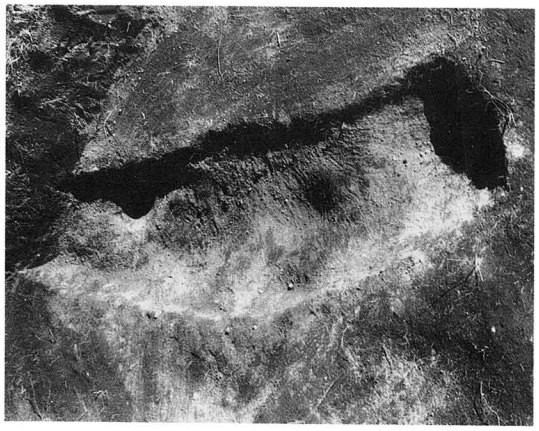
1　第５号土壙（南方より）



2　第６号土壙（西方より）



3　第７号土壙（東方より）

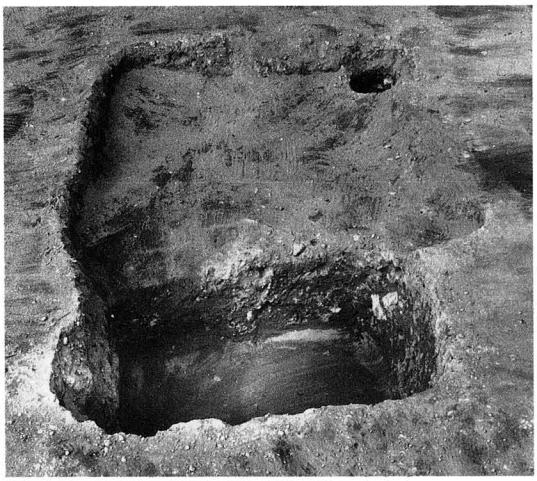


4　第８号土壙（北方より）

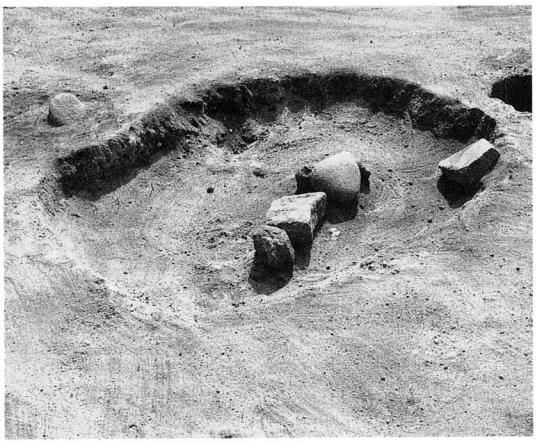
5　第９号土壙（南方より）

6　第10号土壙（西方より）

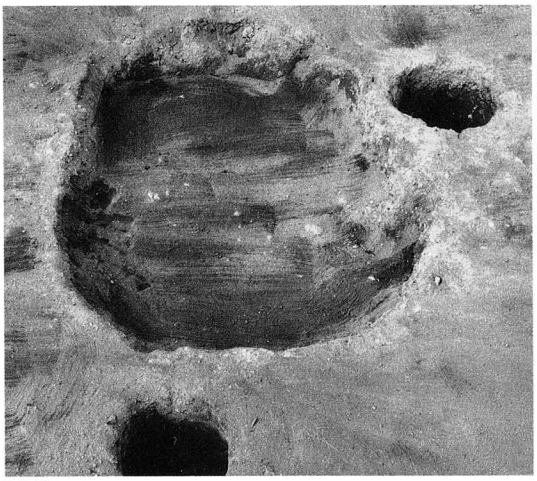
図版16



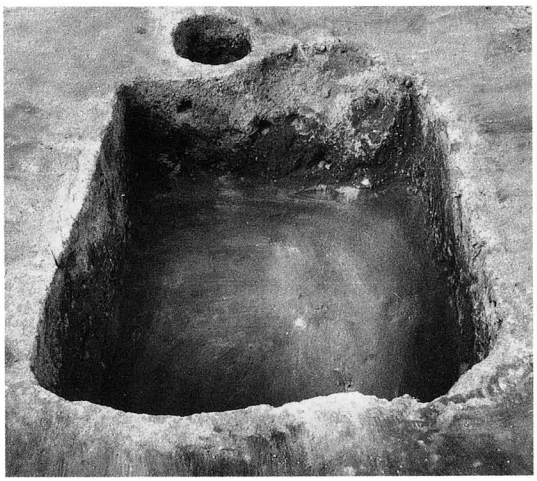
1　第11号土壙（東方より）



2　第12号土壙（東方より）



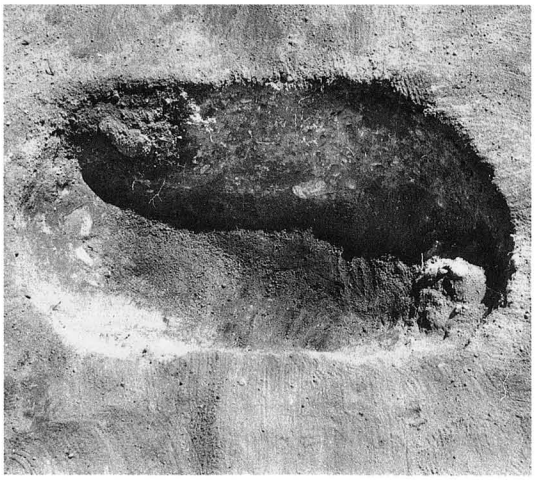
3　第12号土壙（西方より）



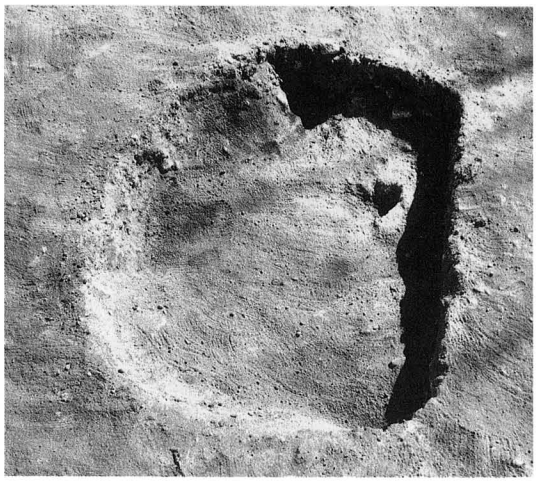
4　第13号土壙（西方より）

5　第13号土壙遺物出土状態

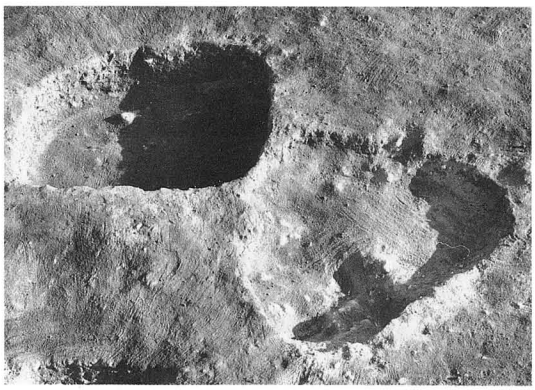
6　第14号土壙（北方より）



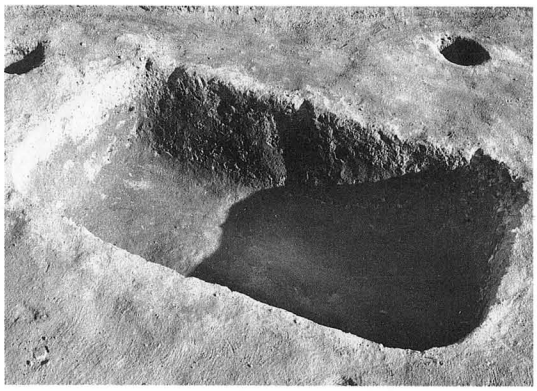
1　第15号土壙（東方より）



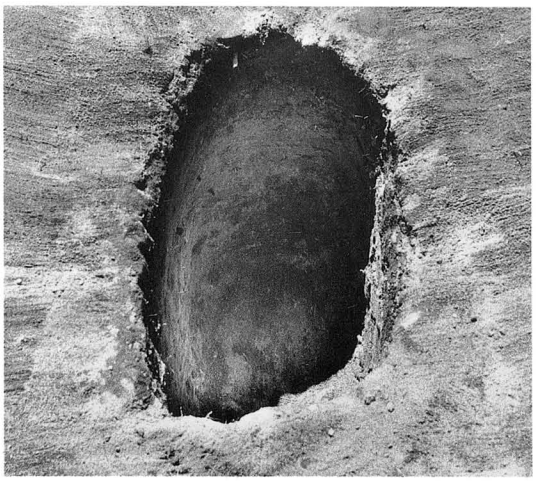
2　第16号土壙（北方より）



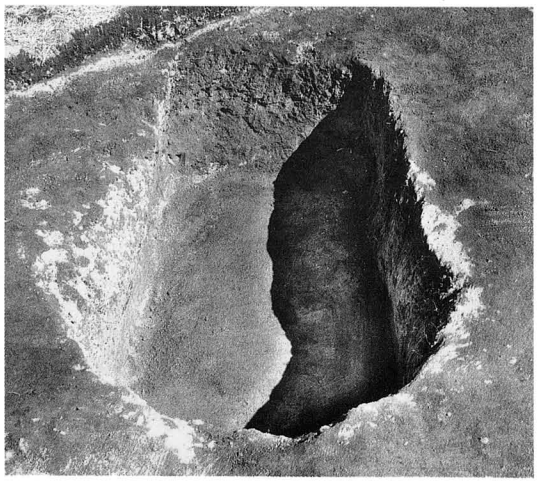
3　第17・18号土壙（南方より）



4　第19号土壙（東方より）

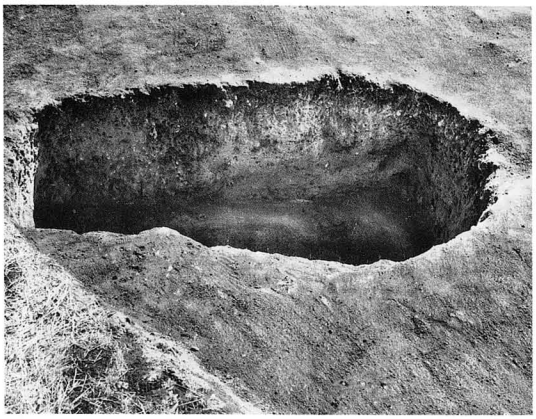


5　第20号土壙（東方より）



6　第21号土壙（北西より）

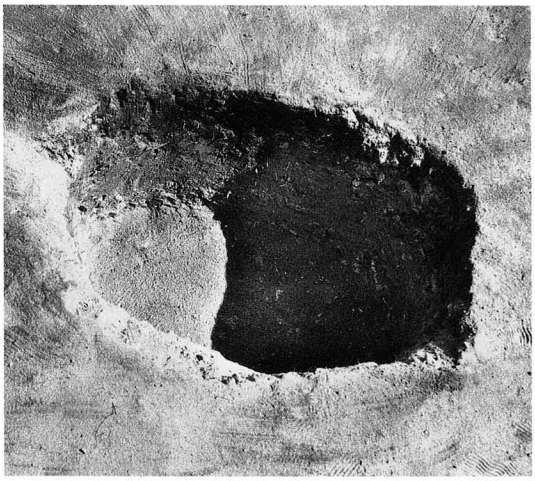
図版18



1　第21号土壙（北方より）

2　第22号土壙（南方より）

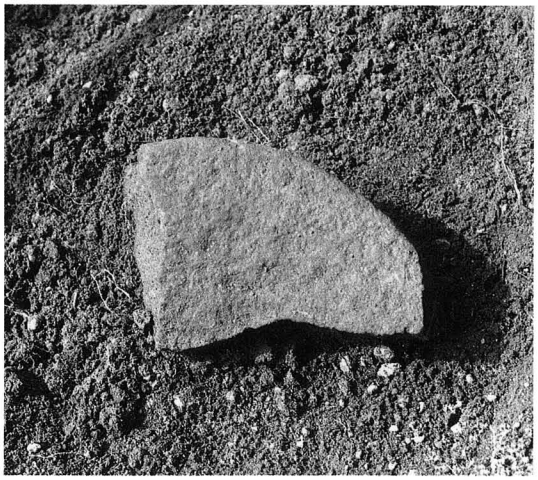
3　第22号土壙（西方より）



4　第23号土壙（西方より）

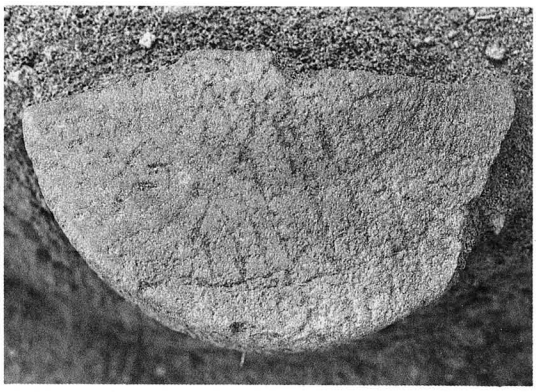
5　第24号土壙（東方より）

1　第1号堀址石臼出土状態



2　第1号堀址石臼出土状態

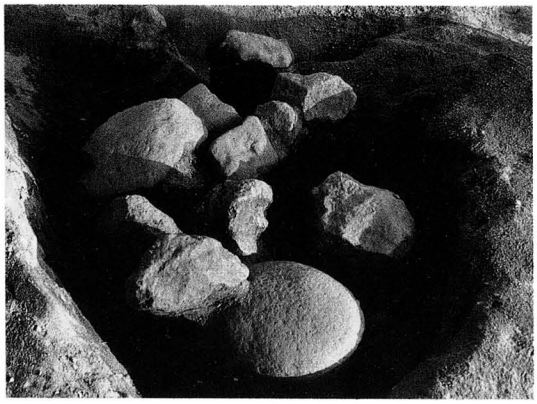
3　第1号堀址鉄釘出土状態



4　第2号堀址石臼出土状態

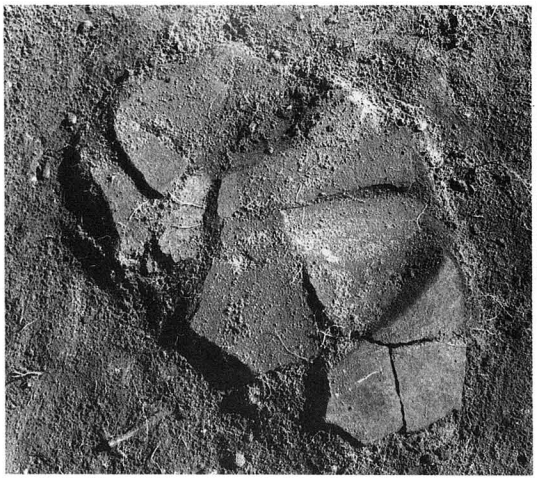
5　第3号堀址石臼出土状態

図版20

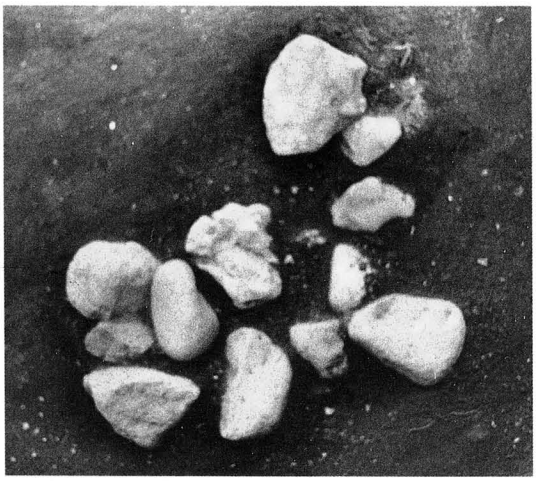


1　第３号堀址礫出土状態

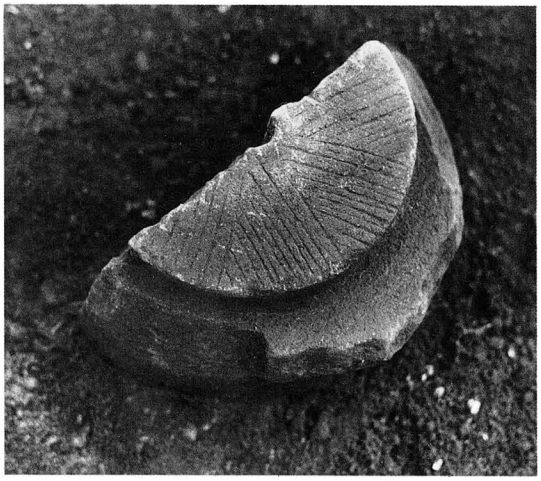
2　第１トレンチ石鉢出土状態



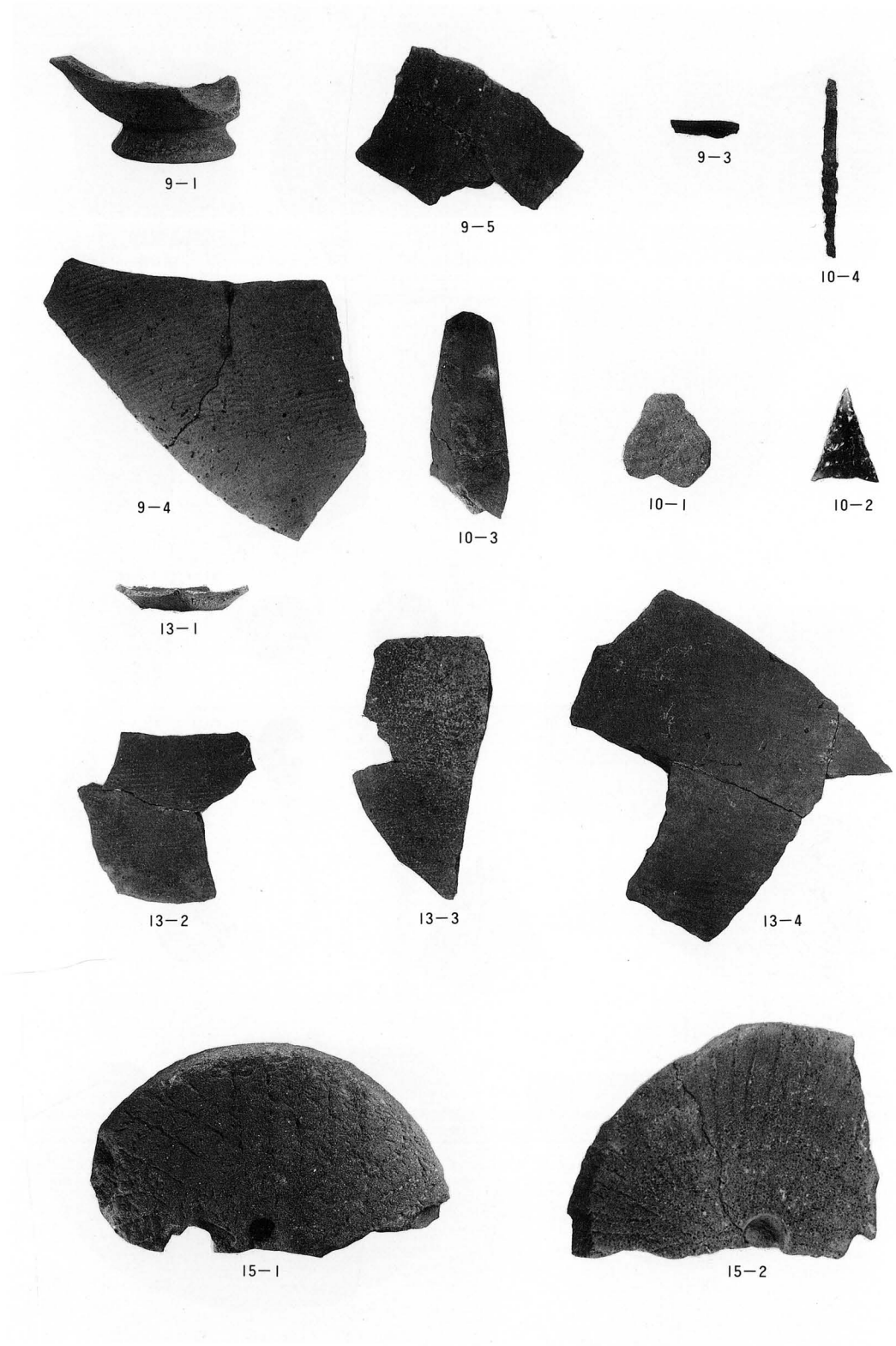
3　第１トレンチ内耳土器片出土状態



4　第５号トレンチ礫出土状態

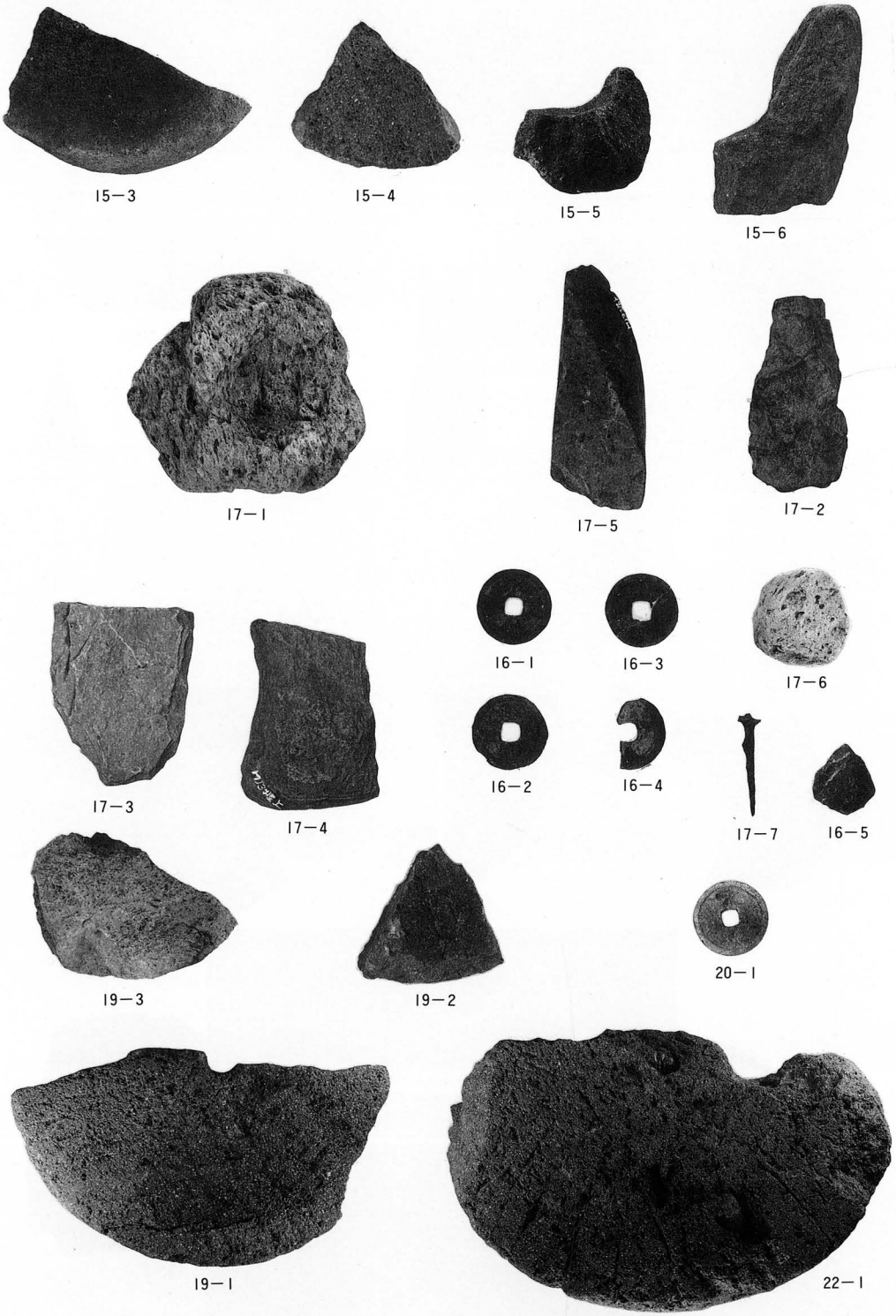


5　第２号土壙石臼出土状態

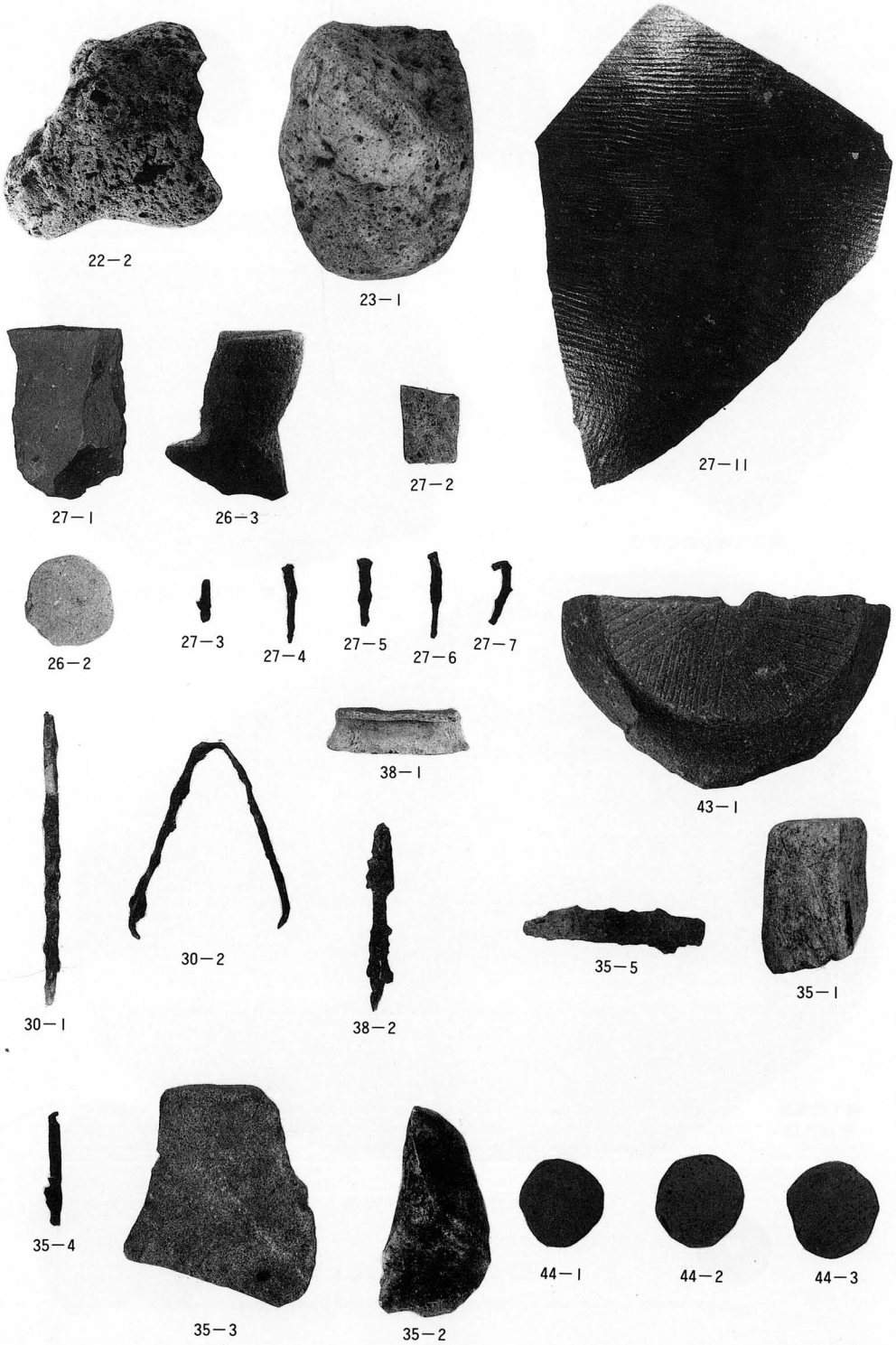


第１・２号住居址，第１号堀址出土遺物

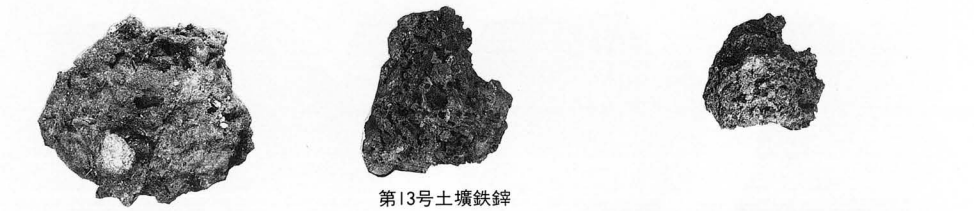
図版22



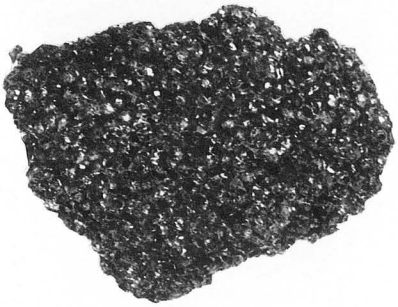
第１～３号堀址出土遺物



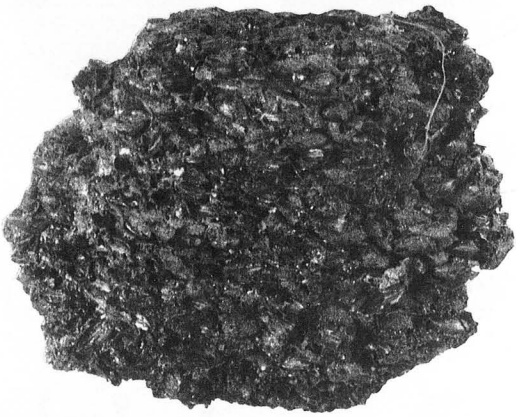
第３号堀址，第１・５トレンチ，第２号溝状遺構，土壙出土遺物



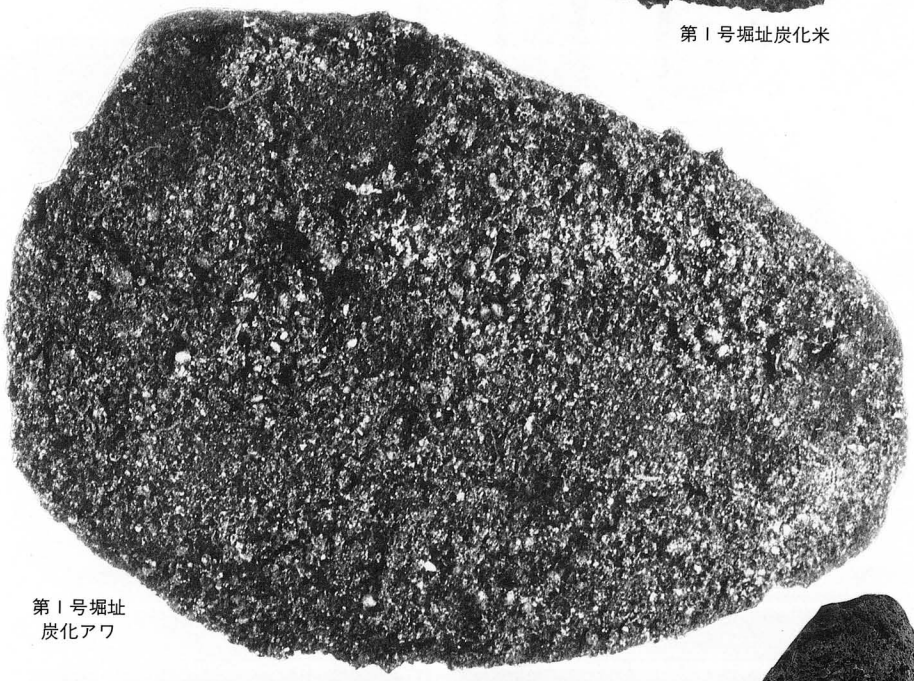
第13号土壙鉄鐸



第Ⅰ号堀址炭化アワ



第Ⅰ号堀址炭化米



第Ⅰ号堀址
炭化アワ

46－3

46－2

46－1

第13号土壙・第１号堀址，遺構外出土遺物

長野県小諸市耳取城跡・古城遺跡発掘調査報告書

昭和61年3月　発行

編集者　耳取城跡発掘調査団
発行者　佐久建設事務所
　　長野県小諸市教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社